

●イタリア語訳『源氏物語』「若紫」データ

小見出し	イタリア語訳（モッティ訳）	イタリア語訳（オルシ訳）
1 瘡病をわずらった光源氏はすすめにより北山の聖のもとへ出かける	源氏は三日熱に冒された。多くの呪術やまじないを試みたが効果がなく、発作が繰り返して続いていたが、前年の夏（三日熱が流行したが、通常のまじないでは何の効果も見られなかった）に多くの患者を見事に治癒させた聖者が北山の寺院に住んでいる、と言う者があった。「ぐずぐずせずその方にご相談なさい。無駄な治療をいろいろ試み続けている間に、病気がさらに進んでしまいます」彼はすぐさま聖者を迎えるために使者を送ったが、聖者の答えは、老齢で体が弱っているため、もはや旅はできないということだった。源氏は言った。「それではどうしたものだろう？ こっそりその人のところへ行こう」わずか4、5人の信頼できる従者を引き連れ、夜の明けをずっと前に出発した。かなり山の奥深い場所だった。	断続的に続く熱病に苦しみ、加持祈祷をさせてみたが快復の兆しなく、発作が繰り返して襲ってきたとき、「都の北方にある山奥の寺に、信心深い隠者が住んでいます。昨年の夏に伝染病が蔓延したときも、他の行者は成功しなかったのに、多くの人を回復させることができました。病がひどくならないうちに、試してみたいかがでしょう」と誰かに言われ、使者を送ったが、その僧は年を取りすぎていて体調も悪く、もう庵から出ることもない、という返事があった。自分自身がお忍びでそこへ行く以外に方法がないと思い、四、五人の信頼できる従者を連れて夜明け前に出発した。寺院は山深い場所にあった。
2 聖は、峰が高い山に囲まれた奥深いところに籠り、修行をしている	3番目の月の最後の日、都では桜はすでに散っていた。山桜はまだ花開いていなかったが、源氏が広々とした野原に近づくとつれ、霞が何ともいえない不思議な形状を帯びてきて、さまざまな社会のしきたりによって行動を制限され、このような光景をほとんど目にしたことのない源氏にとってはきわめて魅力的だった。寺院も彼の心を捉えた。聖者は高い断崖に掘られた深い洞窟の中に住んでいた。	3番目の月も終わりに近く、都の花はすでに散っていた。一方、山の桜はまだ満開で、進んでいくにつれ、春の霞に包まれた風景は、身分上行動を制限されていてこのような旅に慣れていなかった彼の目には、新鮮で心地よいものだった。寺もうっとりするような美しさを備えていた。 高い山と深い岩に囲まれ、人里離れた場所にその僧は住んでいた。
3 光源氏は自分を誰とも知らせず、驚き騒ぐ聖から加持祈祷を受ける	源氏は自分の名を伝えさせず、変装して身分を隠していたが、彼の顔はよく知られていたため僧侶はすぐに気がついた。僧侶は言った。「失礼ですが、もしや、先日私をお招きになったお方ではありませんか？ もう世間のことを気かけなくなって、どのように治療していたか忘れてしまったのではないかと思います。このようなどころまで来ていただいて本当に申し訳ないのですが」当惑したふりをして、笑いながら源氏を見つめた。だが、すぐに立派な信仰と学識を持った人物であるとわかった。あらゆる文字でいくつかの呪文を書いて治療に適用させ、まじないを読み上げた。日が昇ったところに施術が終わり、	彼は名前を明かさなかったが、質素な身なりだったとはいえ、その素性はまぎれもなく明らかだった。「何と光栄なことでしょう、幾日か前に私のことを尋ねられたお方に違いありません」僧は驚いてこう叫び、彼を見つめて微笑みながら言い足した。「いまや世を捨てた身であり、世間のしきたりも忘れてしまいました。わざわざこのようなどころまでお越しいただき、まことに申し訳ないことでございます」その人はたいへん徳の高い僧だった。必要な薬を調合して飲ませてくれ、加持祈祷が終わる頃、太陽はすでに空高く上っていた。
4 光源氏は高い所から見た目がきちんとしたきれいな僧坊を見つける	源氏は洞窟から外へ出て周囲を眺めた。彼のいる高台からは、下の方に隠者の住まいがたくさん散在しているのが見えた。曲がりくねった小道が一つの小屋に向かって下っていた。他の家と同じように小さな灌木の垣に囲まれていたが、他よりも幅広く建てられ、趣のある並木道の樹木は柱廊のようで、丁寧に刈り込まれた若木が家全体を囲んでいた。その家は誰のものかと彼が尋ねると、従者の一人が、2年前からある僧院長が隠通して住んでいると言った。その名を聞いて源氏は言った。「その方ならよく知っている。この服装と護衛の有様ではお目にかかりたくはない。何もご存じなければよいが……」	若君は少しの間外に出て、あたりを見渡した。彼のいる場所は高い位置にあり、眼下のそこかしこに僧の住まいを見ることができた。曲がりくねった小道の突き当たりに、他のものと似ているが、より入念に造られた竹の生け垣、優雅な佇まいの棟と廊下、感じよく植えられた樹木などが見えた。「誰があそこに住んでいるのだろうか？」と聞くと、護衛の一人がこう答えた。「二年ほど前に隠遁された、何某という僧院長のお住まいでしょう」「それはご立派なお方だから、私の服装は場違いだ。私がここにいるのをご存じなければよいが」
5 なにかし僧都の僧坊で、光源氏は若い女性と子どもたちの姿を見る	ちょうどその時、きれいな着物を着た子供たちの一団が家から出てきて、いつも仏壇や仏像を飾る花を摘みはじめた。「女の子もいる」源氏の従者の一人が言った。「僧院長様が女を家に置かずがない。だとしたらあの子たちは誰なのだろうか？」その好奇心を満たすため、少し下に降りて彼女たちを観察しはじめた。そして戻ってきて言った。「まさにその通りです。とても可愛い少女たちで、もう大きい子もまだ小さい子もいます」	庭で花を摘み、仏様にお供えする水を汲んでいる娘たちの姿ははっきりと見えた。「女もいるぞ」「信心深い方が女性を侍らすことなどあるのだろうか？」「いったい誰だろう？」護衛の男たちは口々に言い合った。何人かは様子を見に下っていき、こう報告した。「娘と若い女と小さい女の子たちがいます」
6 供人たちは病を気にする光源氏を、気分転換のために外へ連れ出す	源氏は治療にほぼ午前中いっぱい費やした。呪術がようやく終わり、従者たちはいつもこの時刻に熱が上がっていたことを心配し、気晴らしのために、山の少し上の都が一望できるところまで彼を連れて行った。「何という美しさだ。	所定の儀式を行ったものの、時間が経つにつれて熱がぶり返すのではないかと、と若君は心配になったが、従者たちはこう言った。「少し気晴らしをして、あまり心配なさらぬ方がようございます」後ろの丘に登り、足下に広がる都の風景を眺めた。

<p>7 光源氏は後ろの山から、遠くまでずっと霞がかかった景色を眺める</p>	<p>遠方は霞が濃淡を作り、一面の森があちこちできらきらと輝いている。このような場所に住む人が一瞬でも不幸せになることがあるだろうか？」と源氏は叫んだ。 従者の一人が言った。 「ここなど大したことはありません。もし他の地方の湖や山をお見せできたら、今お褒めになっている光景よりどれだけ美しいかわかりになるでしょう」 そして、まず富士山をはじめとする名峰のこと、それから西国のうっとりするような入江や砂浜について話しはじめ、源氏は熱が出る時刻であることをすっかり忘れてしまった。</p>	<p>うっすらとした霞が限りなく広がり、あちらこちらに木の先端がぼんやりと見えた。 「まるで絵のようだ。こんなところに住んでいる者には他に望むことなどないだろうな」 「それほどたいしたものではございません」 従者の一人が言った。 「他の地方の海や山の風景でしたら、殿下のお描きになる絵には格好の題材になるでしょうか」 「富士山や何某の山とか」 もう一人が言った。さらに他の者たちが西の地方にある浜辺や湾の話をし、こうして若君の気を紛らわせた。</p>
<p>8 良清は、光源氏に官位を捨てて播磨で暮らす明石の入道の話をする</p>	<p>従者は海を指して話し続けた。 「あそこの、こちらに一番近いのが播磨の明石湾です。よくご覧ください。そんなに便の悪い場所ではありませんが、広大な無人の海しかなく、すべてから孤立しているという印象を与え、私が知っている中でも、最も不思議で怪しい場所の一つです。そして、まさにその地で、かつて地方の知事だった在家の僧侶の娘が、見たこともないほど風変わりな御殿を守っています。父親は筆頭大臣の血筋で、輝かしい地位が約束されていました。しかしとても奇矯な性質の人物で、人づき合いを嫌っていました。しばらくの間、宮中護衛隊の将校でしたが、辞任して播磨の知事になることを承諾しました。しかし、間もなく地元の人と対立するようになり、不当な扱いを受けたので都に戻ると宣言しましたが、結局何もせず、剃髪して在家の僧侶になりました。それから、人里離れた山奥へ隠居するのが常だったのに反して、奇妙に思われるかもしれませんが、海岸に家を建てました。実際のところ、その地方では多くの隠遁者が住処に選んだ場所はまちまちですが、山間部は必ず抜けて陰気で人里離れていますから、若い奥方や娘には厳しい試練となっていたでしょう。そういうわけで、妥協案として沿岸部を選んだのです。</p>	<p>「この近くでは、播磨国の明石の海岸がとても美しいです。特に何かあるというわけではありませんが、広大で静かな海が広がっている光景は、他のどの場所とも違います。最近出家し、一人娘を大切に育てておられる播磨の前知事が、そのあたりの立派な屋敷に暮らしています。ある大臣の甥で、輝かしい将来が約束されていたようですが、風変わりな人物で人付き合いを好まず、宮中護衛隊第二司令官の職を辞退して、自ら求めて知事の地位に就きました。だが地元の人をも彼をあまり尊重しなかったらしく、剃髪してしまいました。どんな名誉をもって都に帰ることができたでしょう？ 山の中に隠遁するのではなく、浜辺に居を構えるというのは、確かに少し変わっています。播磨地方には、俗世間から離れて隠居生活のできる場所が間違いなくありますが、人気のない山里で暮らすのは、夫人やお嬢さんにとっては辛すぎるでしょうし、それに明石という土地は、ふさいだ気分を忘れるのに打ってつけの場所です。</p>
<p>9 光源氏は話を聞いて、誇り高いという明石の入道の娘に興味を持つ</p>	<p>一度、播磨地方を旅したついでにその家へ行きましたが、都では質素な暮らしをしていたのが、ここではありとあらゆる手段を使って、これ以上ないほど壮麗な家を建てたのに気づきました。自分の身に起きたことにもかかわらず（今では知事の気苦労から解放され、残された日々を可能な限り安楽に過ごそうと決めたのです。もちろん次の世に備えての修行も続けていて、本当の僧侶でもこれほどまでに敬虔で厳しい生活を送ることはできないでしょう） 「それはそうとして、娘さんのことを話していたのではなかったか？」 と源氏が言った。</p>	<p>少し前に播磨に行ったとき、私はその人をお訪ねしましたが、都では無視されていたのと打って変わって、そこでは広大な領地を管理し、立派な邸宅を建て、何と言っても知事だったわけですから、余生を裕福に過ごせるように計画を立てていました。熱心に仏道修行に励んでいて、今は出家していますから、より多くの信望を得たように思われます」 「それで娘さんは？」 と尋ねた。</p>
<p>10 明石の入道は上昇志向が強く娘は容貌と氣立てが良いとの話が出る</p>	<p>その男は答えた。 「なかなか魅力的ですし、愚かとは正反対です。その地方の多くの知事や役人が彼女に注目して、熱心に求婚しましたが、父親はすべて断ってしまいました。自分は俗世間の栄光には興味ないのですが、唯一の人生の目標である一人娘が自分を不遇の状態から解放してくれるはずだと決めたようです。もし娘が自分勝手に行動して、自分が死んだときに、他愛ないまぐれを満足させるためにその企てや希望を裏切ったなら、幽霊になってこの世に現れ、海を呼んで娘を沈めようと言ったそうです」 源氏は注意深く聞いていた。 「それはまるで深海の竜王以外は夫に持てない処女の巫女ようだ」 そして年老いた前知事のぼかぼかしい野望を皆で笑った。</p>	<p>「悪くありません。氣立でも器量もいいと聞いております。後任となった代々の知事たちは、彼女にとっても興味を示しましたが、父親はいつも拒絶していました。自分の人生は失敗でしたが、たった一人のお嬢さんに関しては、他に目論みがあるのです。『もし私の死後、私の希望が頓挫して、お前の将来が私の目論んでいたところと違ってしまったら、お前は海に飛び込んだ方がいい』まるで遺言のように、こう娘さんに繰り返しているようです」 若君は興味深そうに聞いていた。 「それは貴重な娘だ。それならば、深海の王に嫁ぐ運命なのだな」 「野心にも短所はあるものだ」 男たちは笑いながら言った。</p>
<p>11 供人たちは明石の入道の娘を洗練されていない娘であると言い合う</p>	<p>この話をしたのは播磨の現知事の息子で、財務局の職員から前年に第五級の役人の記章を賜っていた。色恋沙汰で有名だったため、明石の海岸を訪ねるために道を変えたのは、その婦人を父親の意向に背くよう説得するつもりだったのだ、と仲間たちは嘸きあった。 「いささか田舎者に育ったに違いないと思う。昔気質の両頬以外に相手もなく大きくなったのだから、避けられないことだ」と一人が言った。 「だが母親はしかるべき家の出のようだが」 「もちろん！ まさにそのために、都の良家の子女を集め、海辺の滞在で興味を引いて娘の幼友達にすることができた。だから娘は洗練された教育を受けているのだ」と知事の息子の良清が言った。 「もしその辺りに破廉恥な男がやって来たら、娘からその男を遠ざけるには亡き父親の呪いでは十分とは言えないだろう」 ともう一人が言った。</p>	<p>その話をしてくれた若者は、現在の播磨の知事の息子で、書記官を務めた後、その年に五番目の位の役人になっていた。 「恋愛事が好きだから、知事の意向を台無しにしようと考えているのだろう」 「たぶんそのためにあのあたりに入り浸っているのだ」などと護衛の男たちは言い合った。 「言いようもあるな。美しいことは美しいのだろうが、子供のときから昔気質の父親の言いなりで、そんなところで育った、所詮は田舎者だ」 「だが、母親はいい家柄の生まれに違いない。その親交のおかげで、都の良家から選ばれた若い娘や少女を自分の周りに集め、娘にありとあらゆる気配りをしている」 「だが、もし鈍感な人が知事としてやってきたら、事はそんなに順調には行かないだろう」誰かがこう言い足した。 「この海のように深い執拗さはいったいどうしてなのだろう？ 海の底の方は海藻だらけで、あまり楽しくはないはずなのだが……」</p>

12 娘を気にする光源氏を、供人は風変わりな好む性質があると察する	この話は源氏の想像力を強くかき立てた。従者たちがよく知っているように、彼は世の中や人々に起こる奇妙なことや不思議なことには何でも惹きつけられるのだった。だから、彼が熱心に聞いているのを見ても驚きはしなかった。	その話題にこのほか興味を引かれた若君が言った。風変わりな話を偏愛するご性分だから、関心をお寄せになるのはわかっていた、と従者たちは囁き合った。
13 都へ帰ろうとした光源氏は大徳の言葉に従って明け方まで滞在する	従者の一人が言った。「正午もだいぶ過ぎましたし、もう発作が起こることもなく一日を過ごされると、私たちは安心していられるでしょう。ですから、できるだけ早く家へ戻ってもいいのではないのでしょうか」だが、僧侶は源氏にもう少し留まるように説得して言った。「邪悪な力はまだ完全に駆逐されたわけではありません。夜にもう一度落ち着いて治療の儀式を受けられたほうがいいでしょう。明日の朝はお発ちになれると思います」従者たちは留まるべきだと主張した。このような場所に宿泊するという新しい経験が楽しかったので、彼にとってもこの案は悪くなかった。「では夜明けに出発しよう」と言い、	「日も暮れかかってきましたし、熱も上がりませんでした。宮廷に戻ってもよろしいでしょう」誰かが提案したが、僧が口を出した。「敵意ある霊が貴方に取り憑いていますから、今晚は落ち着いて加持祈祷を続けられ、出発は明朝に延ばした方がよろございます」全員が賛成した。若君は普段と違う経験ができるのが嬉しかった。「それでは明日」と言った。
14 夕暮れ時に僧房をかいま見た光源氏は、気品のある尼僧を見つける	寝るまでにまだかなり時間があって、特に何もすることがなかったので、高台上り、夕刻の深い霧に紛れて灌木の垣の近くをぶらつきはじめた。家来たちはみな隠遁僧の洞窟へ戻り、一緒にいたのは惟光だけだった。源氏が立ち止まった場所の向かいの家の西翼には、一心にお経を唱えている尼僧がいた。鋸戸は一部が開いていた。尼僧は仏像に花を供えているようだった。中央の柱の横に座り、お経の本が書見台に置くように傍らの腰掛けに置かれ、尼僧がもう一人いた。声を上げて読経していたが、その顔には深い悲しみが表れていた。年齢は40代ぐらいで、普通の家柄の女性ではないようだった。肌は色白できめ細かく、かなりやつれてはいたものの、顔の丸みと頬のふよよさは残っていた。眉の高さで切りそろえた前髪が額に垂れている様は粹で、出家した女性の髪型は髪を長く伸ばしているよりずっとおしやれで華やかに見えるものだ、と源氏は思った。	春の一日は長く、何もすることのない若君は、たそがれ時に湧き上がった霞にまぎれ、先ほど見つけた家を見に行った。従者たちを帰らせ、惟光一人を同伴に、生け垣の隙間から覗き見ようとした。西向きの部屋には、仏像の前で一心に祈っている尼僧の姿が見えた。竹の簾が一部上げられていて、おそらく仏に花をお供えしているところだった。部屋の中央にある柱にもたれかかって座り、肘置きには教典が開いたまま置かれていた。読経に疲れたようだったが、どこか並の人とは違う雰囲気があった。おそらく四十歳は越えていて、白く整った顔はやつれて見えたが、頬には柔らかな丸みが残り、短く切った髪は品良く肩にかかるぐらいで、普通に髪を長く伸ばしているより洗練されて当世風おしやれで現代的だ、と感心して思った。
15 光源氏は二人の女房と女童たちの中にかわいらしい少女を見出す	器量よしの侍女が2人尼僧の世話をしていた。一団の少女たちが部屋の中と外を走って遊んでいた。その中に10歳ぐらいと思われる女の子がいた。濃い黄色の布で縁取られたかなり着古した白い上着を着て、急いで部屋に入ってきた。源氏はこのような女の子を今まで見たことがなかった。素晴らしい子供で、大きくなったらどんなことになるだろう！豊かで波打つような髪の毛が頭に暈を作っていた。顔を真っ赤にして唇が震えていた。	その隣にはきちんとした身なりの侍女が二人座り、周囲では幼い女の子が何人か遊びながら出入りしていた。そのうちの一人、白い襦袢と山吹の色の柔らかい着物を着た十歳ぐらいの幼女が、駆け足で入ってきた。他の子たちとはまったく違い、気品のある顔立ちは、大きくなったらどんなに美しくなるだろうと直感させた。髪の毛は開かれた扇のように肩まで垂れ、顔は涙で赤く染まっていた。
16 幼い紫の上は、尼君に「雀の子を犬君が逃がした」と泣いて訴える	「どうしました？ お友達と喧嘩でもしたのですか？」尼僧が話しながら顔を上げ、源氏はこの人と女の子がどこか似ていることに気づいた。母親に違いなかった。「いぬが雀を逃がしたの。衣装籠の中に入れていたあの小さいのを」とがっかりした様子で女の子が言った。	「どうしました？ 誰かと喧嘩でもしましたか？」尼僧が尋ねた。顔を上げると、少女と似たところがあるのに気づき、この子は娘ではないかと彼は考えた。「いぬきが雀を逃がしてしまったの。私はちゃんと籠に入れておいたのに」悔しそうに幼女は答えた。
17 雀を逃がして残念そうな紫の上の様子に少納言の乳母が立ち上がる	「まあ、いぬったらなんて悪い子なんでしょう！」2人の侍女のうち一人が言った。「このような愚かかないずらは、叱りつけてやらなければ。それにしても雀はどこへ行ってしまったんでしょうね。あんなに苦勞してしっかり飼い慣らしたのに。鵲に見つからなければいいのですが」こう言いながら部屋を出ていった。波打つ黒髪の好ましい容姿の女性だった。他の侍女たちは少納言の乳母と呼んでいて、女の子の世話は彼女に託されていたようだった。	「あのうっかり者が。怒られるのにいつも何かしでかすんだから」傍にいた女の一人が口を出し、「雀はどこに行ったんでしょう？ あんなに可愛くて、人間に慣れてきていたのに。鷹に見つからなければいいのですが」と立ち上がりながら言った。流れるような長い髪の上品な女性で、少納言の乳母と呼ばれているところから、おそらく幼女の世話係を務めているのだろうと思われた。
18 尼君は自らの余命の少なさを語りつつ雀を追っている紫の上を論ず	尼僧が少女に言った。「さあ、そんなに子供っぽいことではいけません。いつもどうでもいいことばかり気にして。貴女といったら！今も私が具合がよくなくて、いつあの世に行ってしまうかわからないのに、貴女は私のことを心配せずに、雀のことを気にしているんですね。本当に困った子だこと。だいたい、生き物を籠に閉じ込めるのは悪党のすることだと何度も言ったかわからないではないですか。こっちはいらいっしやい」そこで少女は尼僧の横へ行って座った。	「まあ何と馬鹿げたことをしているのでしょうか。雀一羽の心配をして、いつ私がこの世を去ってしまうかは考えないのです。生き物を檻に閉じ込めるのは罪だと何度も言いましたのに。こちらへいらっしやい」尼僧がこう言うと、女の子はその横にひざまずいた。
19 光源氏は、思いを寄せる藤壺に紫の上が本当によく似ていると思う	その顔立ちは整っていたが、素晴らしい美しさで源氏に衝撃を与えたのは髪の毛で、雲の塊のようにこめかみに集まり、額を隠さず、子供らしく後ろに流してあった。大人になったらどのようになるだろうかと考えながらその子を眺めていると、突然、自分のすべてをかけて愛した女性と少なからず似ていることに気がついた。この類似が人に見せられない彼の涙を誘った。	その顔はとても愛らしく、自然のままに繊細な眉の形、子供らしく額のところでかき上げられた髪の毛が、顔の両側にしとやかに下りていた。成長した姿を見るのはさぞ喜ばしいことだろう、と彼女を観察しながら思った。突然、この子から目が離せないのは、他の誰よりも彼の心を掴んで離さないあの女性に似てるからだと思いつき、感動のあまり涙があふれ出た。

<p>20 尼君は亡くなった娘の話をしつつ、少納言の乳母と歌を詠み交わす</p>	<p>尼僧は幼女の髪を撫でながら言っていた。 「何ときれいなお髪だこと、髪のお手入れを貴女は嫌がるけれど。いつまでも子供っぽいを見てみると、心配でなりません。貴女の年で全然違う子もいますよ。貴女のかawaiiそうなお母様は、お父上が亡くなったときは12歳でしたが、自分のことが考えられることをすぐに示しました。もし私が今逝ってしまったら貴女はどうなるのか、まったくわかりません」 そして泣きはじめた。この光景を遠くからこっそり盗み見していた源氏もかawaiiそうになってしまった。そのときまで子供とは思えないような不思議な集中力で尼僧の顔をじっと見つめていた女の子は、それを聞いて悲しげな様子で頭を下げ、髪の毛が二つの黒い大波となって両頬に落ちた。愛情深く彼女を見つめながら、尼僧は歌を詠んだ。 「露の雫を載せた若い葉を育ててくれる人が来るのかどうかかわからず、晴れた日の大気に消えていくのを躊躇しています」 すると侍女がため息をつきながら答えた。 「ああ露の雫よ、育ちつつある若い葉が美しく成長する証を示すまで、貴女は留まることでしょ」</p>	<p>尼僧は少女の髪の毛を整えた。 「ほんとうにきれいだこと。あなたは髪をとかしてもらうのが好きでないけれど。いつまでも子供っぽいのが心配ですよ。あなたの年頃の娘さんたちはもっと大人びています。お母様はお父上が亡くなったとき十歳でしたが、もう物事の意味がわかっていましたよ。もし私があなただを残して死んだら、どうやって生きていきます？」 これほど悲嘆に暮れているのを見て、若君もわけもなく心が痛んだ。子供らしい無邪気さではあったが、少女は尼僧の言葉に注意深く耳を傾け、頭を下げると、顔の両脇に下がった髪の毛が柔らかく輝いた。 尼僧は歌を詠んだ。 「この先どうなるかもわからない 若草を残していくことを思うと 露も消えるのをためらってしまう」 「まったくその通りでございます」 侍女の一人が答え、涙を浮かべながらつけ加えた。 「春の若草が この先どうなるか知る前に 露は消えることなど できるのでしょうか」</p>
<p>21 僧都から光源氏の訪れを聞いた尼君は、恥じて簾をおろしてしまう</p>	<p>そのとき、この家の持ち主である僧侶が部屋の反対側から入ってきて言った。 「ご婦人方、失礼します。貴女方は丸見えになっていませんか？ このように窓近くにいるにはまずい目をお選びですよ。源氏の君が三日熱の治療を受けに隠者のところに来られたと今知ったばかりです。あまりにも質素な服で変装して来られたので、私は気がつきませんでした。それで、一日中お近くにいながら、敬意を表しにも行かずに過ごしてしまいました」 尼僧はぎょっとして後ろに跳び上がった。 「何ということでしょう！ それでは、通りかかって私たちを見られたかもしれないのですね……」 そして急いで巻き上げ式の錠戸を下げた。</p>	<p>そうこうしているうちに、向こうから僧院長がやってきた。 「貴女たちの姿は丸見えになってますよ。今日にかぎって、縁側に座ることにしたのですか？ さきほど知ったのですが、宮中護衛隊第二司令官であられる源氏の君が、隠通聖のところに病気の治癒を願いに来られたそうです。まったくのお忍びで来られたので、私は何も知らなくてご挨拶にも行ってないのです」 と言ったので、尼僧はあわてて簾を下ろした。 「それは大変、誰かがこの様を見たと思いますか？」</p>
<p>22 僧都は尼君に、世間で評判である光源氏の姿を見てみないかと誘う</p>	<p>「お噂をよくお聞きしていた源氏の君をお訪ねする機会ができて、まことに嬉しいことです。話によると、私のように禁欲的な年老いた僧侶でさえも、あのお方の前では、もうあきらめてしまった人生で犯した罪や苦しみを忘れてしまい、多くの美が宿る世界にもう少し生きていたいという勇気を取り戻すほどの輝かしさだそうです。貴女たちはすでにご存じかもしないませんが……」 僧侶が家を出る前に、源氏は隠者の洞窟へ戻りつつあった。</p>	<p>「光源氏のことは皆が噂しています。お近づきになる絶好の機会ではないですか？ あの方の魅力は、世を捨てた僧侶であっても、お姿を見ただけで、煩わしい苦痛を忘れ、長生きしたいと思わずにいられないほどだそうです。さあ、私もご挨拶に行かなくては」 遠ざかる僧院長の足音に、源氏も帰途に就いた。</p>
<p>23 光源氏は紫の上に強く心をひかれ、藤壺の身代わりにしたいと思う</p>	<p>何と愛らしい子を見つけたのだろう。あの雨の夜に友人たちが言い当てていたように、このような奇妙な旅の途中、思いがけない場所で隠れた美を見つめることができるというのはまったく本当だった。偶然散歩に出かけ、すぐにこのような素敵な出会いがあるとは、何と喜ばしいことだろうか！ あのとても愛らしい幼女は誰の子供だろうか？ かつて宮中の女性としたように、あの娘をいつも側に置いて、どんなときでも慰めと気晴らしを求めることができたらどんなに嬉しいことだろう。</p>	<p>魅力的な人に出会ったものだ、と心の中で思った。こんなふうだから、色事を求める友人たちも、お忍びでぶらついているうちに予期せぬ宝物を見つけたというわけだし、たった一度の外出だけで、想像だにできなかった出会いがあるということだ。確かにとても美しい少女だったが、いったい誰なのだろう？ と考えるうちに、心の奥底では着々とある計画が進んでいった。あの女性の代わりに、よく似たあの娘をそばに置いて日々を過ごしたいものだ。</p>
<p>24 僧都の弟子は、光源氏が臥せるところにやって来て惟光を呼び出す</p>	<p>隠者の洞窟で横になって間もなく（その中は脇が触れ合うほど狭かった）、惟光を呼ぶ年老いた僧侶の弟子の声が聞こえた。弟子は言った。 「師匠はたった今、貴方がたがすぐ近くにお泊まりだと知りました。表敬訪問する光栄もなくお立ち寄りになったことをお恨みいたしておりますが、源氏の殿下は師匠がこの庵の近くに住んでいることを無視できなかったはずで、訪問させていただけなかったのは、偏にこの巡礼の目的を知られなくなかったからだろうと考えなかったならば、すぐに皇子様へご挨拶に上がったことでしょう。ですが師匠はこう申しております」 男は話を続けた。 「私たちも、粗末な小屋ではありますが、お休みになる藁の寝床のご用意はできます。ご挨拶する光栄も与えられずにお発ちになってしまうのは残念で……」</p>	<p>就寝しようとしているところへ、僧院長の弟子が惟光のところへやってきた。狭いところだったので、その伝言は若君の耳に入ってきた。「こちらへお寄りになったと今聞いたばかりで、すぐにご挨拶に上がらなければいけなかったのですが、私がこの寺に籠もっていることをご存じでありながら、お忍びで来られたことを悲しく思っております。それでも、私の家では質素ながらもおもてなしてきましたのに」</p>

<p>25 僧都の弟子を通じて、光源氏はなにがしの僧都の招きを受け入れる</p>	<p>源氏は中から答えた。 「私は 10 日間頑固な発作に苦しめられ、絶望しておりましたが、この山中に住む隠者に診てもらおうようにと勧められ、そうしたのです。しかし、もし私のような場合に治療の効果がなかったと知れ渡ったら、これほどの名声を持つお方に大きな損害を与えることになってしまうと考え、ありきたりの祈祷師に頼るときよりもずっと内密に事を運ぶように努めました。どうかお師匠様にこの言い訳を受け入れて洞窟にお入りくださるようお願いください」</p>	<p>「十日以上、断続的な発熱に苦しんでおりました」と答えた。 「発作が繰り返して起きていたので、人の勧めに従ってここまでやって参りました。しかし、万一この名声高き隠遁聖の技が効かなければ、その噂が広がって何とも申し訳ないことになりますので、内密にやってきた次第です。喜んでそのお申し出を受けましょう」</p>
<p>26 折り返し参上したなにがしの僧都とともに、光源氏は僧坊を訪れる</p>	<p>この招待を受けて僧侶がやってきた。彼は聖職者ではあったが、たいへんな英知の持ち主として世俗社会でも非常に尊敬されている人物だったので、源氏は彼に対してある種の畏敬の念を抱いていた。それで、変装用にまとった擦り切れた古着のまま出迎えるのは不作法に思えた。都を離れて山中に隠遁してからの生活について詳細な話をした後、僧侶は源氏に、一緒に来て彼の小屋の庭に噴出する冷たい湧き水を見てほしいと頼んだ。彼が強く興味を持っていた人々をもう一度見られるいい機会だった。だが老いた僧侶が自分についているいろいろ話したに違いないと考えると、少し居心地の悪い思いがした。それで？ 彼は何としてもあの美しい幼女をもう一度見たかったので、老いた僧侶に小屋まで従った。</p>	<p>間もなく僧院長が直々に挨拶に来た。僧侶とはいってもその容貌は威圧的で、世間でも尊敬されていた人物だということを考えると、若君は自分が普段着で来ていることを恥ずかしく思った。僧院長は、山中に隠遁した生活について語った後、自分の家に泊まるよう熱意を込めて誘った。 「ことと同じように粗末な小屋ですが、庭を流れる小川は涼しくて気持ちのよいものです」たった今、まだ彼のことを知らない女たちに熱烈な言葉で彼について話していたのを想像して、気恥ずかしく思ったが、とても可憐に見えたあの少女への興味に押され、僧院長の住処へ向かった。</p>
<p>27 光源氏を招くため、僧坊にある南面の部屋はさっぱりと整っている</p>	<p>庭には山に自然に生えている植物が巧妙に植えられていた。月はなく、堀の両側に松明が灯され、木々にはガラスの提灯が掛かっていた。正面の居間はとても優雅に調えられていた。異国情緒あふれる高価な香油の濃厚な匂いが隠された香炉から広がり、うっとりするような香りで部屋中を満たしていた。この匂いは源氏にはまったく初めてのもので、後ろの部屋に仕える侍女たちが知恵の限りを尽くして丹念に準備したものに違いないと想像した。</p>	<p>なるほど、庭には草や木が、ありふれた種類だったが、特別趣味よく配されている。月のない夜だったので、水際に松明が並べられ、灯籠が灯されていた。南向きの主客室は実に丁寧に整えられていた。いい香りが室内に漂い、仏様に供えた線香の香りとうり混じっていた。若君が体を動かすたびにその着物から発するかぐわしい香りは、うっとりするほどで、奥の部屋にいた女たちは心が乱されたことだろう。</p>
<p>28 光源氏は夢にかこつけて僧都から紫の上のことを聞き出そうとする</p>	<p>僧侶は現世の不確かさと来世における罰についての寓話を話しはじめた。源氏はこれまで自分が犯してきた罪の重さに愕然とした。残りの人生にずっとこの罪の意識を持ち続けるという考えはかなり恐ろしいものだった。さらに来世も控えている。何という恐ろしい罰が彼を待ち受けていることだろう！ 僧侶が話している間、源氏は自らの悪行を思い起こしていた。隠遁者になり、このような場所で過ごすのもいい考えだろう……。だがすぐに、彼の思いは午後に見た美しい顔に戻り、もっと多くのことを知りたくて尋ねた。 「ここには他にどなたがお住まいですか？ 知りたいのです。というのも夢の中でこの場所を見たことがあり、今日ここへ来る途中、その場所だとわかって唖然としたのです」</p>	<p>僧院長は彼に、このはかない人生の出来事を語り、来世について話した。源氏は自分の罪の積み重ねは恐ろしいほどだと思った。とんでもないことに心をとられ、そのために現世で苦しむことになり、来生ではさらに苦しみが増すだろうと考え、俗世間から離れてこのような場所で暮らしてみたい、という願いが胸をよぎったが、昼間見た少女の面影がずっと心の中に残っていた。 「あなたと住んでいるのはどなたですか？ 私はある夢を見て、それについてあなたに話しかかったのですが、今日になって思い出したのです」と尋ねた。</p>
<p>29 僧都は光源氏に、妹の尼君が故按察使大納言の北の方であると語る</p>	<p>この冗談に僧侶は微笑んで言った。 「貴方の夢が少し突然会話に入り込んだようですね。ですが、調査を続けていくと期待がはずれてがっかりなさるでしょう。おそらく、かなり前に亡くなった按察の大納言についてお聞きになったことはないと思います。私の妹と結婚したのですが、夫の亡き後、妹は出家しました。そのころ私は数々の問題を抱えていて、都に戻ることができなくなりました。それで、妹も一人ぼっちにならないように、ここへ来てこの隠居所と一緒に住むことにしたのです」</p>	<p>「突然、夢のことをお話になりますね」僧院長は微笑んで言った。 「おそらくこれから私が言うことにはがっかりされるでしょう。もうずっと前に亡くなった大顧問官兼総視察官のことをご存じないと思います。私の妹はその第一夫人でした。視察官亡き後、出家して尼となりましたが、最近体調を崩しまして、私が山に引きこもって都に戻らなくなりましたので、ここへ来て一緒に暮らすようになったのです」</p>
<p>30 光源氏は僧都に故大納言と尼君の間に生まれた娘について質問する</p>	<p>「按察の大納言殿には娘さんが一人おられたと聞きましたが、本当ですか？ この質問をぶしつけな意図でしていると思わないでください」源氏は少し間をおいて言った。 「一人娘がおりましたが、十年ほど前に亡くなりました。その娘を入内させたいと常々思っていたのです。しかし娘にそのつもりはありませんでした。そして父親が死んで、出家した私の妹ただ一人に託されると、意地の悪い仲介者から兵部卿の皇子を紹介され、娘はその愛人となったのです。皇子の正妻は、誇り高く執念深い方で、すぐに娘を虐待や侮辱の連続で苦しめました。執拗な迫害は毎日のように続き、とうとうかわいそうなその子は悲嘆のあまり死んでしまったのです。悪意は人を殺さないと言いますが、親族がそのためだけに病に伏せ、死んでいったのを見たのですから、私は決して同意できません」</p>	<p>「大顧問官殿は一人娘がおられたと聞きましたが、どなたのことでしょうか？ 軽い気持ちで聞いているのではなく、ほんとうに関心があるのです」推測を試みて言った。 「一人だけおりましたが、十数年前に亡くなりました。父親はその娘を入内させたいと望んでいたのですが、手塩にかけて育てましたが、その願いが叶う前に死んでしまい、私の妹が一人で世話をしたのですが、ちょうどその頃、よく知りませんがどなたかのお取り持ちで、軍務省長官である皇子様がお喜びで娘のところに通われるようになりました。しかし、その方の第一夫人は大きな権力のある方だったので、数限りない問題が生まれてしまったのです。若い女は朝から晩まで苦しみ続け、とうとう亡くなりました。苦しみか病をもたらすのだと、私はこの目で確かめることができました」僧院長は語った。</p>
<p>31 紫の上の素性を知った光源氏は、藤壺に似ていることに合点がいく</p>	<p>「それでは女の子はその婦人の娘に違いない。それなら宮中の女官と似ていることの説明がつく」 ようやく源氏は理解した。そしていっそう女の子に対して惹きつけられるのを感じた。血筋はよかったが、それは悪いことではなかった。それに彼女の少し田舎っぽい素直さは、すでに決めてしまったように、自分の庇護下に置くようになった暁には利点となるだろう。なぜなら、まだ形の定まっていないものを自分の好みに合わせて育てる方が容易だからだった。</p>	<p>ということは、少女はその若い女の娘で、軍務省長官である皇子との間に生まれたのなら、自分にとっても愛しい女性と似ていることの説明がつく。そういう訳なら、ますますその子に会いたいものだ。愛らしく、家柄もよく、悪賢さもなかった。自分の傍に置いておき、成長して自分の理想の女性になったら、さぞ嬉しいことだろう。</p>

<p>32 紫の上のことがいっそう気になった光源氏は、僧都に詳しく尋ねる</p>	<p>「それで、お気の毒な生涯についてお話しくださったそのご婦人には、忘れ形見はいらっしゃらなかったのですか？」会話を幼女のことに持っていきたいとなおも願いながら、源氏は尋ねた。 「女の子を産んでももなく娘は亡くなりました。私の妹が世話をしないといけないうのですが、妹も体が弱く、このような責任に耐える自信がないのです」 今やすべてが明らかだった。</p>	<p>「それは本当に悲しいお話ですね。この世にどなたも残されなかったのですか？」 「はい、亡くなる少し前に生まれた女の子がいます。まだ子供でございまして、このことが年 老いた妹の心配の種なのでございます」 それなら間違っ てはいなかった。</p>
<p>33 光源氏は僧都に幼い紫の上を後見することを尼君に話すように頼む</p>	<p>源氏は言った。 「この申し出は変に思われるでしょうが、その女の子を養女にしてみたいと感じているのです。そのことについて妹さんとお話なさっていただけませんか？ ずいぶん早い時期に、結婚を強いられてしまったのですが、その選択はたいへん不幸な結果に終わりました。どうやら結婚生活にほとんど喜びを感じないようで、現在はまったく一人で暮らしております。まだ子供だということもよく承知しており、実際、結婚の申し込みをしているわけでは……」 ここで話をやめ、</p>	<p>「変に思われるかもしれませんが、この私にそのお嬢さんを預けるよう妹御に頼んでいただけませんか？ 理由もなくこのようなお願いをするものではありません。結ばれている女性はいるのですが、おそらく性格が合わないため、ほとんど一人で暮らしております。まだお嬢さんは若すぎるし、私を色恋沙汰を求める数多い男の一人と見なされ、申し出は場違いだとお思いでしょうか？」</p>
<p>34 僧都は光源氏に、尼君に相談した上で返事をすると答えて堂に上る</p>	<p>僧侶が答えた。 「お申し出はとてもありがたいのですが、今話している女の子はまだ年端もいかないということがおわかりになっていないのではないかと思います。気楽な気晴らしとしても楽しくはないでしょう。しかし娘が成長して世間を渡っていくためには、有力な後援者が必要なことも確かです。望ましい結果をお約束することはできませんが、確かに申し出は祖母に伝えましょう」 彼の態度は急に少し冷たく厳しいものになった。源氏は自分が軽率であったと感じ、当惑したまま黙ってしまった。僧侶が再び話を始めた。 「これから阿弥陀様のお堂で、短いお勤めがありますから、少しの間退出しなくてはなりません。晩課も唱えなければなりませんし、また後ほど参ります」 そして山を登って行った。</p>	<p>「そのお言葉はありがたく思いますが、本当にまだ時期が早すぎると思いますし、冗談にしてもあの子のお相手はできないでしょう。とは言え、女は何らかの方法で男の庇護の下で成長するものでございます。出家した私ではこのような問題にかかわることはできません。妹と話し、お返事をいたしましょう」 と、僧院長は素っ気なく言い、その態度が非常によそよそしくなったので、聞いている方は、その若さゆえに、気後れしてしまい、それ以上何も言うことができなかった。 「さあ、阿弥陀仏の部屋でお勤めをする時刻です。まだ夜の初めのお勤めをしていませんでした。終わったらすぐ戻ります」 そう言って僧院長は部屋に向かった。</p>
<p>35 光源氏は悩ましい気持ちになり、夜が更けても眠ることができない</p>	<p>源氏はとてもがっかりした。雨が降りはじめた。冷たい風が山を吹き抜け、滝の落ちる音を運んできた。さっきまでは優しい響きがときどき聞こえるだけだったが、今は激しい轟音になっていて、そこに眠気を誘う単調な響きの読経の声が混じり合っていた。このような環境では、どんなに人の影響を受けにくい人間でも憂鬱な気分になるだろう。源氏の君はなおさらで、敷き藁の上でまんじりともせず、計画をあれこれ思い巡らしていた。僧侶は「晩課」のことを話していたが、もう夜はすっかり更けていた。</p>	<p>若君は落ち着かなかった。小雨が降って山風が冷たく吹き、水位の増した滝の音がますます大きくなっていった。少し眠そうな読経の声が、どんな無神経な人にも届くような不安な何かを伴いながら、絶え絶えに聞こえてきた。ましてやさまざまな思いを巡らしていた彼は、目を閉じることもできなかつた。僧院長は夜の初めと言っていたが、もう夜は更けていた。</p>
<p>36 奥の人が休んでいない気配を感じた光源氏は扇を鳴らして人を呼ぶ</p>	<p>だが、音を立てないように気をつけてはいたが、尼僧の数珠がときどき微かな音を立てて祈禱台を叩いていたから、彼女がまだ起きているのは明らかだった。この繊細で微かな響きにはどこかうっとりさせるところがあった。とても近くから聞こえてくるようだった。源氏は居間と奥の間を隔てる屏風と屏風の間小さな隙間を作り、扇を鳴らした。 奥の間にいた誰かが、少しためらった後、独り言を言いながら屏風に近づいてくる気配がした。</p>	<p>女性たちが生活する棟でも誰かが起きているのは明らかで、音を立てないよう努めてはいるようだが、肘置きに触れるかすかな数珠の音と、洗練された優雅さを暗示する繊細な衣擦れの音が聞こえてきた。その抑えた音はそんなに遠くのものではなかつたので、部屋の隅に置かれた屏風の真ん中の枠を少し動かしてみたら、自分の存在を示すため、扇で静かに掌を打った。まるで彼の訪問を予期せぬものとしながらも、何も聞こえないふりはできないかのように、誰かが膝を床に滑らせて進んでくるのを感じた。</p>

<p>37 歌を詠んだ光源氏は、女房に尼君へ取り次いでもらおうように頼む</p>	<p>「そんなはずはないのだけれど、確かに聞こえた……」 それから 「いいえ、私の想像に違いない！」 と言って少し後ろへ下がった。今は闇の中を手探りで歩いているようだった。そこで源氏は大声で言った。 「仏様に従いなさい。たとえ闇の中の歩みでも迷うことはありません」 暗闇の中で突然この澄んだ若々しい声を聞き、女は初めは声を出す勇気がなかった。だがしばらくして答えることができた。 「どちらの方角へ仏様は私を導いてくださっているのですか？ よくわからないのです」 源氏が言った。 「驚かせてすみません。ほんの小さなお願いがあるだけなのです。貴女のご主人にこの歌を伝えていただけますか？」 『若い茂みに緑の葉を見つけてから、憧れの露は旅人の袖で乾くことはありません』 女が言った。 「ここにはこのようなご伝言の意味がわかる人が誰もいないことはご存じだと思いますが、誰のことをお考えですか？」源氏が言った。 「私は貴女のご主人にこの伝言を受け取っていただきたい理由があるのです。それをお伝えいただけたら、貴女に感謝いたします」</p>	<p>しばらくして、女性が後ろに下がり、当惑してこう言うのが聞こえた。「おかしいわ、聞き違いかしら？」 「仏のお導きがあれば、どんなに深い闇の中でも間違えることはありません」彼は朗々と語った。その声が若く気品があったので、女は躊躇しているようだったが、このように答えた。 「どちらの方角へお導きですか？ 私にはわかりません」 「このような突然の訪問に驚かれるのは当然ですが、私の言うことをそのまま伝えていただけますか？」 若草の柔らかな葉を見てからは 旅人の袖の上で 涙の露は乾くことはありません」 「よくご存じと思いますが、ここにはそのようなお言葉を理解し、受け入れることのできる者はおられません。ですから、誰にお伝えしたらいいのでしょうか？」女は尋ねた。 「信じてください。私がこのように話すのには理由があるのです」彼は答え、女は引き下がった。</p>
<p>38 光源氏が紫の上にあてた歌を耳にした尼君は歌の内容を不審に思う</p>	<p>尼僧はすぐにその歌が自分の孫娘のことを指していると直感し、源氏が彼女の年齢を聞き違い、愛人にすることに決めたのだらうと想像した。だが、いったいどうやって孫娘の存在を知ったのだらう？ しばらくの間、謙虚に、当惑しながら考えていたが、ようやく慎重にこのような歌を返した。 「たった一夜だけ露に濡れた藁布団で休んだ旅人には、山中の冷たい苔の上の家に永久に住む人のことはわからなかったでしょう」 こうして若者の歌に無邪気な意味を与えた。</p>	<p>その伝言を聞き、尼僧は多くの疑念に駆られた。 「ああ、今の若者ときたら！ 私たちの娘がもう世間を知る歳だと思われたに違いありません。いったいどうして『若草』の歌を聞くことができたのでしょうか？」 不安になったが、何の返答もせずに長い時間待たせるのは失礼だと思い、歌を返した。 「ただ一夜だけ 草枕の上に生じる露を 山の中で育つ苔と 比べないでください」 これこそは乾くことはありませんから」</p>
<p>39 歌を返した尼君に対し、光源氏は紫の上への切実な気持ちを訴える</p>	<p>返答を受けた源氏は言った。 「私はこのように間接的な方法で会話するのに慣れていないとお伝えください。慎重な方ではあるのですが、今回は形式的なことは抜きにして、真剣に私とこの問題についてお話していただくようお願いいたします！」 「いったいどうしてこのような聞き違いをされているのでしょうか？」 源氏が孫娘はもう一人前の女の年齢だと誤解しているという考えが頭から離れない尼僧は言った。この高名な人物の前に姿を現すように、と突然命じられることを思って狼狽し、どいう口実を見つければいいか考え続けた。だが、小間使いたちは尼僧が姿を見せなければ源氏は心底お怒りになると思い込んでいたので、ついに女たちの部屋から出てきて言った。 「もう若い女ではありませんが、このように姿を見せるべきではなかったと思います。しかし、貴方が私と重要な問題について話し合いたいとお言づてなさいましたので、それをお断りできませんでした……」</p>	<p>「他人を介して伝言をやり取りするのに慣れておりません。もしこの機会に直接お話をすることを許していただけたら、嬉しく存じます」 彼はこう伝えさせ、尼僧は再びためらった。 「何か誤解があったようです。あのような身分の殿方に、何を言うことができるのでしょうか？」 「それでも、お答えしないのは失礼でございます」 侍女たちは反論した。 「貴女たちの言うとおりです。私より若い人であればためらうかもしれませんが、あの方の願いは本当に真摯なものと思えますから、お話しするのは大変名誉なことです」 最後にこう言い、膝を滑らせて彼に近づいた。</p>
<p>40 困惑している尼君の気づまりな態度に光源氏は謙虚な言葉をかける</p>	<p>源氏は言った。 「おそらく私の申し出は時をわきまえない軽薄なものだと思いでしょ。確約できるのはこれ以上なく真剣に行っているということだけです。御仏が証明して下さるでしょう……」だが、尼僧の年齢と威厳のある態度に怖気づいてしまい、途中で話をやめた。 「確かに、貴方はこのお申し出を私に伝えるのにとっても奇妙な方法を選ばれました。まだ何のことかはっきりおっしゃっていませんが、貴方が真剣なのはわかります」</p>	<p>「突然お伺いを立てるのは軽率で無分別とお思いでしょ。一時的な気まぐれではありません。御仏が私の証人になって下さるか……」 彼は言いかけたが、女の控えめで落ち着き払った態度に威圧され、話を途中でやめた。 「まったく、このような予期せぬ状況で言葉を交わしておりますのも、何か説明できない理由があるに違いありません」 尼僧が言った。</p>

<p>41 光源氏は尼君に自分の体験を語りつつ、紫の上との結婚を申し出る</p>	<p>この言葉に勇気づけられ、源氏は続けた。 「未亡人になられてからの長い年月とお嬢様のご逝去のお話には強く心を打たれました。あのかわいそうな幼女と同じように、私も優しく愛してくれた唯一の人を幼いときに失い、少年時代は長い間孤独と不幸に悩みました。ですから女の子と私は同じ境遇にあるのです。それでその子に対してこのように強い親近感を覚え、その子の失ったものを補うことを申し出たいのです。もしこのように申していいのなら、私がその子の母親代わりになることを認めてくださるようお願いするために、奇妙で不適切な時間にこのように図々しく貴女の忍耐につけ込んでしまったのです」</p>	<p>「悲しい話を耳にしたあのお嬢さんについてですが、私が亡くなられた方の代わりになることをお許しいただけないものか知りたいのです。私も幼いとき、自分にとって最も大切な人たちを失い、波間の揺籠の中にいるように頼りない思いで年月を過ごしました。お嬢さんは私と似た境遇におられますから、私を友達のように思っていたいただきたいのですが、お目にかかる他の機会はそう簡単にはやってこないと思われまので、図々しくもお話をしに参ったのです」</p>
<p>42 尼君は紫の上が幼く不似合いなことを理由に光源氏の申し出を断る</p>	<p>尼僧は言った。 「貴方のご意向が寛容さに満ちたものであることは疑いませぬ。ですが、失礼をお許しください。明らかに貴方は聞き違いをなさっています。ここには確かに私に預けられた娘が住んでいます。まだ幼い子供にすぎなく、貴方のご興味を引くようなことは絶対にあり得ません。ですからそのお申し出は辞退させていただきます」 源氏は言った。 「それどころか、私は女の子についてはすべて存じ上げているのですが、もし私の好意が度を超しているか間違っていると思われるのでしたら、話したことをお許しください」 彼が自分の申し出の非常識なことにまったく気づいていないのは明らかで、尼僧は説明を続けても無駄だと思った。</p>	<p>「仰ることはたいへんありがたいのですが、貴方様の方に誤解があったのではないかと思います。取るに足らない私しか頼りにできない女の子が手元にいるのは本当ですが、至らないところを大目に見ていただけるにはまだ若すぎますから、貴方様のお申し出をお受けすることはできません」 「私はすべて聞き知っておりますので、お願いですからそんなに頑なな態度をなさらず、私の思いの真剣さを考慮してください」 と源氏は答えたが、尼僧は、彼が自分では気づいていないにしても、到底受け入れられない要求をしたと確信し、彼を安心させるような返事は一切しなかった。</p>
<p>43 僧都がお勤めから帰って来られたので光源氏は尼君の前を退出する</p>	<p>もう僧侶が戻ってくるころだった。源氏はすぐに同意してもらえとは決して思っていなかったと尼僧に告げたが、そのうちに違った目で見られるだろうと思いながら屏風を閉めた。</p>	<p>そうこうしているうちに、祈祷を終えた僧院長がこちらに戻ってきた。 「とはいえ、私は最初の一步を踏み出しました。少し安心できます」 若君はこう言って、再び屏風の扉を立てた。</p>
<p>44 明け方、深山の景色を見ながら、光源氏は僧都と和歌の贈答をする</p>	<p>夜は明けかけていた。近くのお堂では法の花の4つの瞑想が勤められていた。一心に贖罪のお経を唱える僧院長たちの声が山から吹き下ろす風に乗って途切れ途切りに聞こえ、この荘厳な音に濁流の轟音が混じり合っていた。 「吹きすさぶ山風によって夢から覚めて滝の音を聞き、その心地よい調べの美しさに涙しました」 このように源氏は僧侶を迎え、僧侶は歌で答えた。 「毎日茶碗を満たす急流の轟きに、私が感嘆と法悦のあまり跳び上がるのは難しいのです」 そして「もう慣れてしまいました」と言い訳のようにつけ加えた。濃い霧が朝の空を包み、鳥のさえずりさえも息を殺したようにぼんやりと聞こえた。山には蕾をつけたさまざまな種類の（彼が名前を知らない）木々や花々が育ち、岩場は色とりどりの刺繍を散らしているように見えた。とりわけ彼を驚嘆させたのは、斜面を横切る鹿の優雅な歩みで、軽やかに飛び跳ねたかと思うと、急に立ち止まったりしていた。鹿を眺めているうちに、彼の病の最後の痕跡はこの混じり気のない喜びに打ち負かされた。</p>	<p>夜明けが近づいていて、法華經の読経に充てられた部屋からは、懺悔のお経を唱える声や山風に運ばれて届き、その厳かなこだまが滝の音と混じり合っていた。 「山の奥深くから 吹きつける風は 人を惑わす夢から目覚めさせ、 滝の音は感謝の涙を誘います」 と彼は詠んだ。 「貴方の袖を濡らした 山の水で浄められている ここに住む人の心が いったい何に動揺するのでしょうか」 私はこの音には慣れております」 と僧院長は答えた。 明るくなりかけた暁の空は春の霞に包まれ、何処からかははっきりわからないが、小鳥のさえずりが聞こえてきた。名も知らぬ草花の色が地面で混じり合い、その錦織のような絨毯の上で、鹿がさまよい歩いたり立ち止まったりする様は、見たことのない情景で、彼の苦惱を忘れさせてくれた。</p>
<p>45 身動きできぬ聖は、光源氏のために護身の修法をして陀羅尼を読む</p>	<p>隠者は少し体の自由がきかなかつたにもかかわらず、どうか「守護者の呪術」のために規定された秘教的な所作を完遂し、年老いた彼の声はしわがれて震えていたが、たいへんな威厳と熱情を込めて聖典を読み上げた。</p>	<p>隠通僧はほとんど動くことができなかつたが、それでも彼を庇護する祈祷を行うために来てくれた。神聖な呪文を唱えるしわがれ声は、齒の抜けた口を通して不安定に響いたが、それは長い修行を顕してもいた。</p>

<p>46 光源氏は迎えの人からの祝いと僧都から酒などのもてなしを受ける</p>	<p>源氏の多くの友人が治癒をお祝いするためにやってきたが、その中には御所からの使者もいた。僧侶は下の小屋から贈り物として奇妙な姿の植物の根を持ってきたが、それは谷の奥深くまで探しにいったものだった。彼は源氏に同行しないことを詫言した。 「ご一緒にできれば大きな喜びなのですが、誓願のためにそれが年末までは許されないので」と言い、源氏に名残の杯を差し出した。源氏は杯を取って言った。 「もし自分の望みに従うことができるなら、この山と溪流を立ち去りはしないでしょう。しかし、父である天皇が心配して私を探していると聞きました。花の盛りが終わる前に戻って参ります」 そして歌を詠んだ。 「都人のところへ戻り、急いで見に行くように言いましょう。激しい風がすばやく彼らを追いついてこの花を桜の枝から振り落としてしまわないうちに」 老僧は源氏の親切を喜び、彼の美声に魅了され、歌で答えた。 「花咲く蘆薈を見つけた人と同様に、私はもう二度と山桜の花冠に目を向けません」 「結局のところ、私は蘆薈の花のように珍しいものではありません」と微笑みながら源氏は言った。</p>	<p>護衛の男たちが駆けつけて彼の回復を祝い、陛下からの使者もやってきた。僧院長は谷の底へ行って手に入れた名も知らぬ果物を贈った。「このような機会にまことに遺憾ではございませんが、私は年末まで山中に籠るという誓いを立てておりまして、お帰りの道をご同伴できないのでございます」と言い、彼に別れの酒を差し出した。 「私はこの山と泉の景色に心を奪われておりますが、宮中では陛下が私を心配なさっているのではないかと思います。桜の花が散る前にまた戻って参ります。」 宮中の人々に伝えます 花を散らす風が吹く前に 山桜の花を愛でに来るようにと」 彼は言った。その声と仕草がとても魅力的に輝いていたので、僧院長はこう答えた。 「ようやく優曇華の花を 見ることができたかと思われる 今となっては もう山桜に目を向けることは ないでしょう」 「三千年に一度しか開かない花を見るのはとても難しいことです」微笑みながら若君は答え、</p>
<p>47 杯をいただいた聖は涙をこぼして光源氏を拜み、守りの独鈷を渡す</p>	<p>それから、隠者が詩の一節を詠みながら別れの杯を彼に差し出した。 「ごく稀にしか山の独房にある松の扉を開けません、今回はわずかな者しか人生で拝められないあの花を間近に見ました」 源氏を見つめる目には涙が溢れていた。これから先、あらゆる邪悪なものから守られるよう、彼に魔法の杖を贈った。それを見た尼僧の兄は聖徳太子が高麗から持ち帰った数珠を贈った。その数珠は翡翠で装飾され、あの地から運ばれたときの中国風の小箱にまだ収められていた。小箱は5本の針を持つ松の小枝のついた透かし模様袋に入れられていた。さらに、濃青色水晶で作られ、桜と藤の枝が添えられた葉を入れる小さないくつかの瓶や、この土地ならではの素晴らしい贈り物が贈られた。源氏も山里で歓待されたお返しとして、都から贈り物を取り寄せていた。まず最初に聖者に祈祷の報酬を渡し、それから彼のための儀式を執り行ってくれた僧侶たちにお布施を配り、そして最後に、付近の貧しい村人たちに役立つ品々を気前よく与えた。旅立ちの準備をするために彼が教典の短い一節を読んでいる間に、</p>	<p>隠通僧はその手から盃を受け取りながら、こう付け加えた。 「山の松に囲まれた扉を ただ一度だけ開けたとき これまで見たことのない 一輪の花が見えました」 隠通僧の目には喜びの涙があふれていた。彼は源氏に独鈷（とこ）を献上し、僧院長は真珠で装飾された金剛寺の数珠を贈った。これは百済国から聖徳太子に贈られたもので、元の中国風の箱に収められたまま、透明な袋で包まれ、五本の針を持つ松の小枝が結ばれていた。それから、藤か桜の若枝が結びつけられた青いガラス瓶に入った種々の薬と、この土地の自然と調和したいくつもの贈り物が渡された。一方、若君は、都から運ばせた贈り物を、まず最初に、法要をしてくれた隠通僧と他の僧侶たちに進呈した。そして地元に住む貧しい人々にも贈り物を配り、読経の御礼の奉納品を置いた後、出発の支度を整えた。</p>
<p>48 紫の上を引き取りたい光源氏に尼君は四五先ならばと返事をする</p>	<p>老僧は家に入り、妹の尼僧に皇子に何か伝言はないか尋ねた。彼女は答えた。 「今は何と書いていいかわかりません。もし4、5年たってまだお気持ちが変わってなければ、検討を始めてもいいかもしれません」 「私もまさにそう思っていました」と僧侶は言った。 源氏は何の進捗も見られなかったことを残念に思いながら理解した。尼僧の伝言への返答として、次のような歌を僧侶に仕える少年に届けさせた。 「昨夜、あいにく黄昏時の薄明かりの中でしたが、愛らしい花を見ました。しかし今日は憎い霧が私の目から花を完全に隠してしまいました」 尼僧は答えた。 「貴方が本当にこの花と別れるのが辛いのか知るために、目をこらして不明瞭な空の動きを見守りましょう」 筆跡は素晴らしく、とても優雅だったが、型どおりを求めた芸術的な美しさではなかった</p>	<p>僧院長は受けた申し出を妹に伝えるため、奥の部屋に向かった。 「いずれにせよ、今のところは何もお返事することはできません。もし四、五年後にも同じお気持ちでしたら、考えてもいいでしょう」 と彼女は言った。それは前にすでに示されていた考えと同じだったので、源氏は失望し、僧院長に仕える少年に伝言を託した。 「黄昏の中に花の色を わずかにかき見した後で 朝の霞が上る時間に 離れていくのは辛いことです」 「その花から離れていくのは 本当にそんなに辛いことでしょうか？ 真実を知るため 霞に包まれた空を 注意深く見て参りましょう」 優雅で洗練された筆跡で、あっさりとして無造作に書かれたこのような返事があった。</p>

<p>49 光源氏を迎えに頭中将や左中弁たちなどの公達が都からやって来る</p>	<p>源氏の車を用意している間に、大臣の邸宅からやってきた青年貴族の一団が到着し、彼の身に何が起こったかを知るためにずいぶん苦勞したこと、そしてこれからつき添っていきたいことを口々に告げた。その中には頭の中將と左中弁、それに彼らより位の低い貴族たちがいたが、皆源氏の君を慕う気持ちに導かれてきたのだった。彼らは少しむっとして言った。「貴方への奉仕に専心するほど嬉しいことはございません。私たちを置いて行ってしまわれたのは不親切な仕打ちでした」 他の一人が言った。 「しかし、私たちもせっかくここまで来たのですから、花盛りのこの木々の陰で休まずに出発するのは残念です」 そして一同は高い岩壁の下にある苔の絨毯に隣り合って座り、手から手へ素朴な酒壺を回した。彼らの脇では、急流が岩に当たって素晴らしい滝になっていた。</p>	<p>左大臣から遣わされた車に乗ろうとしたとき、若者たちの集団がやってきたが、その中には左大臣の息子達もいた。 「何も知らせてくださらずに、お出かけになってしまうとは」 と口々に言った。護衛隊第二司令官や第二監督官らが情愛を込めて近づいてきた。「このご旅行にはお供させていただきますと思っておりましてのに、このように我々を無視なさるとは思ってもみませんでした」 と不平を言った。 「少しとどまって桜を愛でることもなく都へ帰ってしまうのは、実に残念なことです」 若者たちは岩陰の苔の上に並んで座り、酒の盃を手を取った。そこは滝のほとり、高みから落ちてくる水の流れがうっとりするような景観を見せていた。</p>
<p>50 頭中将は懐の横笛を出して吹き、弁の君は扇を鳴らし催馬楽を謡う</p>	<p>頭の中將は着物の折り目から横笛を取り出し、さえずるような音を響かせた。左中弁は扇を打つてのんびりと調子を取り、「豊浦の寺は」を歌いはじめた。ここへ来た若者たちはいずれも希有な資質の持ち主だったが、飛び抜けていたのは悲しげに岩に座る源氏の姿で、誰も彼から目を離すことができないほどだった。侍者の一人が有篋楽器を奏ではじめ、他の一人は笙の名人であることを披露した。</p>	<p>第二司令官は襟元にしまっておいた横笛を取り出して吹き始めた。第二監督官は扇で拍子を取りながら、「豊浦の寺の西」を歌った。彼らは皆若く、並の人々より資質において際だっていたが、疲れた様子で岩に寄りかかる源氏の君の姿は、人を不安にさせるような比類ない美しさで、視線をそらすことは不可能なほどだった。いつものように、一行の中には篋樂を弾く護衛、また笙の名手もいた。</p>
<p>51 僧都も自分から琴を持ち出して、光源氏に琴を弾いてほしいと頼む</p>	<p>少しして、老僧が家から豎琴を持ち出し、源氏の両手の上に置いて「山の鳥たちを楽しませるために」何か弾いてくれるよう懇願した。彼はとてもそのような気分ではないと断ったが、老僧が懇願するのになげ、見事に小品をつま弾いた。それから一同は立ち上がって出発した。</p>	<p>僧院長は琴という中国の七弦楽器を取り出して、「さあ、何か演奏してください。鳥たちさえ驚くでしょう」と頼んだ。 「私はまだ疲れていて、とても弾けそうにありません」 と答えたが、それでも承知して、心地よい旋律を奏でた。それから一行は出発した。</p>
<p>52 光源氏の姿に法師と童べは感涙し、尼君たちや僧都は彼を絶賛する</p>	<p>山里の人たちは、位の低い僧や若い新参の僧まで、全員が源氏の滞在が短すぎたことを深く悲しみ、涙を流した。一方、隠居所では年老いた尼僧が、源氏の顔をほんのわずかに見ただけでたぶんもう二度と会うことはないだろうと悔やんでいた。僧侶はこの腐敗きった末世の日出づる国はあのような皇子が生まれるのにふさわしくないと申すと言って涙を拭いた。</p>	<p>彼らが行ってしまったのはまことに残念なことだった。身分の低い者も含め僧侶たち、お世話をした若者たちは涙が出るほど感動していたが、もっと深い感銘を受けたのは年老いた尼僧と、このような高貴な男性を見たことのない侍女たちで、あの方はこの世の人ではないのでしょうかと口々に言った。僧院長は涙をぬぐった。 「ああ、どのような前世の縁によって、あのような稀に見る方がこの日出づる国の墮落と退廢の時代に生まれたのでしょうか。そのことで私は深い悲しみを覚えます」</p>
<p>53 幼心に光源氏に思いを寄せる紫の上は、人形に源氏の君と名付ける</p>	<p>小さな女の子も彼に夢中で、彼は自分の父親より美しいお殿様だと言った。 「それならあの方の子供になればよろしいのに」と乳母が言った。幼女はそれは本当にいい考えだと思いがらうなずいた。その時から、お絵かきで一番きれいな着物の人物が「源氏の君」と呼ばれ、一番可愛いらしい人形も同様だった。</p>	<p>女の子も子供心にとてもすばらしい方と思った。 「皇子であるお父様より綺麗な方だわ」と言った。 「もしそう思うなら、あの方の娘になりたくありませんか？」 侍女の一人がこう尋ねると、幼女は、そうならば素敵だと思いがらうなずいた。そのときから、絵を描くときも、人形遊びをするときも、一番上等の着物を着せ、とりわけ大切に扱うのはいつも源氏の君だった。</p>
<p>54 帰京した光源氏は、宮中へあいさつに伺って父桐壺の帝と対面する</p>	<p>都に戻るとすぐ彼は宮中に参上し、父にこの2日間の体験を語った。天皇は息子がとてもやつれているのを見て、たいへん心配した。隠者の呪力についていろいろ尋ね、源氏はきわめて詳細に答えた。 「間違いなく、ずっと前から呪術の名人と呼ばれてしかるべきお方なのだろう。彼の療法は最良の成果を何度ももたらしたが、その行為はなぜか公には認められなかった」と最後に陛下は言い、それを償うための声明を公布した。源氏が帝のもとを去ろうとしたとき、</p>	<p>彼はまず最初に宮中へ参内し、この数日間の出来事を報告した。陛下は源氏の君がこのようにやつれているのを見て心配された。隠遁僧の人徳についてもいろいろと尋ねられ、どのようであったか知ると、感嘆して仰った。 「最も高い身分にふさわしい人物である。それなのに、長年の苦行生活についてはここまで何も伝わってこなかった」</p>
<p>55 宮中を出た光源氏は、正妻葵の上の実家である左大臣邸へと向かう</p>	<p>左大臣が息子たちと一緒に山から下りるお供をしなかったことを詫びるために会いに来て言った。 「お忍びで出発なさったので、私が後を追うのはお気に召さないだろうと思っておりました。さて、今はうちへ来て何日か私たちとゆっくりと過ごされることを切に願っております。後でお屋敷までつき添わせていただきます」 源氏はまったく行きたいと思わなかったが、しかたがなかった。舅は彼を自分の牛車で邸宅まで運び、それから牛を離し、自らの腕で引いて門をくぐった。このような待遇はまさしく深い親愛の情から出たものだったが、源氏にとって大臣のこの親切はただ気持ちを苛立たせるだけだった。</p>	<p>そこに、左大臣閣下も到着した。 「お迎えに上がりたかったのですが、貴方が何も言わずに出発されたので、やめておきました。これから我が家にいらして、何日かゆっくりお過ごしください。私もお伴します」 と言った。若君はその提案にあまり乗り気ではなかったが、従った。左大臣は、先に源氏を自分の車に乗せてから、後ろの席に座った。源氏は当惑はしたが、自分を迎えるためにどれだけ気を配ってくれたかを認めないわけにはいかなかった。閣下の邸でも全員が彼の到着を待っていた。長い留守の間にすべてが片づけられ、整理し直されていて、まるで宝石のような輝きを放つ邸宅ができあがっていた。</p>

<p>56 光源氏は久しぶりに葵の上と対面するものの、二人の心は通わない</p>	<p>葵の住居部分は源氏の来訪に備えて隅々まで整理されていた。最後の訪問から長い時間が経ち、その間に多くの改修が行われ、その一つとして、素晴らしい露台が作られていた。驚くほど手入れの行き届いたこの屋敷には、完璧でないものは何一つなかった。いつもながら葵は姿を見せなかった。父が何度も催促したあげく、やっと夫の前に現れることを承諾した。絵に描かれた姫君のような態度で、ほとんど身動きせず座っていた。確かに美しかった。</p> <p>「何とか貴女が興味を持ってそうだとお考えになるか、答えるように説得なさるなら、山里での短い滞在のことを喜んでお話しするのですが。このような状態が続くのは私には耐えられません。どうして貴女はこんなに冷たく、無関心で、誇り高いのですか？ もう何年も私たちは折り合いがつかないどころか、むしろ前よりも完全に私から離れています。ほんの少しでも普通の関係を築けないものなのでしょうか？ 私がこんなに病に伏せていても、様子を知りたいと心配すらしてくださらなかったのは少し変に思えます。いや、そんなことを期待していたとは言いませんが、それにしてもとても辛いことだと思います」</p>	<p>源氏の夫人である若い女性は、いつものように自分の部屋に引きこもっていたが、父親の執拗な求めに応じてようやく姿を見せた。まるで物語の巻物の絵に描かれた姫君のように行儀よく座り、どんな些細な仕草も完璧で抑制されていた。もし自分の思いを打ち明けたり、山奥の旅について話したりして、彼女の関心と適切な返事を得ることができれば、とても魅力的だったのだろうが、実際には、ほとんど源氏を迷惑な存在と思っているかのように、よそよそしいまだった。まるで時とともに二人の距離がいつそう広がってしまったようで、これは思いもよらない悲しいことだった。</p> <p>「たまには世間一般の人々と同じように、もっと親しげな態度をとってくださったら嬉しいのですが。私が病に苦しんでおりましたのに、貴女は安否を尋ねようともなさいませんでした。それは驚くほどのことではありませんが、やはり残念に思います」と彼は言った。</p>
<p>57 古い歌を引用して恨み言を述べる葵の上を光源氏は避けようとする</p>	<p>葵は言った。</p> <p>「ええ、人が自分に起こったことを気にかけてくれないのはとても辛いことでございます」そして話しながら自分の肩の上に目を向けた。その顔は軽蔑と高慢に満ちていて、それが彼女をいつになく美しく見せていた。源氏は言った。</p> <p>「貴女はめったに口を開けませんね。開けるのはいやなことを言うときか、まったく無邪気な言葉を侮辱のように聞こえるほどに変えてしまうときです。ほんの短い間であっても、貴女が少しでも不愉快な思いをしないように手助けをしようとする、ますます近寄り難くなってしまいます。いつかはわかってもらえる時が来るでしょう……」</p> <p>そう言いながら、夫婦の寝室に入った。彼女はついて来なかった。しばらくの間、彼はとても腹を立て、気分を悪くして横になっていた。だが、結局のところ彼女のことはそれほど重要ではなかったようで、間もなく彼は放心状態に陥り、まったく異なるさまざまなことが頭に中を駆け巡った。</p>	<p>「来ない人を待つのは辛いことだと仰りたいのでしょうか？」</p> <p>とすばやく流し目を向けた夫人の顔は、源氏に気詰まりな思いをさせるほど美しく誇らしげだった。</p> <p>「まれにしか話さない方ではありますが、この貴女の言葉はなんと馬鹿げているのでしょうか。『来ない人を待つ』という言葉が私たちの関係を指しているはずはありません。貴女の仰ることは失礼です。時間が経てば貴女の態度も変わっていくだろうと思っていましたが、私がいろいろ試みているにもかかわらず、私を疎んじておられるようです。仕方ありません。多分そのうちに、もし私が生きていたら……」</p> <p>言い終えて、しつらえられた寝室の方へ向かった。若い奥方はすぐには彼の後を追わず、彼も他に言葉が見つからないまま、ため息をつきながら床についた。おそらく彼の中ですべての興味が失せてしまったからだろうか、眠ったふりをしていたが、頭の中では別のさまざまな思いが駆け巡っていた。</p>
<p>58 光源氏は葵の上への不満と反対に紫の上への思いが強くなっていく</p>	<p>自分のもとに幼女を呼び寄せ、大人の女性になるまで見届けたいとかつてないほど切望した。だが祖母の言うことももっともだった。少女はあまりに小さすぎ、その話題に戻るのとはとても難しいだろう。だが都に連れてきてもらうためにいろいろと骨を折ることができないのだろうか？ そうすれば、彼女を呼びにやる口実が常に見つかるだろうし、そのような不確実な状態でも彼女は常に喜びを与えてくれるだろう。彼女の父親である兵部卿の皇子は確かに洗練された物腰の男性だが、全然美男ではなかった。どうして幼女は叔母の一人によく似ていて、他の親族とは似ていないのだろう。源氏は藤壺と兵部卿の皇子は同じ母親から生まれた子で、他の姉妹は腹違いにすぎないのだろうという印象を持った。女の子が自分がこれほど長く愛した女官のこのように近い親戚であることで、彼女を自分の側に置きたいという決意はますます固くなった。そしていい結果を得るための名案を再び練りはじめた。</p>	<p>確かに、自分のそばに「若草」を置いて、その成長ぶりを眺められたら嬉しいことだったろう。だが、まだ若すぎると考えるのももっともなことだったし、第一、彼女に近づくのも容易なことではなかった。それでも、どうして自分の家に少女を連れてきて、朝に夕に彼女の存在に慰めを見いだすための妙案を見つけようとならないのか？ 父親の軍務省長官である皇子は、教養があつて好ましい人物だが、特別な美男とは言えなかった。それならば、なぜあの幼女は、同じ一族に属するもう一人の女性にあれほど似ていたのだろうか？ 想像するに、父親と叔母がどちらも同じ皇后から生まれたからなのだろう。この血縁関係によって女の子はいつそう愛しいものに感じられ、解決法を見つけたいという欲望が強まった。</p>

<p>59 帰京した翌日、光源氏は僧都や尼君などがある北山へ消息をおくる</p>	<p>その翌日、僧侶に感謝の手紙を書いた。そこに自分の目論見をほのめかしたのは当然のことだった。尼僧にはこう書いた。 「あのよういきっぱりと私の申し出に反対なさるのを見て、私は自分の意向をこと細かくご説明するのを控えておりました。ですが私が勇気を出して申し上げたわずかな言葉が、少なくともこれが単なる気まぐれやつまらぬ妄想でないと思えていただけるのに役立つなら、どんなに嬉しいことでしょう」 幾重にも折り畳んで手紙に挟み込まれた小さい短冊には、歌が書かれていた。 「あの山桜の可憐さを忘れようと心の底から努めました、一瞬も私から離れることはありませんでした」 尼僧は盛りの年齢からだいぶ時は経っていたとはいえ、書状の優雅さに喜び満足せずにはいられなかった。洗練された筆跡で書かれていただけでなく、目端の利いた何気なさで折り畳まれていたので、彼女の中に感嘆の思いが生まれた。彼女は源氏が気の毒になり、良心がもっとも好意的な返事を送ることを許していたら幸せだっただろうと思った。そして彼に手紙を書いた。 「たまたまこの近くにいらっしゃった機会に私どもをお訪ねくださったこと、とても嬉しくございました。ですが、わざわざお越しいただいたとしても（心から祈っておりますが）、前に申し上げた以上につけ加えることはできないのではないかと思います。同封の歌につきましては、孫娘がお返事を書くことを期待しないでください。まだ音節を区切って読むこともできず、難波津を間違ひなく書くこともできないのですから。そこで、あの子に代わってお返事させていただきます。 『突風が吹きつける尾上の浜沿いの枝に桜の花が残るよりも長く、心が変わらないことを貴方はお示しになっていらっしゃいません』 私としては、たいへん困惑しております」</p>	<p>翌日、僧院長に手紙を送り、自分の意向をそれとなく伝えた。尼僧にはこう書いた。 「貴女の慎重さに臆病になり、自分の思うことをすべて言い表すことができませんでしたが、もし私の言葉から、私の思いがありきたりのものでないとおわかりいただけたら、嬉しゅうございます」 手紙の中には、結び目になるまで折りたたまれた紙が挟まれていた。 「山奥の桜の光景は 私から離れることはありません 自分の心のすべてを あの場所に置いてきましたのに 夜の風は私を不安にさせます」 その筆跡が完璧だったのは言うまでもなく、気どりのない優雅さで折られた手紙も、尼僧と花の盛りの年を過ぎた侍女たちの目には、何とも言えないほど洗練されたものに映った。 「何と答えればよいのでしょうか？ 本当に困ったことです」 女性は悩んだ。 「貴方が出発なさったときのお言葉を私は軽く考えておりましたが、今、私にお書きになった手紙に何とお答えすら全部きちんと書けないのです。ですからあの子の返事をお待ちになっても無駄です。とにかく 嵐の一吹きで散る前の ほんの一瞬の間に 山奥の桜は 貴方の心を引き留めたのですね それが私を不安にさせるのです」</p>
<p>60 僧都からの返事を残念に思った光源氏は、惟光を使者として遣わす</p>	<p>僧侶の答えも同じような調子だった。源氏はとても残念な気分で、2、3日後に惟光を呼び、尼僧宛の手紙を託した。またそれと同時に、幼女の乳母の少納言からできるだけ情報を手に入れるよう頼んだ。 「何と感情的なお方なのだろう！」と惟光は思った。彼は女の子をほんのわずか見ただけで、とても美しかったことを覚えてはいるが、それだけでまだ幼いと確信するには十分だった。ああ、主君の心といたら！ 他にどんな悪ふざけをしようというのだろうか？</p>	<p>僧院長の答えも同じ調子だったので、落胆した源氏は、二、三日後に惟光を使いとして山へ送った。 「少納言と呼ばれる乳母がいるはずだ。彼女に話してすべてを説明せよ」 「どんな機会も逃さないのだな。まだ幼い子供のようだったのだが」 惟光は、自分自身もほんの一瞬だったがその子を見かけたことを思い出し、愉快に思った。</p>

<p>61 惟光は少納言の乳母に面会するものの、周囲の人々から警戒される</p>	<p>老僧はこのように特別で内密な使者に手紙が託されたのにとても心を打たれた。手紙を渡した後、惟光は乳母を探した。源氏から託された伝言をそのまま繰り返して、自分の主人について大量の全般的情報をつけ加えた。饒舌な男なので話は終わらず、次々と自分の頭に突然浮かんで重要と思えるような話を取り入れていった。その結果として、少納言は、他の誰でも同じだったろうが、源氏がこんな不釣り合いなほど幼い娘に興味を抱く訳がわからなかった。尼僧宛の手紙はとても懇懇に書かれていた。その中で源氏は、尼僧の手紙にあった手習いをしている女の子の筆跡の一例をぜひ見たいと書いていた。前回と同じように歌が同封されていた。</p> <p>「私の意向が戯れに過ぎないと貴女に告げたのは、山の泉の影だったのでしょうか？」</p> <p>尼僧は答えた。</p> <p>「たぶんあの水の流れに身を任せた人は今ごろ後悔しているでしょう。もしもう一度このようなことになったら影が私に告げてくれるでしょう」</p> <p>惟光はまた同じ趣旨の伝言を直に伝え、それと同時に、尼僧の体調が良くなり次第、都に出て源氏と話すだろうと確約した。源氏はその訪問を思うと不安が隠せなかった。</p>	<p>僧院長は、源氏が新しい手紙を託したことに感謝の様子を示した。少納言という乳母から迎えられた惟光は、君が考えていることを微に入り細にわたって伝えた。彼は話上手で、その言葉には説得力があったが、その場にいた人は皆、このような若い子に一体何をしたいというのだろうか、と当惑の態度を見せた。手紙は細心の注意を払って書かれ、今度も少女宛の手紙が挟まれていた。</p> <p>「貴女の書いたものを何か見てみたいです。綴りがまだ完全でなくても、文字が揃ってなくても構いません。</p> <p>私の想いは 安積（あさか）山の名前のように 浅くはないのに どうして泉の姿は 私からこんなに離れてしまうのでしょうか？」</p> <p>「水を汲み上げた後で 水があまりにも浅すぎたと 後悔しているそうですが その姿を留めるには 確かに泉は浅すぎるのです」</p> <p>尼僧はこう答えた。惟光も同じような伝言を伝えた。奥様のご体調がよくなり、都に帰られたら、消息をお知らせになるでしょう、と乳母は言い、その言葉が源氏をこれまでになくほど不安にさせた。</p>
<p>62 光源氏は王命婦の手引きで、病気で里邸に退出中の藤壺と密通する</p>	<p>そのころ藤壺の女官は病に伏せ、しばらくの間宮中から引き下がっていた。不安に駆られ苦悩する天皇の姿は源氏の心を打った。それでも、無視できない機会であることは見逃がさなかった。その日は一日中興奮しながら過ごし、自宅でも宮中でも他のことを考えたり人に会ったりすることができなかった。ようやく夕刻になり、侍女の王命婦に女主人へ伝言を渡すよう説得することができた。若い女性は2人の間で連絡を取るのとはどんなものでも非常に無分別だと思ったが、夢の中を歩く人間のような奇妙な眼差しを源氏の顔に見て、不憫に思っ立ち去った。姫君にとって過去の源氏との関係は今では不幸で惨めなものに思われ、それを思い出すことは彼女にとって止めどもない拷問だった。彼女は二度とこういうことは繰り返すまいと決めていた。</p> <p>彼を厳しくも悲しげな態度で迎えたが、それでも彼女の魅力は損なわれなかった。彼が自分への許されない賛美に酔っているのを感じ、非常に冷たく蔑んで応対しはじめた。源氏は自分が間違っていたと認めて心を安らかにするため、彼女の中に何か不完全な部分を見つけることだけを願った。</p> <p>何が起こったか私が語る必要はないだろう。夜はあまりにも早く過ぎてしまった。彼は彼女の耳元で歌をささやいた。</p> <p>「私たちがようやく会えた今、今夜二人で見た夢の中に永遠に消えてしまうことができましたら！」</p> <p>だがまだ後悔に苛まれている彼女は、</p> <p>「もし永遠の夢の闇に隠れたとしても、私の恥は口伝えて世間を駆け回っていくでしょう」</p> <p>源氏はわかっていたが、彼女が不安と後悔の危機的状態に陥ったのは本当に無理もないことだった。源氏が立ち去るとき、王命婦が彼の忘れていった外套や他の持ち物を手に後を追った。</p>	<p>藤の御殿の姫は、あまり具合が良くなく、実家に里帰りしていた。天皇が不安や苦悩を表すのを気の毒に思いながらも、源氏の頭はこの機会になら彼女と会えるかもしれないという思いで占められ、他のどの女性にも会いに行かなくなってしまった。宮中でも、私邸である二条の屋敷でも、昼間はぼんやりとして物思いに耽り、日が沈む頃になると、侍女の王命婦を仲介として姫のところへ行くあらゆる方法を探した。女は何とか妙案を編み出し、源氏を満足させることができたが、その常識からかけ離れた短い逢瀬は、現実とはほど遠く、夢のように思えた。藤の御殿の姫は、かつて二人の間に起った許しがたい出来事の思い出だけでも、絶え間ない苦しみの原因となっていて、もう二度と会わないと決意していたので、今は落ち着かず惨めだった。源氏との距離を置こうと努めていたものの、姫君はこれまで以上に優しく魅力的で、彼をまごつかせるほど繊細な振る舞いは、彼女が他の女性とは違うということを裏づけていて、彼女に欠点を見いだせないということがどうしてあり得るのだろうか、と源氏に苦々しく思わせるのだった。自分の望んでいることをすべて姫君に言うことができるのだろうか？ そうするためには、夜明けを知らない暗部山に行かなければならなかっただろう。だが、まさに夏の夜の短さが、この逢瀬に予期せぬ辛さをもたらした。</p> <p>「夢が現実が変わる あの夜々はもう巡ってこないでしょう 貴女に出会うことはできましたが 私はこの夢の中に消えてしまいたいのです」</p> <p>彼の涙があまりにも感動的で、女性はこう答えた。</p> <p>「後世の人々に 語り継がれることでしょう この上ない苦しみに 覚めることのない夢の中に 私が溶けてしまっても」</p> <p>彼女の絶望はもっともで、彼も彼女のために悔やんだ。 若君の着物を集めてお渡ししたのは、王命婦だった。</p>

<p>63 光源氏は邸に帰った後、藤壺と密通したことを思い悩んで泣き臥す</p>	<p>その日一日、彼は激しい苦悩に襲われて床に伏していた。手紙を送ったが、開かれずに戻ってきた。以前にもこのようなことは何度もあったが、今回はあまりにも悲しみが大きく、2、3日の間完全に打ちひしがれて寝室から出ることすらできなかった。そうしている間も、心配した父帝が息子を襲った新たな心配事は何かと問いはじめめるのではないか、という不安に絶えず悩まされていた。</p>	<p>私邸に戻り、その日は涙に明け暮れた。自分が書いた手紙を婦人が見もしなかったと伝えられたとき、それはいつもの振る舞いではあったが、心が傷つき悲しんで、二、三日は家にこもったまま、宮中にも参内しなかった。その間、陛下が自分のことを何が起こったのかと心配しているかもしれない、という思いにも悩まされていた。</p>
<p>64 藤壺の懐妊という密通の結末を、王命婦はあまりに嘆かわしく思う</p>	<p>今では自らの破滅を確信していた藤壺は深い憂鬱に落ちこみ、健康状態も日に日に悪化していった。宮中からは使者が次々にやってきて、彼女にすぐに戻るよう懇願したが、その決心を下すことができなかった。体の不調から心の中は秘密の胸騒ぎで一杯になった。体を動かさず、頭の中は空っぽで、自分に何が起きるのかひたすら自問する日々を過ごしていた。暑い季節になると、床から起き上がることをさやめてしまった。すでに3か月が経過し、彼女の体にはもはや疑いの余地がなかった。間もなく人に知られることとなり、皆が噂をするだろう。彼女は自分に降りかかった災難に狼狽した。秘密にする理由を知らないお付きの者達は、彼女が天皇にまだ何も知らせていないことに驚いた。憶測は限りなかったが、謎の本当の答を出すことができるのは姫君だけだった。姫君の髪の手入れや入浴の世話をしていた王命婦とその年配の乳母の娘は、すぐに変化に気づき、少し驚いた。だが王命婦はそのことについて話し合うつもりはなかった。自分が手助けしたあの逢瀬が今、残酷なまでのすばやさで正確さで結果を生み出してしまったのではないか、という懸念を抱いて当惑していた。宮中には、他の体調不良のために姫君の侍女達が思い違いをして、体調の本当の理由を見抜けなかったと報告された。その説明に皆納得した。天皇の愛情深い思いやりはますます大きくなり、使者たちが常に消息を伝えてはいたが、その顔を悲観的な疑いと妄想が絶え間なくよぎっていた。</p>	<p>藤の御殿の姫は、自らの不幸な運命に苦しみ、ますます悩みを深めていった。宮中に戻ることを請う伝言を頻繁に受け取っていたにもかかわらず、出発する決心がつかなかった。誰も知らないうちに、普通の性質ではないらしい不調の原因が何であるかについての疑いが心に浮かび、これから先のこと以外何も考えることができなくなるほど悩んだ。暑い季節が到来すると、起き上がることもできなくなった。三か月目に入り、その状態がもはやはっきり明らかになると、周囲の女性たちは姫に起きたことに感づき始め、そのこともあって、これまでになく宿命の重さを感じさせた。本当に何があったのか知らない侍女たちは、この時期になってまだ陛下に何もご報告していないことに驚いたが、彼女しか知らない真実があったのだった。風呂場にも同行して身近にお仕えしていて、その状態に気づく機会が多かった王命婦と乳母の娘は、途方にくれたが、お互い打ち明け合うような話題ではなかったので、王命婦は避けることのできなかったその運命を深く悲しむだけだった。宮中にはおそらく、何か邪悪な霊の介入によって妊娠の兆候がすぐにわからなかったと伝えられたのだろう。皆が納得していた。陛下はたいそう心配し、使いを送る回数を増やしたので、それが姫君に途絶えることのない恐怖と不安を引き起こした。</p>
<p>65 ただ事ではない異様な夢を見た光源氏はわが身に起こる運命を知る</p>	<p>そのころ源氏はきわめて奇妙で愕然とする夢を見た。夢判断の者を読んでみたが、彼らにもよくわからなかった。意味を解明できない点がいくつかあったのは確かだったが、一つだけはっきりしたことがあった。夢の主は誤った一歩を踏み出しているのを気をつけなければならない、ということだ。「私が見た夢ではない。他の人が見た夢のことで相談しているのだ」と心配になった源氏は言った。そして「誤った一歩」とはいったい何のことだろうと自問しているうちに、姫君の体調について知らせが届いた。それでは、夢が予言していた災いとはこのことだったのだ！すぐにとどめ長い手紙を書き、自分の非を認めると同時に彼女を情熱的に元気づけた。だが、彼女の不安をかき立てるだけだと考えた王命婦は手紙を届けるのを拒否し、彼の方には信頼できる使者が他に誰もいなかった。彼女がときどき送るのが常だった短くてそっけない手紙さえも、しばらくの間まったく届かなくなってしまった。</p>	<p>若君も奇妙で恐ろしい夢を見た。夢を解釈する者に問い合わせたところ、それは尋常でなく信じがたい事実の予兆だという答えだった。「不慮の事態が起こるかもしれないので、慎重になさるがよいでしょう。殿下」占い師がそうつけ加えると、その言葉に動揺した彼は言った。「これは私の夢ではなく、他人が見た夢だ。夢が実現しない限り誰にも話してはならない」その間も、どういう意味なのだろうと心の中で思い続けていると、姫君についての知らせが届いた。「夢はこのことを意味していたのか？」と考え、思いつく限りの悲痛な言葉を尽くして、もう一度姫君に会おうとした。だが、事態がますます複雑になっていくのに慌てた王命婦は、彼のために何もすることができなかった。すべてが止まってしまい、手紙も、かつては一行の短いものが届く事がごく稀にあったが、それさえ届かなくなった。</p>
<p>66 七月になり、宮中に帰参した藤壺へ桐壺の帝の寵愛はいっそう増す</p>	<p>7番目の月に入ったころ、藤壺は宮中に再び参上した。彼女が戻ったことを喜んだ天皇は、限らない愛情を彼女に惜しみなく与えた。体つきはふっくらしていて、いつになく青白くやせた顔つきは、帝には新鮮で比類のない魅力に思われた。以前のように自由な時間はずっと彼女と過ごした。この時期に宮中では多くの宴が催され、源氏は絶対になくなくてはならない存在だった。ある時は琴や横笛を演奏するよう請われ、ある時は違う形で父帝を補佐するよう請われた。このような機会に、当惑や動揺の影を見せないよう努力はしていたが、つい感情を漏らしてしまうことをいつも以上に恐れた。一方、彼女にとっては源氏と顔をつき合わせるのとは絶え間ない拷問だった。</p>	<p>一年の七番目の月が訪れ、姫君は宮中へ戻った。姫君を包む陛下の情愛はこれまでにないほど深かった。身体は少し重くなり、少し苦しそうな顔つきだったが、唯一無二の美貌は変わらなかった。天皇は再び、昼も夜も姫君の傍で過ごすようになった。もう音楽会に最適な秋になっていて、源氏の君も頻繁に参加するよう招かれ、横笛や琴を奏するよう請われた。自分を抑えようと努めたものの、ときとして隠しようのない感情を示す印がいつい表に出てしまい、そのようなときには姫君も、起こってしまい、頭から消すことのできないすべての出来事を思い続けるのだった。</p>

<p>67 光源氏は六条京極から帰る途中に、帰京して療養中の尼君を見舞う</p>	<p>尼僧は少し体の調子よくなり、今は都に住んでいた。源氏は彼女の住所を調べ、時折伝言を送っていたが、返事は（予期していたことではあったが）過去のものより勇気づけられるものではなかった。この数か月の間、女の子を養女にしたいという気持ちは、冷めてしまうどころか燃え上がるばかりだったが、状況を変える手立てを見つけることができなまま日々が過ぎ去っていった。秋の終わりごろ、彼は失意の底に陥った。月の美しい夜で、不承不承ではあったが、ある人をお忍びで訪ねようと思ったところ、急に雷雨が降りはじめた。すでに屋敷を出発した後で、向かっている場所は都の外れの第6区だったので、雨の中を長い距離を歩くのが不意にいやになった。どうしようと考えているうち、老木に囲まれ、半分崩れかけた屋敷が目に入った。あの暗く荒れ果てた家は誰のものだろうと尋ねると、いつものようにお伴をしていた惟光が答えた。</p> <p>「もちろん、あれは亡くなった按察の大納言のお宅です。たまたま2日ほど前に参りましたが、奥方の尼君はますますお弱りになって、身の回りで何が起きているかもおわかりでないようです」源氏は悲しんで答えた。</p> <p>「なぜ、もっと前に私に言わなかったのか？ すぐにでもお宅へ伺い、あの方のお付きの者に私がどれだけ心配しているかお示したいものだ。お願いだ。すぐにご消息を伺いに行ってください」</p> <p>惟光はすぐに従者の一人を使わし、源氏がわざわざここに来たことをわかってもらうよう念を押した。その者が源氏の君にご消息を知るために使いをやっただけでなく、自ら外で待っていることを告げたところ、家にいた人たちは皆呆然として大騒ぎになった。召使いたちが言うには、女主人は何日も前から深刻な状態で、とても訪問客に面会することはできないということだった。だがこのように著名なお客を無下に帰らせるわけにもいかず、南翼の客間を急いで片づけ、興奮状態で家に入れて言った。</p>	<p>北山に住む尼僧は少し体調も良くなり、あの隠遁所を後にしていた。源氏は彼女の住処を調べ、ときどき手紙も送っていた。返事は当然ながら以前と変わりはなかったが、この数か月間の心痛は、他のあらゆる心配事を彼の心から取り払ってしまい、他のことを考える間もなく時は過ぎていった。</p> <p>秋も終わりに近づき、彼はますます憂鬱になっていた。月の美しい夜に突然、かつてお忍びで通っていた人のところに行こうと決め、外へ出たところで不意に、この季節特有のわか雨に降られてしまった。彼が向かっていた場所は、都の一番東にある六条というところにあり、御所から移動していたので、道のりはかなり遠く感じられた。その道筋、外観が荒れ果て、庭にうっそうと茂る古木の陰に覆われた家を見つけた。</p> <p>「大顧問官兼総視察官のお宅でございます」</p> <p>いつものように、彼にびったりと寄り添っている惟光が伝えた。</p> <p>「先日、どういう理由か覚えてないのですが、あのお宅を訪問したところ、高齢の尼僧の健康状態が悪くなり、どうしていいかわからない、とのことでした」</p> <p>「それはお気の毒に。お見舞いに行けばよかったです。どうして早く私に伝えなかったのか？ 行って様子を聞いてこい」</p> <p>こう答えると、惟光は護衛の一人を使いに行った。その使者には、殿下がわざわざ来たことを伝えるよう指示したが、家に入るとすぐにこう告げた。</p> <p>「殿下が奥様のお見舞いにいらっしゃいました」</p> <p>女たちはあわてた。</p> <p>「私たちは打ちのめされております、この数日奥様のお加減はとても悪くなりまして、ご面会はとてもできそうもありません」</p> <p>と口々に言ったが、このような客人を追い返すのはあまりに失礼なので、南向きの外の部屋を片付け、そこへお通しした。</p>
<p>68 病床の尼君は、紫の上が成長した暁には光源氏に託すことを決める</p>	<p>「このように散らかった部屋でお迎えすることをお許しください。人様に見せて恥ずかしくないように、できるだけのことをいたしました。来られることを予期しておりませんでしたので、この離れた小部屋にお通ししたことを許して下さいませんか……」</p> <p>確かに彼が通い慣れた部屋とはまったく違っていった。</p> <p>源氏は言った。</p> <p>「ずいぶん前からお宅に伺いたいと思っていましたが、ある私の意向について差し上げたお手紙がいずれもすぐに拒絶され、それで躊躇しておりました。もし奥方様のご体調が悪くなられたと知っておりましたなら……」</p> <p>「あの方に言ってください。間もなく私は再び意識を失うかもしれませんが、今は私にははっきりした考えがあります。あの方が死の床にある私に会いに来て下さったご親切をとてもありがたく感じており、直接お話しできないことを残念に思います。万一、前回一緒にお話ししたご計画についてお考えに変わりがないのなら、時期が来たら何とかあの子をお宅の女官の一人として迎えてください。私はあの子と別れる不安におののいており、現世とのこのような縁が私が祈りの中で希求していた世へたどり着く妨げになるのではないのではないかと心配しております」</p>	<p>「散らかっていて申し訳ありません。奥様は貴方のご親切にせめてお礼だけでも述べたいと言っておられます。予期せぬご訪問で、このような居心地の悪い場所でお迎えするのをお許しください」</p> <p>確かに、その場所は彼が通い慣れたところとは違っていった。</p> <p>「何度も、ここをお訪ねしようと思っていたのですが、貴女の態度から、どんな試みも無駄だろうと思って勇気が出ず、あえて伺おうとしませんでした。ご病気が悪くなったと存じあげず、たいへん申し訳ございません」</p> <p>と言った。</p> <p>「私の体調は前から不安定でしたが、もう最後の時が参りました。ご来訪を感謝していますが、残念ながらご挨拶することができません」</p> <p>尼僧は女たちの一人を通じてこう伝えた。</p> <p>「お申し出についてですが、もしお考えが変わらないのであれば、あの子がこんなに小さく世間知らずではなくってから、どうぞお宅へお迎えください。あの子を一人ぼっちで見捨てられたままここに残していくという思いが、私がかんから望む道のりの妨げになると考えずにはいられないのです」</p>

<p>69 光源氏は紫の上の無邪気な声を聞き清纯な彼女にいつそうひかれる</p>	<p>寢室はとても近く、仕切りも薄かったので、尼僧が少納言に伝言を託している間、源氏にはその震える苦しげな声が絶え絶えに聞こえた。間もなく、誰かに向かってこう言うのが聞こえた。「大変ご親切にお越しいただいて。あの子がせめてきちんとお礼を言えるぐらい大きければよかったのですが」 源氏は少納言に言った。 「親切というわけではありません。深い感情があったからこそ、私はこのように辛抱強く懇願することができたのだと思います。初めて女の子を見た時から、不思議な愛おしい感覚が私を捕らえましたが、今それが現世だけのものではない愛情に変わってきました。わがままかもしれないませんが、私はあの子の声をぜひ聞きたいのです。立ち去る前にこちらへ来てもらうことはできませんか？」 少納言は言った。 「かわいそうなお嬢様。お部屋でぐっすりお休みになっていて、私どもが困っていることは全然ご存じないのです」 だが話している間に、女性たちの部屋で誰かが動いているのが聞こえ、突然こう言う声が出た。「お祖母様、お祖母様！ 山で会いに来られた源氏の君が、ここへ来ていらっしゃるわ。どうして入ってお話してくださいと言わないの？」 「お静かに、お嬢様、お静かに！」 侍女たちは皆びっくりして叫んだ。幼女が言った。 「いいえ、いいえ。お祖母様はこの皇子様を見たらすぐに気分がよくなったと仰っていたわ。私はお馬鹿さんではないのよ、本当に」 この言葉は源氏を有頂天にさせた。だが、この家の侍女たちは幼女の言葉が辛く場違いなものと思い、彼女の最後の批判を聞かぬふりをしていた。源氏は正式な訪問をあきらめ、家に帰った。道すがら、あの少女の態度はまだ幼い子そのものだったと思った。だが、あの子を育てるのは何とたやすく楽しいことだろう！</p>	<p>尼僧はすぐ近くにいたので、その苦しそうな声が絶え絶えに聞き取れた。「とても寛大なお申し出です。あの子が感謝の気持ちを自分で表せるほどの年齢でありさえすれば……」 年老いた尼僧は、女たちに向かってこう言い足した。彼は心を打たれた。 「もし私の気持ちが表面的なものであったら、どうしてこのような申し出をすることができたのでしょうか？ 不思議なことですが、あの娘さんを初めて見たときから、この世のご縁だけではなく、前世から定められていた運命が作用しているに違いないと思わせるような親しみを感じていたのです」 と言った。 「せめて彼女の声だけでも聞くことができなければ、ここまで来た甲斐がないように思えます。どうかお願いします」 こうつけ加えると、女の一人が答えた。 「お気持ちはよくわかりますが、実はお嬢様は今何が起こっているかも知らず、もうお休みになりました」 だが、まさにその時、反対の方向から声が聞こえた。 「お祖母様、僧院でお目にかかった源氏の君がここにいらしてそうよ。どうしてお会いにならないの？」 女たちは慌てて、黙るようにとささやいたが、自分の言っていることに満足した少女は、こう言い返した。 「どうして？ お祖母様はもしあの方に会えればもっと安心するのに、と仰っていませんでした？」 彼はその言葉にうっとりしたが、女たちが当惑し悲しんでいるように思われたので、何も聞かなかったふりをして、尼僧を元気づける見舞いの言葉を残して立ち去った。少女の態度はまことに子供っぽいと感じたが、やはり、彼女の世話をして完璧な女性に育ててみたいものだったと思った。</p>
<p>70 翌日、光源氏は尼君への見舞いととも紫の上へも結び文をおくる</p>	<p>翌日、本当の訪問をした。到着したとき、いつもの細長い紙の帯に書いた歌で来訪を告げた。 「若い鶴の声を聞いたときから、私の小舟は不思議なことに、葦の原に絡まって止まりがちです」 その歌は女の子に宛てたもので、大きくて子供らしいがとてもきれいな字で書かれていたので、それを見た侍女たちはすぐに言った。 「これはお嬢様の手習い帳に入れなければ」 少納言は彼にこのような紙を届けた。 「夕刻まで生きていられないと感じられた奥方は、山のお寺に連れて行ってほしいと仰って、もうご出発なさいました。遅すぎることにならないうちに便りを届けることが許されるなら、貴方のお気持ちを伝えてお伝えいたしましょう」 この手紙は彼を深く感動させた。 その秋の夜、彼の心は絶えず動揺していた。もちろん彼の思いはもう一つの心配事に捕らわれていたが、彼が夢中になっている女性と幼女を結ぶ不思議な血縁関係のため、その波乱に富んだ季節の間に、彼女を側に置きたいという願いは日に日に大きくなっていった。彼女を初めて見た夜と尼僧の歌を思い出した。 「若い葉を育ててくれる人が来るのかわからず……」いつまでもかわいらしいことだろうが、場合によっては子供のころの期待が破られるかもしれない。敢えて危険を冒す必要があった。そこで彼は歌を詠んだ。 「紫の根から生えた荒野の若草を、いつ私の手の中で見ることができのだろうか？」</p>	<p>翌日、改めて伝言を送り、それまでと同様に、小さな紙を同封した。 「若い鶴の声を聞いたときから いつも同じ人のところへ戻りながら 葦の原を苦勞してかき分けて行く小舟には 安らぐときがありません」 わざと子供らしく書かれた文字はとても綺麗で、女たちは感嘆して、完璧な習字の手本になれると言った。 伝言に答えたのは乳母だった。 「貴方がご親切にお見舞いくださった奥様は、おそらく今日を越えられそうもありませんので、山奥の僧院へお連れしようとしているところです。しかし、あの世からかもしれないですが、貴方の優しさに感謝なさるでしょう」 手紙にはこのように書いてあり、彼は心の底から嘆き悲しんだ。 秋の夜、絶え間なく自分を苦しめているあの愛について、これまでにならぬほどの思いを巡らしていたとき、あの女性と血縁で結ばれている少女を何としてもそばに置きたいという欲求がさらに強くなった。ある夜に尼僧が言った。 「露は消えるのをためらってしまう」 という言葉思い出し、彼はますます待ちきれなくなったが、同時に、出会ったときに失望するのではないかという不安も感じていた。 「できるだけ早く 私のこの両の手で 同じ紫の根から生まれた 野の若草を摘んでみたいものだ」</p>
<p>71 十月に朱雀院の行幸が予定され、舞人は練習など多忙な日々を送る</p>	<p>10 番目の月に天皇は紅葉祭りのために朱雀を訪問することになっていた。踊り手たちは皆、高貴な一門に属していなければならなかった。帝は自ら、演目の部分を皇子、宮廷人、その他の高位の人々に任せただけで、天皇家の皇子や大臣から階級の低い人々に至るまで、誰もが訓練と稽古に没頭した。</p>	<p>十番目の月に、陛下は朱雀院へ赴くことになっていた。この機会に舞を舞うために、最も階級の高い名家の子息、高官、宮中の貴族たちの中から芸に優れた者が選ばれ、皇子や大臣をはじめすべての人が休むことなく練習に励んだ。</p>

<p>72 尼君の死去という知らせが届き光源氏は母更衣との死別を思い出す</p>	<p>源氏はふと、山で出会った友人たちの消息をしばらく聞いてないことを思い出した。すぐに特別な使者を送ったところ、僧侶からのこのような手紙を持ち帰った。 「先月の20日に突然最期の時がやってきました。命ある者すべての運命ではありますが、妹を失ったことを深く悲しんでおります」 他にもいろいろと書いてあったが、源氏は手紙を読みながら、人生の短さとはかなさという苦い感覚に満たされるのを感じた。そして、亡くなった方があれほど将来を心配していた幼女はどうなるのだろうか？ 源氏は自分の母が亡くなったときのことをはっきりと覚えてはいなかったが、まだ彼の中に残っていたいくつかのおぼろげな記憶により、彼のお悔やみの手紙はより温かい気持ちのこもったものになった。乳母の少納言から趣のある返事が届いた。</p>	<p>その騒ぎが落ち着いた後、源氏は、山に暮らす尼僧の消息を長い間尋ねていないことに気づいた。だが使者を送ったところ、返事をくれたのは僧院長だった。 「先月の二十日に亡くなりました。これも私どもの運命とは知りながら、私は深く悲しんでおります」 この知らせは、この世のはかなさと悲しみを強く彼に感じさせたが、年老いた婦人がたいそう気にかけていた女の子はどうなっただろう？ まだ幼いとはいえ、自分が一人残されたと感じていないのだろうか？ 不確かで曖昧な記憶ではあったが、自分が生みの母を亡くしたときのことを思い出し、深いお悔やみの伝言を送った。乳母の返事は何となく彼の心情を理解しているものだった。</p>
<p>73 夜、光源氏は自分から、忌みの期間が終わった紫の上の邸を訪れる</p>	<p>葬儀と服喪期間が終わり、女の子は都に再び連れてこられた。源氏はそのことを知っていたが、少し時が過ぎるのを待った。そして月の輝く静かな夜、自らその家へ行った。暗く朽ち果て、半ば打ち捨てられた住まいは、そこに住む女の子の気を滅入らせるに違いないと考えた。彼は前回と同じ小さな部屋に通された。少納言はむせび泣きながら、どのように不幸が起きたかを詳細に語り、彼自身も不思議なほど気が動転した。 女は続けた。 「もしお母上がその家で受けたひどい仕打ちを思い出さなかったら、お嬢様を父上の殿下のところへ送り出したでしょう。もしお嬢様が、どこへ連れてこられたかも、他の人たちがどのように思っているかもわからないほどの子供でしたら、もちろんそうしてははずです。ですが、いじめられるかもしれない知らない子供が大勢いるところへ行くにはもう大きすぎます。お気の毒なお祖母様は、最後の日までいつもそう言っておられました。貴方は私どもに対してたいそうお楽しかったので、たとえ短い期間であっても、お嬢様が貴方の家にいらっしゃると知れば、私は重荷から解放されます。明日お嬢様がどうなるかお尋ねして貴方にご迷惑をかけるつもりはございません。ただお嬢様のことを考えると、もういくつか年上でなかったことだけが残念でございます。そうであればご伴侶としてお迎えいただけたでしょうに。ですが、年より幼く見えるほどにお育ちなのです」</p>	<p>喪の期間が過ぎて親族が都の住居に戻ってきているということを伝え聞き、数日後の他の用事がない夜、源氏は自らそこを訪れた。家は放置されたような状態で、ほとんど人がなく、このような場所では女の子は恐怖を感じたに違いなかった。今度も彼は外の間に通され、乳母が涙ながらにこれまでの出来事を語ったとき、彼も涙で袖を濡らさずにはいられなかった。「お嬢様をお父上に預けることを考えたのですが、あの場所ではもうお母様がずいぶん苦勞されていますし、お嬢様も子供ではありませんが、かといって世間が理解できるほど大人でもない中途半端なお年頃ですから、他の娘たちの中に入れられたら、すぐに被害者になってしまおうでしょう、と亡くなった奥方様は常々そう言って気をもんでおられました。実際、この不安を裏づける例には事欠きません。ですから、たとえうわべだけのお気持ちから出たお言葉であっても、貴方の将来のご意向が何であるか詮察したりせず、寛大なお申し出を喜んでお受けしなければならぬと思うのですが、ただ、お嬢様ご自身に、貴方のお相手ができるようなものがなく、また教育もお年の割にとても物足りないところがあるのではないかと心配なのでございます」 と乳母は言った。</p>
<p>74 光源氏は少納言の乳母に紫の上への気持ちを伝えて歌を詠み交わす</p>	<p>源氏は言った。 「あの子がどれだけ幼いか私に言い続けても無駄です。まさに彼女がこれほど若くて無防備だと知ることでも私の彼女に対する共感が呼び覚まされ、それによってさらに強い絆が私たちの心をつないでいるのに気がつきました（どうして私はこのことを私自身に、あるいは貴女に隠さないといけないのでしょうか？）。私たちの決めたことを私自身で彼女に言わせてください」 そして歌を詠み、その中でこう尋ねた。 「若い葦が成長していく岸に寄せる波のように、彼も次に後退するためだけに前進しているのでしょうか？」 そして「彼女はとても驚くとお思いですか？」と言いついた。 少納言はいずれにしても女の子を呼ばねばならないと言い、そうこうするうちに源氏に歌を返したが、それは彼を警戒させるものだった。 「その方の意向を理解している限り、『藻のように、波に押し流される』に任せるということはないでしょう」 それから、「でも、どうしてお嬢様に会われないまま貴方を帰してしまうなどとお思いになるのですか？」と急に打ち解けた調子で尋ねたので、彼は大目に見ることができた。源氏が座って女の子を待ちながら、 「どうして丘を越えるのはこんなに困難なのだろう？」 という歌の一節を口ずさんでいるのを、侍女たちはじっと観察していたが、その姿は彼女たちに強い印象を与え、しばらくの間忘れることのできない一時となった。</p>	<p>「どうして貴女は、私が何度も申し上げてきた気持ちの深さをなかなかわかってくださらないのですか？ お嬢さんのその未熟さに私は心を動かされておりますが、私たちをつなぐ絆が存在するはずだと信じるのは、まさにそのためなのです。人を介さず話させていただきたいと思えます。 葦の若芽で覆われた 和歌の浦に 藻が隠されていますが 打ち寄せる波は 引くことがあるのでしょうか？」 それではあまりにも失望が大きすぎるでしょう」と彼が言うと、乳母は答えた。「お許しください……。 よく知りもせずに 和歌の浦に近づいてくる波を 信用してしまうとは 藻もなんと軽率なことでしょう あまりに無理を仰います」 彼女の答え方の巧みさにより、言葉の内容は容赦された。 「どうして関所を越えることができないうのか……」彼はつぶやき、その言葉が若い女達の間で深い反響を呼んだ。</p>

<p>75 尼君を恋い慕って泣く紫の上は、訪問した光源氏を父と勘違いする</p>	<p>女の子は床に臥し、祖母のために涙を流していた。近くに仕えていた女の一人が言った。 「大きな外套をまとった紳士が遊びに来て下さいました。お父様かもしれませんよ」 すぐに彼女は飛び起きて 「乳母や、その外套を着た紳士はどこにいらっしゃるの？ 私のお父様なの？」 と叫び、駆け足で部屋に入ってきた。</p>	<p>亡くなった婦人を強く慕っていた少女は、打ちひしがれて泣いていたが、遊び相手の少女たちが、宮廷の装束を着た男性が到着したことを告げると、起き上がった。 「あなたのお父様かもしれません」 「乳母や、その方はどこにいらっしゃるの？ お父上なの？」 と尋ね、こちらに近づいてくる少女の声は本当に可愛らしかった。</p>
<p>76 少納言の乳母は紫の上を年よりも幼い様子であると光源氏に伝える</p>	<p>源氏は言った。 「いいえ、貴女のお父様ではありません。貴女に好きになっていただきたい他の誰かです。こちらへいらっしゃい……」 人々の話の様子から、彼女は源氏がたいへん重要な人物であるとかわっていたので、「外套を着た紳士」と呼んだことで自分にとっても腹を立てているに違いないと想像し、乳母のところへまっすぐ向かい、小さな声でこう言った。 「お願い、私は眠いの」 源氏は言った。 「もう私を怖がらなくてもいいのですよ。眠いのなら、ここへ来て私の膝で横になりなさい。話をしに来るのもいやなのですか？」 「さあ、どんな田舎育ちの子かおわかりでしょう」 と少納言は言い、幼女を彼の方に行かせた。彼女はぼんやりしたまま彼の横にいて、髪に手をやって柔らかな着物の上に波のように垂らしたり、肩の上に集まっている大きな髪の毛を絞ったりしていた。</p>	<p>「私はあなたの父君ではありませんが、まったくの他人と見なすべき者でもありません。こちらへいらっしゃい」 彼は言ったが、女の子は、まだ無邪気だとはいえ、相手が位の高い人であることがわかり、何か失礼なことを言ってしまったと考え、乳母の近くへ寄った。 「あちらへ行きましょう。眠たいわ」 「どうして今になって隠れるのですか？ 私の膝の上で休んでもいいのですよ。もっと近くにいらっしゃい」 と彼女に言った。乳母が間に入った。 「前に申し上げたように、まだこのお歳では世間の慣習がわからないのです」 彼女の方へ少し少女を押しながら言うと、素直にそれに従い、仕切りの簾まで進んできた。彼が手を差し出すと、しなやかな髪が柔らかな着物の上に流れるようになり、その手触りから全体の美しさを見抜くことができた。</p>
<p>77 幼い紫の上の手を強引にとらえる光源氏に少納言の乳母は困惑する</p>	<p>突然、彼は彼女の手を握った。だが、彼女は知らない人から触られているのにびっくりして悲鳴を上げた。 「寝に行きたいと言ったのに」 と手を振り払い、女たちの部屋へ駆けていった。彼は彼女を呼びながら後を追った。 「そんなに逃げないで！お祖母様はもういないのだから、私を好きにならなければいけないのですよ」 びっくりした少納言は息を切らして言った。 「ああ、ちょっと聞いてください！それはあんまりです。このかわいそうな子にそんな残酷なことを言わないでください。人に向かって好きになれと言えばいいなどと本当に思っているのですか？」 源氏は言った。 「いや、今のところは違うと思います。だが、いずれおわかりになるでしょう。私のように、一つのことに全身全霊を捧げると、不思議なことが起こるといえることが」</p>	<p>手を握ったが、見知らぬ人物であることには変わりのない人と接近したことにおびえた女の子は身を引いた。 「眠いて言ったのよ」 彼は簾を滑り越えてついていった。 「これからは私があなたのお世話をします。拒まないでください」 「あれ、殿下、それは言い過ぎでございます」 乳母は明らかに当惑した様子で、間に入った。 「まだこんなにお若いのですから、何を仰っても無駄でございます」 「こんなに若いことなど問題ではありません。私の気持ちがこの世に二つとないことをご理解いただきたい。それだけです」</p>
<p>78 あられが降り風が激しく吹く夜、光源氏は紫の上の御帳の中に入る</p>	<p>雹が降っていた。このような恐ろしい嵐の夜に暗く半ば見捨てられた家に幼女を残しておくという思いで、源氏は言いようもないほど悲しみ、それを彼女の側に留まる言い訳とした。そして叫んだ。 「仕切りの戸を閉めなさい！ この恐ろしい夜に見張りをするため、しばらくここに残ります。皆私の側へ来なさい！」 そう言いながら、まるでこの世で一番自然なことのようにな女の子を腕に抱き、子供の寝床へ連れていった。侍女たちはあまりに啞然とし混乱していて、自分の席から身動きできないほどだった。</p>	<p>乳母はその振る舞いは許されないと考えた。だが抗議するにふさわしい状況ではないように思われたので、ため息をつくだけで何も言わなかった。少女は何が起きたのかと思いながら、怖くて怯えていた。彼女の繊細な肌が震えているに気づき、彼は彼女を裏地のない着物で包み、自分の振る舞いがいかに無礼か承知していたにもかかわらず、優しく話しかけた。 「さあ、私と一緒にいらっしゃい。きれいな絵や遊ぶ人形がたくさんありますよ」 興味のあるようなことを話す口調はとても優しく、幼女の無邪気な心は落ち着いたが、それでも眠ることはできず、何度も寝返りをうっていた。</p>
<p>79 少納言の乳母がため息をつく中、光源氏は紫の上に一晩中寄り添う</p>	<p>少納言はこの横暴なやり方にとっても動揺し、苛立ちを覚えたが、率直に言って口出しをする理由がなかったため、自分の場所にじっと座ってうめいている他なかった。女の子は初めのうちひどく怯えていた。源氏が何を考えているかわからず、全身で震えていた。近くに引き寄せようとして、彼が繊細でみずみずしい肌に触っただけでも鳥肌が立った。彼はそれに気づいたが、優しく慎重に着物を脱がせはじめ、それから寝かせた。まだ彼女が自分のことを怖がっているのはよくわかっていたが、優しく話しはじめた。 「いつか私と一緒に、きれいな絵やお人形、玩具がたくさんある場所に行きたくないですか？」 そして、彼女がいちばん興味を引きそうなことをよく理解して話し続けたので、ほどなく彼女もほとんど打ち解けたように感じた。とはいえ、しばらくは落ち着かず、本当に眠ることはできなかった。</p>	<p>乳母はその振る舞いは許されないと考えた。だが抗議するにふさわしい状況ではないように思われたので、ため息をつくだけで何も言わなかった。少女は何が起きたのかと思いながら、怖くて怯えていた。彼女の繊細な肌が震えているに気づき、彼は彼女を裏地のない着物で包み、自分の振る舞いがいかに無礼か承知していたにもかかわらず、優しく話しかけた。 「さあ、私と一緒にいらっしゃい。きれいな絵や遊ぶ人形がたくさんありますよ」 興味のあるようなことを話す口調はとても優しく、幼女の無邪気な心は落ち着いたが、それでも眠ることはできず、何度も寝返りをうっていた。</p>

<p>80 女房たちは、悪天候の中での光源氏の訪問が心細さを慰めたと話す</p>	<p>嵐はまだ吹き荒れていた。 女たちの一人が囁いた。 「もしこの紳士がここにいてくださらなかったら、私たちはどうなっていたでしょう？ 私としては、きっと地獄のように怖かったと思います。ああ、あの方とお嬢様の年の差がこれほどなかったらよかったのに！」まだ警戒している少納言はその間中、源氏から少しも離れなかった。ようやく風は穏やかになってきた。夜はほとんど明けていたが、源氏がそんな時刻に帰るのを見ても、誰も驚かなかっただろう。彼が言った。 「本当に愛しい人となりました。特にこの子にとってこれほど悲しい時期に、わずかな時間でも残していく決心がつきません。どこか私が見たいときに会える場所に移そうと思います。このような家に暮らすのを怖がらないことに驚いています」</p>	<p>その夜、風は一瞬として止むことがなかった。 「確かに、あの方が私たちと一緒にいてくださらなかったら、とても不安に感じていたことでしょう」女たちは内輪で囁き合った。 「ただお嬢様がもう少し大人だったら……」 不安に駆られた乳母は、彼女たちからは少し離れたところにいた。風は少し収まってきたが、まだ真夜中で、その時刻に去って行くのは、まるで密会のためにここまで来たような印象を与えた。 「どれほど可憐で上品なお方と知ってしまった今となっては、気の安まるときはないでしょう。私が寂しく孤独な日々を過ごしている場所にお連れしようと思います。どうしてこんなところにいられるのでしょうか？ 怖がっておられないのに驚くばかりです」</p>
<p>81 尼君の四十九日後に、兵部卿宮は紫の上を邸に引き取る意向を示す</p>	<p>少納言は言った。 「お父上がご自分のところへ連れていくというようなことを仰っていたようですが、四十九日が終わる前にはなさらないでしょう」源氏は認めた。 「もちろん、普通の状況でしたら父親が面倒を見るのが当然ですが、小さいころから他の人に育てられているのだから、私より父親に愛着を感じる理由の一つもありません。知り合ってから間もないとはいっても、父親より私の方があの娘を可愛いがっているのは確かです」 こう言いつつ女の子の髪の毛を撫で、後ろを何度も振り返りながら、不承不承寝室を後にした。</p>	<p>「お父上の皇子殿下が迎えに来ると仰っていましたが、最初の追悼儀式前に必要な四十九日が過ぎてからだと思います」 と乳母が言い、彼は言い返した。 「確かに尊敬に値するお方ですが、娘さんはずっと離れて暮らしていたのですから、彼女にとって殿下は、まさに私と同じく他人です。私がお世話をするのは今この時からにすぎませんが、気持ちが殿下より浅いことはありません」 少女の髪をなでた後、何度も後ろを振り向きながら立ち去った。</p>
<p>82 紫の上と別れた後、光源氏はかつて通った女性の家の門を叩かせる</p>	<p>白い霧が濃く立ちこめ、草木は純白の固い霜で覆われていた。突然、源氏はこれが本当の恋物語であってほしいと思い、大きな失望感に襲われた。帰る途中、かつて親しく迎えられた家の前を通ることを思い出した。扉を叩いたが、誰も返事をしなかった。そこで、声のよく響く召使いにこの歌を唱えるよう命じた。 「朝霜がまだ世界を夜の闇に閉じ込めているものの、わが妹の門口で、私は立ち寄りずにはいられませんでした」 この歌を2度目に繰り返したとき、婦人は生意気で見栄っ張りな小姓を戸口へ送り、その者は歌を唱えた。 「この場を囲む霧の生け垣が本当にお気に召さないなら、壊れそうな籐の格子門だけでは貴方を道に留まらせるには不十分でしょう」 そしてすぐに回れ右をして家に戻っていった。源氏は待ったが、他の誰も戸口へ来なかった。源氏は愚か者のように家に帰る気はさらさらなかったが、もう日も高く昇った今、他に何ができただろう？</p>	<p>空は濃い霧に包まれ、地面は白い霜に覆われていた。もし本物の逢瀬を終えての帰り道だったら、どんなに心地よかったことだろう、と寂しさを感じながら考えた。かつてお忍びで通っていた家のある道を通っているのに気づき、従者の一人に門を叩かせたが、返事はなかった。他に方法がなかったので、声のいい護衛の男に歌を吟詠させた。 「暁の最初の光の中で 霧に迷ってしまったとはいえ 愛する女性の家の門で立ち止まらずに 通り過ぎることはできません」 歌は二度詠まれ、二度目にその家の婦人は、身分は低いけどどこか上品な召使いを使いに出すことにした。 「もし本当に この霜に覆われた生け垣のそばで 立ち止まらずに先に進むのが残念に思われるなら 葉の茂った戸は 何の障害にもならないでしょう」 女はこう言って家に戻り、その後誰も姿を見せなかった。去りがたい思いだったが、空が徐々に明るくなっていく今、とどまっているのも恥ずかしいと思い、自宅に帰った。</p>
<p>83 光源氏は紫の上のかわいらしい面影が恋しくて文を書き絵をおくる</p>	<p>御殿に戻って長い間横になり、幼女のとても愛らしい話し方や仕草を思い起こしながら、一人満足して微笑んでいた。屋ごろに起き出して手紙を書きはじめたが、適切な言葉が見つからず、何度も筆を取ったり置いたりを繰り返した後、とうとう手紙の代わりにきれいな絵を送ってやろうと決めた。</p>	<p>少女のことを思い出しながら床へついた。起きたときはすでに日が高く昇っていて、彼女に手紙を書き始めたが、いつもと同じ文句を使う状況ではなかったので、考えるために何度も筆を止めた。手紙と一緒に趣味のいい絵も数枚送った。</p>
<p>84 父兵部卿宮は少納言の乳母に、紫の上を引き取ることをうち明ける</p>	<p>その日、兵部卿の皇子は固く約束をしていた亡き尼僧宅への訪問を果たした。邸宅は何年も前の記憶にあるよりもさらにうらぶれ、広々として、古びたように見えた。このような朽ち果てた部屋に少人数で暮らしている人々はどんなに寂しいことだろう。周囲を見回しながら乳母に言った。 「女の子はこのような場所には一日として居るべきではありません。すぐに連れて行かなければ。私の家に場所は十分にあります」 そして少納言に向かって、 「貴女は侍女として家に住んでもらいます。一緒に遊べる子供もたくさんいるから、娘は楽しく過ごせるでしょう」</p>	<p>ちょうど同じ日、父親の皇子殿下が娘を訪ねた。数年前よりさらに傷みがひどくなった古くて広い屋敷は、ほとんど人氣がなく、いっそ哀愁が漂って見えた。 「たとえ短い期間であれ、いったいどうやって小さな女の子がこのような場所に住むことができるのだろうか？ 私の家に連れて帰ろう。十分な広さはあるだろう。乳母も自分の部屋があって娘の世話をしてくれるだろう。あちらには若い娘たちもいるから、一緒に遊ぶこともできるだろう」</p>

<p>85 紫の上の着物がしおれているのを目にした兵部卿宮は、娘を憐れむ</p>	<p>皇子は少女を呼んだが、源氏が腕に抱いていたときに着物に染みこんだ豊かな香がまだ残っているのを感じ、 「何といい香りのする着物なのだろう」と言った。 「だが少し暗くはないだろうか？」 そう言うからすぐに娘がまだ喪に服していることを思い出し、何となく気まずい思いがした。そして話を続けた。 「私はこの子の祖母に、わが家の習慣を少しでも身につけるためにこの子は私に会いに来るべきだと何度も言いました。というのも、心も体も衰弱しきった人と何年も一緒に生活させるのはおかしな養育方法ですから。しかし、あの方は何らかの理由で、私にたいへん敵意を抱いていました。また、もう一方の側にも反感があって、このような状況でも完全に克服することはできないのではないかと心配していたのです……」 少納言は言った。 「もしそうなら、ここは物寂しい場所ではありますが、お嬢様がお一人で何もかもできるようになるまで、ここから連れて行かれるべきではないと思います」</p>	<p>姫君を自分のそばに呼んだ。着物にはまだほのかな香りが漂っていた。 「よい香りだが、着物はすり切れている」と哀れに思った。 「この数年間、病気のご老人のそばにいたのではなく、私の家に来て私たちと親しくなるようにと願っていましたが、いつもなぜかいやがっていましたし、私の家族の方でも迎えるのをためらっていたようでした。そのために結局このような状況で移らざるを得なくなったのを実に残念に思います」 と言った。 「それならなぜお連れになるのです？ この家はわびしいといっても、もう少しお嬢様をここにお残しになってください。もっと後で、より分別のつくお年頃になったときに、お宅にお迎えなさる方がいいでしょう」</p>
<p>86 少納言の乳母の言葉と紫の上の様子に兵部卿宮はもらい泣きをする</p>	<p>何日も幼女はひどく打ちひしがれていて、食べ物に手をつけなかったので、とても憔悴してしまっていたが、そのために可憐さが損なわれはしなかった。 父は彼女を優しく見つめて言った。 「これからはもう泣いてはいけません。人が亡くなったらどうすることもできないのだから、勇気を出して耐えなくてははいけません。しかしこれからは万事よくなるでしょう。私がここにいますのだから」 だが夜も更けてきて、彼はそれ以上長く留まることができなかった。出発しようとして振り向いたとき、女の子が父親の世話になるとしてもまったく心が晴れず、再び悲しげに泣きはじめているのを見た。皇子も少しもらい泣きをし、一生懸命力づけようとして言った。 「そんなに心配しないで。今日か明日に迎える者をよこすから、私のところへ行って暮らしましょう」 そして、この言葉を残して去った。だが女の子はあいかわらず泣き続け、慰めるのは無理だった。</p>	<p>乳母は言った。 「昼も夜も亡くなった奥方様のことを悲しむばかりで、ほとんど何もお食べになりません」 確かに痩せて見えたが、それがかえって繊細な美しさを引き立てているようだった。 「なぜそんなに悲しんでいるのですか？ 逝ってしまった人を嘆いても仕方のないことです。それにもう父親がいるのですから……」 殿下はこう言い足し、日も暮れかけたので出発しようとしたが、少女が悲しんで泣き続けるので、自分も心を動かされた。 「そんなに思い詰めてはいけません。間もなく迎えに来ますから」と何度も繰り返して娘を慰め、立ち去っていった。 殿下が行ってしまった後も、少女は泣き続け、慰める術がなかった。</p>
<p>87 紫の上は幼いながらも、自分の身の上と今後の事を思って涙を流す</p>	<p>まだ自分の将来のことなど頭をかすめたこともなかったので、そのことを心配していたわけではなく、ただ、長年片時も離れたことがなかった相手を失ったからだった。子供だったのに、遊ぶことをさえやめてしまったほど深く苦しみ、日中はそれほどしょげていることもあったが、夜になるととても悲しんだので、少納言はいつまでこの状態が続くのかと考えはじめ、彼女を慰めることができないのに絶望して泣き出してしまった。</p>	<p>自分の将来がどうなるかは考えなかったが、この数年間片時も離れることなく自分の世話をしてくれた人が逝ってしまったと思うと物悲しくなり、まだ年若いのに、以前のように遊びに夢中になることもできなくなった。日中はそれでも少しは心が安らいだが、夜になると悲しみに襲われ、乳母はどう慰めたらいいかわからず、この先どうしてこのような生活を続けていくことができるだろうと考えると、自分も泣いてしまうのだった。</p>
<p>88 光源氏は宮中へ行く自分の代わりに、惟光を紫の上の屋敷に遣わす</p>	<p>間もなく、惟光が伝言を携えてやってきた。源氏は自分が行こうと思っていたが、突然宮中からお呼びがかかったため、来られなくなった。幼女の辛そうな様子をとても心配していて、近況を知りたがっていた。伝言を伝えると、惟光はその夜この家の護衛をするために源氏が送った従者たちを家に入れた。 少納言が言った。 「本当に突飛なお心遣いです。ご家来たちがここに寝泊まりするのは、あの方には何でもないと考えるのですが、もしお父様の知るところとなったら、まだ小さいお嬢様を結婚している殿方の好きにさせたとして叱責されるのは私たち召使いなのです。勝手に始めさせたのは貴女たちだと世間は噂するでしょう」そして、他の召使いたちに向かって言った。 「貴女方、この番兵たちについて、お嬢様がお父上に一言でも漏らすことがないようによく注意していなさい」 とはいっても、女の子にはそれが禁じられていることなど理解できなかった。</p>	<p>乳母は惟光に、そのころの悲しい出来事について語った。 「あと何年か経てば、運命に従わずにはいられないときもあるでしょう。しかしながら現在は、どうてい無理な事柄だと私は確信しておりますが、どういってお心で源氏の君が常軌を逸したことを仰ったりなさったりするのか理解できません。今日お父上の皇子様もいらっしゃって、私たちにお嬢様を見守り、軽率にふるまわないようにと仰ったので、より一層源氏の君の色めいたお振る舞いに仰天させられるのでございます」 と嘆いたが、惟光が何かを疑うかもしれないと恐れ、それ以上何も言わなかった。男の方でも、何が起っているのかよく理解できなかった。</p>

<p>89 少納言の乳母は、屋敷を訪問した惟光へ自分の考えと不安を訴える</p>	<p>少納言は惟光に向かってさんざん愚痴をこぼした後、こう続けた。 「しかるべき時が来れば、お嬢様はあの方の妻になると信じています。お二人の運命はそのように定められているように思えるからです。ですが、まだしばらくの間、このようなことについてはお話できません。そのことは源氏の君も私どもと同じようにおわかりになっていて、私にはっきりと仰いました。では一体全体、何をしようとしておられるのでしょうか。私の命に誓ってまったく理解できません。ちょうど今日兵部卿の皇子がここにいらっしゃったとき、お嬢様をしっかりと見張って無分別なことをさせないように、と命じられました。実を申しますと、貴方のご主人様の自由なお振る舞いを、あのときは取るに足らないことだと思って許してしまったことを思い出し、皇子がこのように話されるのを聞いてかなり煩わしく感じたのです」 彼女はまだ話し終えていなかったが、惟光が自分の言葉を実際より悪く解釈しているのではないかと心配になり、悲しみのあまり頭を垂れ、再び黙り込んでしまった。それはそんなに間違っではないなかった。惟光はいったいどのような無礼を源氏が犯したのか考えていたからだ。</p>	<p>乳母は惟光に、そのころの悲しい出来事について語った。 「あと何年か経てば、運命に従わずにはいられないときもあるでしょう。しかしながら現在は、とうてい無理な事柄だと私は確信しておりますが、どういってお心で源氏の君が常軌を逸したことを仰ったりなさったりするのか理解できません。今日お父上の皇子様もいらっしゃって、私たちにお嬢様を見守り、軽率にふるまわないようにと仰ったので、より一層源氏の君の色めいたお振る舞いに仰天させられるのでございます」 と嘆いたが、惟光が何かを疑うかもしれないと恐れ、それ以上何も言わなかった。男の方でも、何が起っているのかよく理解できなかった。</p>
<p>90 光源氏は惟光から父兵部卿宮が紫の上を引き取る予定であると聞く</p>	<p>惟光の話を受けて、源氏は幼女に対する哀れみがあふれるのを感じ、すぐに彼女のところへ行きたいと思った。だが、事情を知らない人たちがこの度重なる訪問を誤解し、女の子が実際より年上だと推測して、彼女が馬鹿げた中傷を受けるがまになることを恐れた。自分の御殿に連れてきて住ませる方がずっと簡単だろうと思われた。その日は一日中多くの手紙を送り、日が暮れるころ、源氏がまた急用で足止めされていて許しを請うている、という知らせを携えて惟光は幼女の家に戻った。少納言は女の子の父親が翌日に娘を迎えよこすと突然決断したので、訪問を受けるにはあまりにも多忙を極めている、と素っ気なく告げた。「召使いたちは長いこと住んでいたこの崩れそうな古い家を離れ、見知らぬ壮大な場所に引越すことを思い、喜びに浮かれておまして……」 それ以上の質問には大急ぎで答え、縫い物の仕事に夢中になっているようだったので、惟光は立ち去った。</p>	<p>戻って聞いた話を伝えると、若君は心を動かされたが、もしこのことが外に漏れたら不謹慎で軽率だと思われる、ということを考えてせず会いに行くのはよくないと考えた。いや、少女は彼のところに来て暮らさなければならなかった。まる一日を費やして、彼は手紙を何通か書き、夕刻になるといつもの惟光に、自分自身は行くことができないが許してほしい、と伝えるよう言いつけた。乳母は口数が少なかった。 「お父上の皇子殿下から突然、明日お嬢様を連れて行く、というお知らせがあり、私どもは準備に追われております。このような枯れ草の生い茂る屋敷でも、長年住み慣れた家を離れるのは辛いところで、皆が動揺しております」 と、ほとんど彼の相手をすることもなく言った。縫い物の仕事でとても忙しそうだったので、惟光は退去した。</p>
<p>91 左大臣邸に来ている光源氏は惟光に紫の上を連れ出すことを命じる</p>	<p>源氏は大臣の家にいたが、いつもと同じく葵から一言も引き出すことはできなかった。最悪の気分で琴瑟を弾きながら歌っていた。 「この雨の夜になぜ早足で田畑や丘を駆けていくのですか？」 歌詞は葵に向けられていて、彼は深い感情を込めてそれを歌った。ちょうどその時、惟光が大臣の家に到着した。源氏はすぐに彼を呼び、すべてを話すよう命じた。惟光の報告は彼の不安を誘った。いったん女の子が父親の家に行ってしまったら、たとえ彼女についていく覚悟があったとしても、源氏が彼女を連れ去るのはとても奇妙なことに思われるだろう。子供の誘拐犯か盗賊のように少女を連れて逃げたという噂が広まるのは避けられないだろう。それならば競争相手の先手を取った方がずっといい。側仕えの女たちには黙っていると約束させ、すぐに女の子を自分の屋敷に連れてくるのだ。惟光に言った。 「夜明けに彼女のところへ行こう。私がここまで乗ってきた車をそのままいいから出させるように。そして、召使いの者を一人か二人私に同行する準備をさせておくように」 惟光はお辞儀をして退出した。</p>	<p>若君は第一夫人の父、左大臣邸に来ていたが、いつものように妻はなかなか出迎えに来なかった。がっかりして、和琴を爪弾きながら、俗謡「常陸では私は田で働いている」を低い声で口ずさんでいた。惟光が到着すると、すぐ自分のところへ来させ、何が起きたか聞き出した。惟光がもたらした知らせは彼をいらだたせた。いったん父親の家に連れて行かれてしまった後で少女を迎えに行ったら、間違いなく放蕩者か子供泥棒と見なされただろう。黙っているように女たちを説得して、すぐに行動する必要があった。 「明日あの家に行こう。車をいつでも出せるように手配して、護衛の男を一人か二人呼べ。」 と言うと、惟光はうなずいて引き下がった。</p>
<p>92 思案のあげく、光源氏は滞在中の左大臣邸から夜明け前に出かける</p>	<p>源氏は、どのような方策を取っても、もしそのことが世間に知られるだけで、醜聞になるのは確実だとわかっていて。口さがない人たちは、女の子はまだ小さいとはいえ、なぜ源氏の君が自分の屋敷に住むように誘ったのかはよくわかる年齢だ、と言いつつに違いなかった。人は自分の好きなことを考えるものだ。だが問題はそのことではなかった。もっとひどいことが起こる可能性があった。兵部卿は娘の居場所を見つけたらどうするだろうか？ 他人の子供を誘拐することはきわめて無礼で破廉恥に映るだろう。源氏はひどく当惑したが、この機会を逃したら心の底から後悔することがわかっていて。そこで、夜明けのかなり前から出発の準備を始めた。葵はいつものように冷たくつつけんだった。 「ちょうど今、家で大事な用事があるのを思い出しました。少し見てこなければいけません。長くはかかりません」 と言ってこっそり出て行ったので、使用人たちはまったく気づかなかった。部屋から外套を持ってこさせ、馬で後に続く惟光だけをお伴に出発した。</p>	<p>彼はどうすべきか考えた。もしこのことが世間に知れ渡ったら、彼は手に負えない放蕩者と思われられるだろう。せめて少女がもう少し大きければ、人々は相手も同意の上と思うかもしれないし、結局のところよくある話なのだが、もし二条に少女を連れて行った後で、父親が探しに来たら、実にみっともなく面倒な状況になるだろう、と思ったが、この機会を逃すのは不本意だったので、まだ夜が深いうちに出発の準備をした。若い妻はいつものように冷たくそっけないそぶりだった。 「大事な用事を思い出したので、急いで二条に帰らなければなりません。すぐに戻ります」 出かける前に静かに妻にこう言ったので、家の女達は誰も気づかなかった。自分の部屋で普段着をまとい、同行したのは馬に乗った惟光一人だった。</p>

<p>93 少納言の乳母が応対に出るものの光源氏は制止も聞かずに奥へ入る</p>	<p>何度も門を叩き、ようやく開けさせることができたが、開けたのは秘密について何も知らない従僕だった。惟光は彼に源氏の車をできるだけ静かに中へ入れるよう命じた。それから正門へ回り、少納言に誰が来ているかわかるよう、咳払いをしながら門を揺らしはじめた。</p> <p>「ご主人様がお待ちです」</p> <p>彼女が戸口に現れるとこう言った。</p> <p>少納言は言った。</p> <p>「ですがお嬢様はまだお休みになったばかりです。殿下が夜のこのような時間に出歩いていらっしゃるのでは納得できません」</p> <p>彼が夜の逢い引きから帰る途中で、ちょっと寄ってただけだろうと憶測していたのだ。</p> <p>源氏は前に進み出て言った。</p> <p>「聞こえました。お嬢様はお父上の家に連れて行かれるところなのでしょう。その前に彼女にとても大事なことを言っておかなければなりません」</p> <p>「貴方がお嬢様と議論なさりたいどんな話題でも、お嬢様はご熱心にお聞きになることでしょうか。10歳の女の子となさるのは、間違いなく重要な議論でございましょう！」</p> <p>と少納言は皮肉った。源氏は女性たちの部屋に入った。</p> <p>恐怖を感じて少納言は叫んだ。</p> <p>「そこへはお入りになれません！年寄りの女官たちが裸で寝ております……」</p> <p>「皆よく寝ています。見なさい、起きてるのは女の子だけです」と源氏は言い、彼女の上に身をかがめた。</p> <p>「朝の霧はだんだん晴れてきています。さあ起きる時間ですよ！」</p> <p>と大声を上げた。</p>	<p>到着して門扉を叩かされると、何の疑いもなく誰かが開けた。車を静かに中に入れさせ、惟光が咳払いをして自分の存在を示しながら角の扉を叩くと、乳母が出てきた。</p> <p>「源氏の君がお着きです」</p> <p>男は言った。</p> <p>「お嬢様は寝ていらっしゃる。なぜこんなに夜遅く来られたのですか？」</p> <p>乳母は、若君が他の逢瀬から帰る途中に寄ったと思って尋ねた。</p> <p>「お父上の家に連れて行かれると聞いたものですから、ご出発前にお話したいと思ったのです」</p> <p>彼が言うと、乳母は微笑んで答えた。</p> <p>「いったい何のことでございましょう？ すぐにご返事申し上げると、どうしてお思いになれるのですか？」</p> <p>彼が前に進むと、乳母は警戒して異議を唱えた。</p> <p>「気をおつけください。身なりに構わないで休んでいる年寄りの女官たちがおりますから」</p> <p>「まだ起きていらっしゃるののですか？ では私がお呼びしに行きましょう。こんな霧に包まれた暁に気づかず、どうして眠っていられるのでしょうか？」</p> <p>と言い、乳母が止める間もなく、どんどん中に進んでいった。</p>
<p>94 光源氏は父宮の使いであると嘘をついて、寝ている紫の上を起こす</p>	<p>そして少納言が口を開けるより早く、幼女を腕に抱きかかえて優しく揺らした。まだ夢の中にまどろんでいる幼女は、父の皇子が迎えに来たのだと思った。源氏は彼女の髪の毛を整えながら言った。</p> <p>「いらっしゃい。お父様からお屋敷にお連れするように頼まれて来たのです」</p> <p>父親でないのがわかって、彼女は一瞬ひどく驚き、怖がって身を引いた。</p> <p>源氏は大声で言った。</p> <p>「私であってもお父様であっても心配することはありませんよ。何も変わらないのですから」</p> <p>こう言いながら、彼女を腕に抱きかかえて内の間から外へ運び出した。</p> <p>惟光と少納言は啞然として叫んだ。</p> <p>「これはまた！ いったい何をしておつもりなのか？」</p>	<p>少女はぐっすり眠っていて、彼が腕で抱え上げると目を開けたが、まだうとうとしていて、一瞬父が迎えに来たのかと思った。少女の髪をなでながら</p> <p>「いらっしゃい。お父上から頼まれて来たのです」</p> <p>と言い、出口へ向かったが、少女が 父の殿下でないことがわかって驚いた様子だったので、「そんなにおびえてはいけません。全然違いはないのですから」</p> <p>と言い添えて出て行くと、惟光と乳母は愕然として、いったい何が起きているのかと問い合った。</p>
<p>95 二条院へ誰か来るようにと指示して、光源氏は紫の上を連れて行く</p>	<p>源氏が言った。</p> <p>「私の記憶に間違いがなければ、私がここでは会いたいときにいつもあの子に会えるわけではないから、もっとふさわしい場所に彼女を住まわせようと言ったとき、貴女は不安がっていましたね。今度はさらに会いにくくなる場所へあの子を送ろうとしています。ですから……誰か私と一緒に来る準備をなさい」</p> <p>少納言は彼が女の子を連れて行きたいのだとようやく気づき、あわてふためいて言った。</p> <p>「ああ旦那様、最悪の時をお選びになりました。今日お父上様がお迎えにいらっしゃるのですが、私は何と申したらいいのでしょうか？ 貴方がもう少し我慢してください、最後はすべてうまく収まるだろうと思うのです。しかし、このような無鉄砲なご決断では、貴方ご自身のためになりませんし、この家の哀れな使用人たちを苦境に陥れてしまいます」</p> <p>源氏は大声で言った。</p> <p>「もしそういうことなら、来たい者は来たい時にくればよい」そして、少納言の深い失望をよそに車を前進させた。幼女は奥で訳がわからず泣いていた。源氏の考えを変えさせる術はなかったのだ。乳母は前夜縫い上げた女の子の衣類を集め、自分が一番いい着物を着て車に乗った。</p>	<p>「彼女に会いにここまで来るのは難しかったので、もっと落ち着いた場所へお連れしようと思し上げていましたが、今日出発するところということでは、いっそうややこしくなっています。あなた方の誰か一人一緒に来てくださいませんか」</p> <p>乳母は仰天しようだった。</p> <p>「今日は本当に都合が最悪です。殿下がいらっしゃったら何と申せばいいのでしょうか？ 今起きているのが避けられないことだったなら、遅かれ早かれどっちみちそのときが来たでしょうが、それ相応な準備もせずこのように振る舞われては、私たちは終わりのない窮地に立たされてしまいます」</p> <p>「わかりました。ではあなた方は後で来ればいいでしょう」</p> <p>車を近くに寄せながら、彼は言った。女たちは青ざめ、どうしていいかわからなかった。少女は泣いていて、乳母は、彼を止める術がないのを見て、急いで前日の晩に準備した着物をかき集め、自分もそれなりに身を整えてから車に乗った。</p>

<p>96 少納言の乳母は困惑するものの紫の上のことを思って涙をこらえる</p>	<p>源氏の家はそれほど遠くなく、日が昇るまでに到着した。車は西翼の前で止まった。源氏は降りて女の子を慎重に腕に抱き、地面に下ろした。少納言はこの奇妙な出来事がすべて夢のように見え、邸宅に入ろうかどうか決めかね、躊躇していた。源氏が彼女に言った。「もし来たくないのなら無理強いはいしません。今女の子はここにいれば安全なので他のことは望みません。帰りたいならそう言ってください。私がお送りしましょう」 彼女はためらいながら車から降りた。すでにこれまで起きたことの不意の驚きだけで、彼女に衝撃を与えるには十分だったが、さらに娘が行方不明になったことを知った兵部卿の皇子がどう思うか、気が気でなかった。彼女自身はどうなるのだろうか？ 女主人が皆何らかの方法で連れ去られてしまうのを見るのが運命のように思われた。あまりに長い間泣き続けたことが怖くなりはじめたので、ようやく涙を拭き、仏に祈りはじめた。</p>	<p>二条の邸宅は遠くなく、夜明け前に到着した。彼は車を西の翼に寄せさせて降りた。そして軽々と少女を腕に抱え上げて車から降ろした。乳母はまだためらっていた。「まるで夢の中の出来事のようなのです。どうすればいいのでしょうか？」 「それは貴女次第です。今、貴女の女主人はここにいます。もし帰りたいのならお供させましょう」 と彼が言い、乳母は苦笑して車から降りた。すべてがこのように突然起こってしまったので、どうすべきか決めることができなかった。お父上の皇子殿下はどう思われるだろうか？ お嬢様はどうなるのだろうか？ 一人残されて、信頼できる人がそばにいらっしゃらなかったのが、まことに悲しいことだった、と思い、涙がこらえることができなかったが、今泣くのは縁起が悪いと考え、何とか抑えることができた。</p>
<p>97 紫の上のために、光源氏は通常は使わない対屋に調度などを整える</p>	<p>西翼は前から誰も住んでいなかったため、室内も完全に整ってはいなかったが、すぐに惟光が必要な場所に屏風と幕を設置させた。源氏のためには、主人用屏風を広げてすばやく仮の住処を整えた。彼は別の翼から寝具を運ばせて寝た。</p>	<p>彼らがいる西の翼は、誰も住んでいなかったため、内側の空間を仕切る幕がなかった。彼は惟光を呼び、屏風や幕を用意して並べるよう命じた。自分のために、屏風の布を下ろさせ、畳だけをいくつか整えさせて、東の翼から寝具を運ばせて就寝した。</p>
<p>98 二条院へ連れてこられた紫の上は、気味が悪くなり体をふるわせる</p>	<p>幼女の寝台は近くにあったが、まだ新しい環境にとっても怯えて落ち着かなかった。唇は震えていたが、叫びはしなかった。「少納言と一緒に寝たい」 とやっとのことで涙ながらに小声で言った。 それを聞いた源氏は彼女に言った。「乳母と一緒に寝るには大きすぎますよ。いい子だからそこでお眠りなさい」 彼女は一人ぼっちだと感じ、しばらくの間起きて泣いていた。乳母はあまりに混乱して眠るどころではなく、一晩中使用人の部屋で座ったまま、彼女の周囲で何が起きているか気づかないほど悲嘆にくれて泣いていた。</p>	<p>少女は何が起きているのかわからず震えていたが、さすがに声を出して泣きはしなかった。「乳母のそばにいたい」 とか弱く幼い声で言った。 「あなたの歳ではもうそんなことはしませんよ」 と教えると、少女はもはや耐えきれなくなり、切なく泣きくずれた。乳母は眠ることができず、自分の思いを少しも伝えられないまま、傍らに座り続けた。</p>
<p>99 少納言の乳母は、輝くばかりの立派な二条院で間の悪い思いをする</p>	<p>空が明るくなりはじめたとき、少し周りを見回した。素晴らしい柱や彫刻が並ぶ屋敷だけでなく、宝石をちりばめた絨毯のように見える中庭の砂までが目もくらむような印象を与え、初めは少し威圧される感じがした。だが、もう女だけの召使いに囲まれているのではないという事実、心地よい安心感を覚えた。所用や仕事でいろいろな人物が家に出入りする時間だった。 一群の男達が窓のすぐ前を通っていき、そのうちの一人がもう一人にこう囁くの彼女を聞いた。「新しい女性がここへ住みに来たようだ。いったいどんな人だろう？ 位の高い御婦人だ。賭けてもいい」</p>	<p>夜が明けてきて周囲を見渡すと、御殿や調度品が豪華であるだけでなく、庭の砂までが宝石のように輝いてるのに気づき、どこか居心地の悪い思いがするほどだったが、幸いなことに、家のその辺りには他の侍女はいないようで、普段はあまり重要でないお客を迎えるために使われていたため、竹の簾の向こうに警備の男が何人かいるだけだった。客人が来たことを知った人々は、「いったいどなただろう？ 他とは違うお方なのは確かだ」などと囁き合った。</p>
<p>100 かわいらしい女童を呼び寄せた光源氏は休んでいた紫の上を起こす</p>	<p>家の別の翼から手洗い用の水、朝食用に炊いたご飯が運ばれてきた。源氏は朝遅くまで起きなかった。「女の子が一人にいるのはよくありませんから、昨夜、貴女の家へ迎えに行く前に、何人かの女の子たちがここへ来て住むように手配しました」と少納言に言い、「東翼へ少女たちを迎えに行きなさい」と下男に命じた。できるだけ年の若い少女たちとわざわざ指定していたので、想像する限り最も小さく可憐な四人の子供たちが現れた。紫は源氏の上着に全身を包まれ、まだ眠っていた。やっとのことで目を覚ますことができた。源氏が彼女に言った。「もう悲しんではいけません。私がしっかりお世話をしてあげます。貴女のことを好きでなかったら、こんなことをするでしょうか？ 女の子は愛想よく、従順な振る舞いができなければいけません」 このようにして、幼女の教育が始まった。</p>	<p>朝食のご飯と手洗いの水が供された。彼が目覚めたとき、日はすでに高かった。「侍女や下仕えなしではいられないでしょうから、夕方になったら適任だと思われる人々を呼びにやりなさい」 と乳母に言い、東の翼から何人かの少女が来るよう指図した。年若い子達を選ぶようにとの要求で、とてもかわいらしい少女が四人やってきた。少女は彼が渡した着物にくるまって眠っていたので、そのときに起こした。「まだ不機嫌な顔を見せていたのですか？ 貴女のことを本当に心配していないのだったら、こんなことはしませんよ。女は素直でないといけません」 と言い、そのときから少女にどのように振る舞うか教え始めた。</p>
<p>101 紫の上の気をひこうと、光源氏は面白い絵などを見せて相手をする</p>	<p>いつでもゆっくりと観察することができるようになり、彼には彼女がそれまで気づいていたよりもっと可愛らしく見え、間もなく2人の間には親しい会話が交わされるようになった。源氏は彼女に見せたいと思っていたきれいな絵や玩具を持って来させ、彼女を喜ばせるために骨を折った。起き上がって周囲を見るよう少しずつ説得した。どんな布地かわからない着古した濃い灰色の着物を着た姿は可憐で、今はそれまでの苦しみはすっかり忘れて笑って遊び、源氏もまたそれを見て満足して笑っていた。</p>	<p>今、近くから眺めてみると、さらに繊細で上品に見えた。彼女と話を始め、持って来させた玩具や絵を見せたり、彼女が喜びそうないろいろなことをしたりした。もう起き上がっていて、目にするものに少しずつ興味を示すようになった。くすんだ色の簡素な喪服を着て座りながら、晴れ晴れと笑っているのがとても美しく、見守る彼も微笑んでしまうのをこらえることができなかった。</p>

<p>102 紫の上は光源氏が留守にしている間に、二条院のあちこちを見回す</p>	<p>ようやく彼が東翼に引き上げたとき、幼女は庭を見るために屋外へ出た。樹木の間や池の畔を散策し、霜で覆われた花壇が絵のようにきらきらと輝いているのを喜んで眺め、見知らぬ人々が色とりどりの着物を着て家に入出入りする様子を見ているうちに、ここは本当に美しい場所だと思いはじめた。それからすべての羽目板や屏風に描かれたうっとりするような場面をじっと見つめ、すっかり心を奪われてしまった。</p>	<p>東の翼に行くため少女から離れたとき、彼女は部屋から出て、周囲の庭の木々や池を覗いた。霜に覆われた低木はまるで絵のようで、それまで見たことがなかった四番目や五番目の位の役人があちこちを忙しそうに行き来していた。本当に面白い場所だと思った。屏風に描かれた絵をじっと見ていると、心が晴れやかになるのにそう時間はかからなかった。</p>
<p>103 留守にする光源氏は紫の上のために手習いの手本などを残していく</p>	<p>2、3日の間、源氏は宮中に参内せず、すべての時間を幼女を喜ばせるために過ごした。しみいには、彼女が収集帳に貼ることができるように、あらゆる種類の挿絵を描きはじめ、描きながらその一枚一枚を彼女に見せていった。彼女には今までに見たこともないほど素晴らしい画集に思えた。それから、彼は武蔵野の歌の一節を書いた。幼女は紫色の染み模様の上に勢いよく書いていく筆さばきに心を奪われてしまった。より細かい文字でこの一行が書かれていた。 「芽の出ている根を見ることはできなくても、その若芽をどれほど愛おしく思うことか。武蔵野で育つ霜に濡れた草よ」</p>	<p>二、三日の間、彼は宮中に参内せず、少女が彼の存在に慣れるように、ずっとそばにいた。習字の手本を書いたり、模範として役立つあらゆる種類の絵を描いたりして、非常に値打ちのある膨大な数の作品を集めた。彼が見事な筆跡で歌を書いた紫色の紙を少女はじっと見つめた。「……武蔵野の名前だけで私を苦しめる……」その横にはさらに小さな字でこう書かれていた。 「まだ根は知らないけれど 近づくことのできない 武蔵野の草と親戚である 紫の植物が私は愛しい」</p>
<p>104 光源氏は紫の上へ手習いを教え、人形などの家を作って一緒に遊ぶ</p>	<p>感心して見入っている幼女に源氏が言った。 「さあ、今度は貴女も何か書かなければいけません」 「でも私はまだあまり上手に書けないの」 とまったく無邪気な可憐さで彼を見ながら答えたので、源氏は笑い出した。 「たとえ上手に書けなくても、貴婦人扱いしようとは夢にも思いませんよ。少し練習しますからいらっしやい」 自信なさそうに彼に目をやりながら、紫は字を書きはじめた。彼女の子供らしい筆遣いにも、源氏は説明しようのない喜びを感じた。 「ああ、失敗しちゃった」 突然幼女は大声を出し、真っ赤になって書いたものを隠した。だが彼はそれを無理矢理見せさせ、歌を見つけた。 「どうして貴方の頭に武蔵が思い浮かんだのか、私にはまったくわかりません。私の親戚とはどの植物のことを言ってるのですか？」 まだとても未熟で、大きくて幼いが、将来がとても楽しみな書体で書かれていた。尼僧の筆跡ととてもよく似ているのが感じとられた。何か新しい文字帳を使えば、幼女は間もなく流麗に書くことができるだろうと源氏は確信した。 人形の家を一緒に作った後、源氏が自分を苛んでいた苦悩を一時忘れてしまうほど、遊びはとても長く続いた。</p>	<p>「あなたも何かお書きなさい」 少女を促した。 「でもまだ上手に書けないの」 と答えて彼を見上げたが、その無邪気な美しさに彼は思わず微笑んだ。 「構いませんよ。何も書かないよりましです。私が教えてあげましょう」 と言った。少女が横に座って書いているとき、子供っぽい文字の描き方や筆の持ち方がとてもかわいらしく、彼は思いがけず驚いてしまった。 「書き損なった」 と恥ずかしそうに紙を隠そうとしたが、無理に彼はそれを手に取った。 「何のことを指しているのかわかりませんが 紫の植物の親戚というのは いったいどの草なのでしょうか」 文字は幼いけれどしっかりしていて、確実に上達する見込みがあった。亡くなった尼僧の筆跡と似ていた。 「これから今風の文を手本にすれば、間違いなくたいへん上手になるだろう」 と思った。人形の家を一緒に作ったり並べたりして遊びながら、自分の苦しみを忘れさせてくれる貴重な安らぎを見いだした。</p>
<p>105 事情を知らぬ兵部卿官は紫の上の失踪を嘆き、少納言の乳母を疑う</p>	<p>紫の家に残された召使いたちは、兵部卿の皇子が娘を迎えに来たときとても当惑した。彼らが少なくともしばらくの間は起きたことについて一切話さないと約束することを源氏は望んでいて、少納言もそれがいいと考えていたようだった。だから、少納言がどことも言わず娘を連れ去ったこと以外、皇子は何も聞き出すことができなかった。皇子はすっかりうろたえてしまった。おそらく、父親の屋敷で女の子は楽しい生活ができないだろうという考えを、祖母が乳母に教え込んだのだろう。それなら、幼女があの家で相応な扱いを受けられないという不安をはっきり口にするより、彼女を連れてできるだけ早く逃げてしまう方が賢明だ、と乳母が経験豊かな巧妙さで考えたのかもしれない。召使いたちに何か知らせが来たら直ちに知らせるように頼み、彼女たちを再び当惑させてから、とてもがっかりして自宅に戻った。彼は山奥の寺の僧侶のところも調べたが、何も知ることはできなかった。女の子はとても愛らしく魅力的に見えていたので、このようにして会えなくなるのは本当に残念だった。</p>	<p>元の家に残された侍女たちは、父の皇子が到着したとき、何と断言していいかわからず当惑していた。若君は侍女たちにしばらくの間秘密を守るよう命じ、乳母も同じ考えで、何も言わないよう頼んでいた。それで、乳母がお嬢様を連れて行ってどこかに隠してしまい、どこにいたのかかわからない、と言うだけで、父の皇子もどうしようもないと悟った。尼僧は少女が彼のところへ行って暮らすことに乗り気でない様子だったので、乳母は熱心なあまり、彼に少女は任せられないと言う代わりに、自発的に行動して少女を連れ出し、姿を隠してしまっただろう、と涙ながらにつぶやき、出発の支度をした。 「もし消息がわかったら知らせてください」 と頼んだが、この言葉も女たちの間では困惑を生むばかりだった。山奥に住む僧院長にも問い合わせたか、他の情報を得ることができず、今となってはかけがえのないと思える娘を失ったことを嘆き続けた</p>
<p>106 継母の北の方は、紫の上を意のままにできなくなったのを残念がる</p>	<p>妻である皇女は、ずいぶん前から幼女の母親に対する敵意は克服していたので、女の子への自分の役目を果たすことができるという目論見が外れて憤慨した。</p>	<p>彼の第一夫人も、ちょうどそのとき、少女の母親に対する憎しみは和らぎ、自分の思い通りに養育してやろうと目論んでいたの、当てが外れたことを大きな不運だと感じた。</p>

<p>107 紫の上は尼君を慕って泣く時があるものの、光源氏にもなれ親しむ</p>	<p>紫の召使いたちは三々五々新しい家に引っ越してきた。彼女と遊ぶために連れてこられた少女たちは、新しい遊び相手に夢中になった。皆で一緒に幸せに満足して楽しむのにそれほど時間はかからなかった。</p> <p>彼女の皇子様が外出したり忙しくして寂しい夜には、祖母である尼僧を思い出して涙することもあった。だが、ごく稀な場合を除いて会う習慣がなかった父親を思うことは皆無だった。今では本当に「新しいお父様」がいて、その人のことが日に日に好きになっていった。</p>	<p>侍女や下働きの者たちは少しずつ二条へ移っていった。幼い遊び相手たちは、若君とそのお気に入りの洗練されて輝かしい様子に安心し、遠慮なく少女と遊んだ。時折、彼がいない寂しい夜には、尼僧を懐かしく感じて泣いたが、皇子のことはもうほとんど思い出さなかった。幼いときから父と離れているのが普通だったから、ほどなく新しい父親のような人に愛着を感じるようになった。</p>
<p>108 光源氏は、かわいらしい紫の上を「風変わりな秘蔵っ子」だと思う</p>	<p>源氏がどこへ行こうと、帰ったときに誰よりも先に走って迎えるのは彼女で、素敵な遊びや会話に花を咲かせた。そしてその間ずっと、少しの遠慮や用心もなく彼の膝の上に座っていた。これ以上魅力的な相手は想像もできなかっただろう。おそらく成長するにつれていつまでもこれほど開放的ではないだろうし、彼女の性格の新たな面が現れてくる可能性もあった。たとえば、もし彼が他の女性に関心があると疑えば、腹を立てるだろうし、そのような場合、まったく予想外のことも起こり得る。だが今のところ、彼女は喜ばしい気晴らしだった。もし本当の娘だったら、このようにまったく親密な生活を長い間続けることは道徳的に許されなかっただろう。だが源氏は、彼らのような場合、ある種の配慮は的外れだと感じていた。</p>	<p>彼が家に着くと、すぐに会いに行き、おだやかにおしゃべりをして、ためらったり怖がったりすることなく腕に抱かれ、その振る舞いは本当に魅力的だった。</p> <p>一般的に、嫉妬やうぬぼれが関係を難しくしたときには、不愉快な反動を避けるために距離を置くことになるもので、さらに、相手も恨みを持っていたら、修復しようのない結果が生まれるのは当然である。だが、この少女は彼にとって完璧で欠点のない相手だった。もし本当の娘だったら、彼女ほどの年齢に達すると、彼の横で寝起きをするような親しい振る舞いもできなかっただろうが、おそらく彼は、彼女は他とはまったく違った寵愛すべき女の子で、特別な世話をして保護しなければならぬと考えていたのだろう。</p>

●イタリア語訳『源氏物語』「若紫」データ2

小見出し	イタリア語訳 (モッティ訳)	イタリア語訳 (オルシ訳)
1 癩病をわずらった光源氏はすすめにより北山の聖のもとへ出かける	源氏の君が癩病にかかった。様々な魔術やまじないを試しても相変わらず発作が起り続けたので、ある人が、北山に住んでいる聖人がいて、その人が先年の夏に（そのときに癩病がひどく流行っていて、いつもの魔術は全く効果がなかった）奇跡的にたくさんの人を治したという。「迷っている間に病気が悪化するから、一刻も早く相談してみてください」と勧めた。彼はすぐに聖人を呼ばせたが、その人が年老いて旅行できる状態ではないと答えた。「どうすればいいのだろうか。内密に彼を訪ねる他ない」と源氏の君が言い、そして信頼できる4、5人だけをつれて、まだ夜が明けないうちに出発した。行き先は山奥のところにあった。	癩病みにかかって、いろいろと呪術や祈りをしてきたにも関わらず、効果がなくて、何度も発作がお起こり続けたので、ある人が、『北山にある寺というところに、優れた行者が住んでいます。去年の夏も病気が流行していたときに、他の人は何もできなかった重症でも次々と治しました。これ以上病気が悪化すると厄介なので、早く彼を呼んだほうがいいです』と言ったので、その行者のところにお使いの人を行かせたが、もうかなりの高齢者だったので、部屋から出ることすらないという返事が返ってきた。源氏の君が自ら内密に行者のところを訪ねるしかあるまいと思ひ、信頼できる四、五人ほど連れて、夜が明ける前に出かけた。寺院は山奥にあった。
2 聖は、峰が高い山に囲まれた奥深いところに籠り、修行をしている	三月の最後の日だったが、都の花がすでに散っていた。山の桜はまだ見えてこなかったが、田舎の土地に入っていくにつれて、霧がいつもと違う魅力的な形になり、社会のしきたりによって束縛されて自由に動くことができない源氏の君にとっては珍しい光景だった。数々の寺院も素晴らしかった。聖人は高い岩の壁に掘られた深い洞窟に住んでいた。	三月が終わろうとしていた頃で、京都の花盛りはみんな過ぎ去ってしまっていた。山の桜はまだ咲いており、山奥に入っていくにつれて、霞のかかった景色も美しく、自由に動ける身分ではなかったの、このような旅の経験がなく、彼の目にはすべてが新鮮に映っていた。寺院も実に美しかった。行者は高い山や深い岩にある静かな所に住んでいた。
3 光源氏は自分を誰とも知らせず、驚き騒ぐ聖から加持祈祷を受ける	源氏の君は名乗らなかつたし、扮装していたが、彼の顔はあまりのも有名だったので、聖人がすぐにわかった。「すみません、この前私を呼ばれたのはあなたでしょうか。残念ながら今は現世のことなどわからず、修験の行法もすっかり忘れてしています。わざわざこちらまでに来ていただくなんて申し訳ないです」と困ったような表情を見せながら、源氏の君の顔を見て微笑んだ。しかし、聖人が豊富な知識や深い信心の持ち主であることがすぐに明らかになった。まじないの言葉を書き、治療を施し、そして魔術の力のこもった文章を読み上げた。治療が終わったときに日が高くなっていたが、	登った際に、誰にも名前を明かさずに、とても粗末な身なりをしていたが、それにもかかわらず彼の正体が簡単に見破られ、「恐れ入ります。先日、私について訪ねた方でしょうか」と行者が大層に驚き、そしてにっこりしながら「今は、現世のことを考えおらず、修験の方法も忘れてるのに、どうして、このようにわざわざお越しいたいたのでしょうか」という言葉を付け加えた。立派な行者だった。必要な薬を作って、飲ませ、加持などしているうちに、日が高くなった。
4 光源氏は高い所から見た目がきちんとしたきれいな僧坊を見つめる	そのあと源氏の君が洞窟から出て、周りを見回した。その高い位置から、僧侶が住んでいる所がいくつも見えた。曲がりくねった道がある家屋まで続いていて、それが他の家と同じように低い木に囲まれていたが、より広々としていて、そこで木が整然とした美しいアーケードを作り出し、周りの木もケアが行き届いている感じだった。源氏の君はそれが誰の家なのかを訪ね、某僧都が二年ほど前からそこに籠っていたと一緒に来ていた人の誰かが言った。その人の名前を聞いた源氏の君が、「よく知っている人だ」と言って、「こんな格好で、付き人もこんなに少ない状態で会いたくない。こちらに来てることがわからないといいのだが」。	光源氏が少し外に出て周りを見渡し、高い所なので、あちこちに、僧坊が住んでいる家が見えた。くねくねした道の端に、同じような小柴垣であるが、他の家に比べるとよりきちんと造られていて、こざっぱりとした部屋や廊下に、木立がとても風情あるところがあった。「誰が住んでいるのか」と源氏の君が聞くと、一緒に付いていた人が「これが、某僧都が、二年間ほど籠もっているところです」「立派な人が住んでいるんだな。あまりにも粗末な身なりなので、気づかれないようにしないといけない」
5 なにがし僧都の僧坊で、光源氏は若い女性と子どもたちの姿を見る	ちょうどそのときに、何人かの上品な男の子が家から出てきて、仏壇に飾るような花を摘みはじめた。「女の子もいるのだ」と源氏の君の付き人の一人が言い、「僧都が家に女を匿っているのがありえないのだ。誰だろうか」と感心を持って降りていって、覗いてみた。「確かにそうだ。きれいな娘たちや、若い女房、子供などが見えるのだ」と元の場所に戻りながら言った。	女の子が大勢出て来て、仏陀に捧げる花を摘んだり、水を汲んだりしているのが見えた。『あそこに、女がいるぞ』『僧都は、まさか、女を囲っているわけがない』『どのような女だろう』と源氏の君に付いていた者たちが口々に言って驚いていた。何人かが少し近づき状況を確認し、『女の子たちや、若い女房、童女が見える』と言う。
6 供人たちは病を気にする光源氏を、気分転換のために外へ連れ出す	源氏の君は朝いっぱい治療を受けた。まじないが終わってから、いつも熱が襲ってくる時間を恐れ、一緒に来ていた人達が気を紛らわせるために、都が見える山の一番高いところに源氏の君を連れていった。「なんて美しいでしょう」。	源氏の君は勤行が済んだが、日盛りになるにつれてまた熱が出るのではないかと心配していた、一緒にいた人たちは「ずっと心配をしないで、気を紛らわせたほうがいいです」という。後方の山に立ち出て、彼の足もとの下に広がる町の風景を眺めた。

<p>7 光源氏は後ろの山から、遠くまでずっと霞がかかった景色を眺める</p>	<p>霧で霞んでみえる輪郭とどこへでも続く輝かしい森。そのような所に住んでいる人は一分たりとも不幸を感じられないであろう」と源氏の君が感動した。 「これはたいしたことではありません。他の県にある湖や山をご覧になったら、この景色よりどれだけ綺麗かがわかるはずですよ」と付き人の一人が言い、そして富士山や他の有名な山とか、西の国の浦や海辺などの話をし、それを聞いていた源氏の君が発作の時間が近づいている事をすっかり忘れてしまった。</p>	<p>遠くまで細かい霧がかかっている、四方の樹のてっぺんがかすんで見えた。 「まるで絵のようだ。ここに住んでいる人たちはこれ以上望むことはないだろう」 「それほど特別な景色ではないです」 と一緒にいた男性が言い、 「地方の海や山、それこそ絵になる風景がたくさんあります」 「富士山や何々の山」 と別の人が言い、また別に人が東の方にある海岸や湾のことについて話し、源氏の君の気持ちを紛らわそうとしていた。</p>
<p>8 良清は、光源氏に官位を捨てて播磨で暮らす明石の入道の話をする</p>	<p>「近いところだと、播磨の明石の浦があります」と海の方を指しながら言った。 「よくご覧になってください。そう遠くはないのですが、永遠に続く海があるだけなので、ここにいると孤立されている感じがあって、どことなく寂しい場所です。そこには昔国司だったお坊さんの娘さんがとても立派な宮殿を切り盛りしています。父親は大臣の子孫で、将来は出世するであろうと言われていました。しかし、彼は風変わりな人で、人付き合いが嫌いなのです。しばらくの間は近衛の中將だったのですが、その地位を自ら捨てて、播磨の国司になったのです。しかし、現地の人も折り合いがつかず、軽蔑されるなら都に戻ると言っていたようですが、何もできず、結局髪の毛を剃ってお坊さんになりました。奥まった所に隠居するのが普通ですが、おかしなことに、海辺に家を建てたのです。人によって住む場所が違います、山奥ですと人気もなく寂しいので、きっと若い奥さんと娘さんにとって負担になるであろうと思って、海辺にしたのではないのでしょうか。」</p>	<p>「この近くでしたら、播磨県にある明石の海岸はとても綺麗です。格別にかかがあるわけではないのですが、ゆったりと広々とした感じは妙に他のところとは違います。最近任務を引退した播磨の元総裁が娘を大切に育てながら、立派なお家に住んでいます。大臣の甥で、出世すると言われていましたが、とても風変わりな人で人付き合いはあまり好まないらしいです。近衛の中將を捨てて、自分から望んだ官職の位についたのですが、あの国の人も仲良くできず、再び京都に帰れないと思ったせいか、剃髪してしまいました。少し奥まった山で生活もしないで、そのような海岸に住んでいるというのは本来おかしいのですが、あの国の中に、人が籠もるにふさわしい所はたくさんある半面、深い山里は、人気もなくもの寂しく、若い妻子がきっと心細がるに違いないので、気晴らしのできる住まいにしたのではないのでしょうか。」</p>
<p>9 光源氏は話を聞いて、誇り高いという明石の入道の娘に興味を持つ</p>	<p>播磨に旅をしたときに、その屋敷を尋ねたのですが、都にいたときに質素な生き方をしていたのに、そちらではふんだんにお金を使って豪華な屋敷を建てたことをみて驚きました。業務のことを捨ててなお、楽に生きたいと考えたのでしょうか。あの世の人生のために勤行もよく励んで、普通の法師よりも規則正しく、厳しい生活を送っていたようだった」 「ところでその娘は？」 と源氏の君が尋ねた。</p>	<p>少し前に播磨に来る機会があって彼を訪ねたのですが、京都にいるときにあまり重要なポストに就けなかったけれども、こちらのほうでは広い土地を持ち、立派な屋敷を建て、この国の総裁を務めたということもあり、残りの人生を悠悠自適に過ごせるように準備をしてあります。後世の勤行も、まめに勤めて、かえって出家して人品が上がったようにも見えました」と誰かが言うと、「ところでその娘は？」と源氏の君が訪ねた。</p>
<p>10 明石の入道は上昇志向が強く娘は容貌と気立てが良いとの話が出る</p>	<p>「中々の美人だし、頭も悪くない」とその人が答えた。 「何人かの国司が興味を持って、何度も結婚を申し込んだらしいですが、父親はみんなを断った。自分はこの世のことを諦めても、大事な娘の失敗は許さないと、彼が死んだあと、もし娘が自分勝手な行動をとって父親が考えた道から踏み外してしまったら幽霊になって彼女を海に沈めるとまだ誓っていました」 源氏の君は興味津々だった。 「処女の巫女のように、海龍王としか結婚できないのだ。」と言い、みんなは年老いた元国司の傲慢に笑った。</p>	<p>「悪くはありません。強い性格と美貌を持ち合わせていると言われていました。この国の総裁を務めた者たちがみんな興味津々でしたが、父親は承知しなかったのです。彼自身の人生は中々思い通りにはいかなかったのですが、唯一の娘のためにいろいろと期待しているようです。『私が死んでから、もし私の願っていた運命と違ったならば、海に入ってしまう』と遺言のようによく彼女に言うそうです。源氏の君は興味を持って話を聞いていた。「海の王様の奥さんになるという運命を持つ大切なお方ですね」 「望みが高すぎるのと困りますね」とみんなが笑った。</p>
<p>11 供人たちは明石の入道の娘を洗練されていない娘であると言い合う</p>	<p>この話をしたのは、播磨の国司の息子で、蔵人から今年五位に昇格した若者だった。とても好色な男だから、その娘を落として、父親への誓いを破らせるために明石の海辺を見るために寄り道をしたに違いないとみんなが囁きあった。 「どうせ田舎者でしょう」と誰かが言い、 「古めかしいご両親としか接していないので仕方がない。母親はとても品格のある人だったようだが」 「もちろんそうとも！」 国司の息子のヨシキヨが言った。 「都の由緒ある家族の娘や青年たちを海辺の家に招いて、娘の遊び友達にしたことによって素晴らしい教育を受けさせたのだ」 「心のない人がこの辺に来たら、父親がうるさく言っても、娘を守ることができないでしょう」とまた別の人が言った。</p>	<p>この話をした人は、播磨の現総裁の息子で、書記官から、今年五位に叙された者だった。 「大変な好色者だから、あの入道の遺言をきくと破ってしまおうという気なのだろう」 「それで、この辺りうろろろしているのだろう」と男たちが言い合っている。 「しかし、どんなに綺麗とは言っても、田舎者だろう。幼いときからこのような所に成長して、古めかしい親に教育されてきたし」 「母親はきっと由緒ある家の出なのだろう。美しく若い女房や、童女など、都の高貴な家々から、縁故を頼って探し集めて、眩しく育てているそうだ」 「乱暴な人が総裁になって赴任して来たら、そんなふう安心して、置いておけないのでは」などと言う者もいる。 源氏の君は、「海のごとく深い思い込みだ。海底はあまり楽しそうにないのに…」などと言って、</p>
<p>12 娘を気にする光源氏を、供人は風変わりな好む性質があると察する</p>	<p>その話は源氏の君の想像を掻き立てた。彼に親しい人はみんな知っていたのだが、普通と違うちょっとした事柄を特に好んでいた。そのような性格だからこそ、彼が興味津々に聞いていたのも不思議ではなかった。</p>	<p>かなりの関心を示している。面白い話が好きなので、興味を持つのは当然だとみんなが思った。</p>

<p>13 都へ帰ろうとした光源氏は大徳の言葉に従って明け方まで滞在する</p>	<p>「正午はとっくに過ぎています」と誰かが言って、 「今日はもう発作が起こらないでしょう。早速帰りましょう」と誰かが言ったが、聖人はもう少し休んだほうが良いと言った。 「物の怪が憑いているようでしたから、夜にもう一度治療をしたほうが良いでしょう。明日の朝に出発をなさるといいです」 一緒に来ていた人も泊まるように言っていたし、いつもと違うところに夜を過ごすのも悪くないと思って、源氏の君もそれでも構わないと言った。 「では明日の朝に出ましょう」と言って</p>	<p>「もうすぐ日が暮れるが、熱は出ていないようです。宮殿に戻ってもよさそうです」と誰かが言い出したが、行者は 「悪い霊が憑いている様子だったので、今夜は、やはりゆっくり加持などをして、出発は明日にしたほうが良いでしょう」 みんながその提案に同意した。源氏の君もいつもと違う日常を経験するのが楽しみだった。 「それでは、早朝に」と言った。</p>
<p>14 夕暮れ時に僧房をかいま見た光源氏は、気品のある尼君を見つける</p>	<p>寝るまでたっぷり時間もあつたし、することもないので、夕暮れの霧に紛れて、山に登ってあの小柴垣のあたりに行くことにした。 付き人は聖人の洞窟に戻っていて、惟光だけが源氏の君と一緒に残っていた。源氏の君が立っているところの近くにあった西の部屋には、祈りをする尼がいた。窓が少し空いていた。見る限りでは、尼は花を供えているようだった。真ん中の柱の近くに座り、脇息の上に経を置いて、もうお一人の尼がいた。朗読していたのだが、表情がとても悲しそうだった。大体四十ぐらいの、とても洗練された女性だった。肌は白く、上品で、少し痩せていたが、頬べたがふっくらとしていた。髪の毛が眉毛の高さに切り揃えられており、額を覆っていたが、その髪型はとても似合っていて、かえって長い髪の毛より素敵に見えた。</p>	<p>春なので日が長く、特に用事がなく、源氏の君は夕方に出てきた霧に紛れて先ほど気になった屋敷を見に行くことにした。惟光以外の人を自由にして、二人でフェンス越しに覗きに行った。西面の部屋に、仏像の前で祈りを捧げている尼の姿が見えた。簾を少し上げて、花を供えているようだった。中の柱に寄り掛かって座って、脇息の上にお経を置いて、とても真面目に読経している尼は、少し疲れ気味だったが、普通の人には見えない。四十過ぎぐらいで、顔はとても色白で上品で、痩せてはいるが、頬はふっくらとして、髪がきれいに切り揃えられている端も、かえって長いよりも、この上なくおしゃれな感じだ、と感心して見ていた。</p>
<p>15 光源氏は二人の女房と女童たちの中にかわいらしい少女を見い出す</p>	<p>綺麗な女房二人と一緒にいる。ほかに女童が出たり入ったりして遊んでいる。その中で、十歳ぐらいの女の子がいた。中が暗い紫色で染められていた、使い古した白い単衣を着たその子が走って部屋に入った。源氏の君はそのような女の子を見たことがなかった。どんなに綺麗な女性に育つのだろうか。髪は扇子を広げたようにゆらゆらしていた。顔が赤く、唇が少し震えていた。</p>	<p>彼女の隣に綺麗な服装を身にまとっていた女房が二人座っており、女童が数人行き来して遊んだりしていた。その中に、十歳ぐらいで、白い桂の上に、山吹と同じ色の柔らかい表着を着て、駆けてきた女の子は、他の子供とは比べものならず、将来的に美人になるであろうとはっきりわかる顔立ちをしていた。髪は扇を広げたようにゆらゆらとして、涙を流していたせいか、顔が赤に染まっていた。</p>
<p>16 幼い紫の上は、尼君に「雀の子を犬君が逃がした」と泣いて訴える</p>	<p>「どうしたの？お友達と喧嘩でもしたの？」と言いながら尼は顔を上げたが、その顔と女の子の顔がどこかに似ているように思われた。母親に違いない。 「イヌがわたしの雀の子を逃した。服の籠の中に入れていた小さい雀の子」と悲しそうに言った。</p>	<p>「どうしたの？誰かと喧嘩でもしたのか」と言って、尼が上げた顔に、少し似ているところがあるので、その女性の娘なのではないかと思った。「イヌキが雀の子を逃がしちゃったの。籠の中に、閉じ籠めておいたのに」と言って、女の子がとても残念がっている。</p>
<p>17 雀を逃がして残念そうな紫の上の様子に少納言の乳母が立ち上がる</p>	<p>「イヌは本当にダメな子だね。そのような悪戯をするなんて、今度強く言い聞かせなくては。雀の子がどこへ飛んでしまったのかしら。だんだん近づいてきていたのに。カラスに見つけられないといけど」 と一人の女房が言いながら部屋を出て行った。髪がふさふさしてとても長く、綺麗な人だった。他の人に少納言の乳母と呼ばれていて、その女の子を世話しているようだった。</p>	<p>「あの人はいつもうっかりしているから、叱っても無駄です」とそこにいた一人の女房が言い、 「雀の子がどこに飛んでしまったのでしょうか。すぐくかわいらしくて、だんだん慣れてきたところだったというのに。鷹に見つかったら大変だわ」と言いながら立ち上がった。髪はゆったりととても長く、かわいらしい女性だ。少納言の乳母と皆が呼んでいるらしいので、この子を世話する人のようだった。</p>
<p>18 尼君は自らの余命の少なさを語りつつ雀を追っている紫の上を諭す</p>	<p>尼が「まあ、なんて子供っぽい。どうでもいいことばかり考えているの。信じられない！わたしは体調が悪く明日死んでしまっても不思議ではない今でも雀の子のことで頭がいっぱいみたい。なんて意地が悪い。しかも、生きている命を閉じこもると罰が当たるといふのを何度も言ったのに。こちらへいらっしゃい。」 と言い、女の子が彼女の隣に座りに行った。</p>	<p>尼が「本当に幼いね。私が、このように、今日明日にも寿命が終わってもおかしくないのに、それについては何とも思わず、雀を追いかけている。動物の自由を奪うと罪を得ることですよ、いつも言っているのに」 と言って、 「こちらへおいで」と言うと、隣に座りこんだ。</p>
<p>19 光源氏は、思いを寄せる藤壺に紫の上が本当によく似ていると思う</p>	<p>顔がとても綺麗だったが、源氏の君が心を打たれたのはこめかみ辺りにフワツとしていて、額が見えるように子供っぽくかき上げている髪の毛の美しさだった。大人になったらどんなに美人になるであろうと思いつつ、彼がとても愛していた人に限りなく似ていると急に気づき、涙がこぼれた。</p>	<p>顔つきがとてもかわいらしく、眉の形は自然に綺麗で、子供っぽく掻き上げた額つきや、髪の毛の生え際は、とてもかわいらしい。成長していく彼女を見守るのがどんなに楽しいだろうとその女の子を眺めながら思った。この上なく思いを寄せていた方にとてもよく似ていると気づくと、なおさら彼女から目が離れられず、感動し思わず涙を流した。</p>

<p>20 尼君は亡くなった娘の話をしつつ、少納言の乳母と歌を詠み交わす</p>	<p>女の子を髪の毛をなでながら、尼が「なんて綺麗な髪の毛。とかすのが嫌いだけど。いつまでもあまりにも子供っぽいのが心配でたまらないの。同じ年でもっとしっかりしている子がいるのに。あなたのお母さんが、父親を亡くしたときに12才だったけど、とてもしっかりしていたわ。しかし、このわたしがいなくなったら、あなたはもうどうやって暮らしていけるか本当にわからないの」と言って、泣き出した。遠くからそれを見ていた源氏の君も悲しくてたまらなかった。子供っぽいと言えない表情で尼の顔をじっと見つめていた女の子が、悲しげに顔を傾げて、髪の毛を二つの黒い波となって頬つべたの上に流れた。愛情溢れる表情で彼女を見つめながら、尼が次の詩を詠んだ。</p> <p>《誰かが若草を世話するかどうかをわからないまま 朝の空気に露が消えることができない》 ため息をつきながら女房が 《若草が綺麗に育つまで露が消えることはないでしょう》 と答えた。</p>	<p>尼は女の子の髪の毛を撫でて 「梳かすのはあまり好きではないけれど、本当に綺麗な髪の毛。幼すぎるに見えて心配です。他の子のほうがもっとおとなしいです。お母様が父親を亡くしたときはたった十歳だったけれども、もっとしっかりしていました。もし私が逝ってしまったらどうなることやら」と言って、とても落ち込んでいるのを見て、源氏の君も何とも言えず悲しくなった。子供ながらも、女の子はじっと見つめて、伏し目になってうつむいているところに、こぼれかかった髪が、つやつやとしてとても綺麗に見えた。</p> <p>尼は詩を詠んだ</p> <p>これからどう育って行くのか分からない 若草のようなあなたを残せない 露がなかなか消えない</p> <p>「その通りです」 と女房の一人が言い、そして涙を流しながら、次のように付け加えた。</p> <p>春の若草の運命を知らないまま 露が消えたりすることはできるのでしょうか</p>
<p>21 僧都から光源氏の訪れを聞いた尼君は、恥じて簾をおろしてしまふ</p>	<p>そのときに、家主だった僧都が部屋の向こうから入ってきて「皆さん、外から見えてしまう。今日に限って窓の近くにいたとは。源氏の君が癩病の治療で山の聖人を訪れに来たと今しがた知った。粗末の服を着て全くわからず、ずっと近くにいるのにろくにも挨拶できなかった」尼がそれを聞いてひどくびっくりして「大変！この近くを通っていたら見られているかもしれない」と言って慌ててカーテンを下ろした。</p>	<p>ちょうどそのときに、逆方面から僧都が現れた。 「ここは人目につくところなのではないでしょうか。何で今日に限ってベランダの近くに座ろうと思ったのでしょうか。この上の聖の坊に、源氏中将が病気を治してもらうために来たのと、たった今、聞きつけました。秘密裡で来たので何も知らず、お伺いもできませんでした」と言うと、尼が慌てて簾をおろし、「大変だわ。こんな恰好で誰かに見られたのかしら」と言った。</p>
<p>22 僧都は尼君に、世間で評判である光源氏の姿を見てみないかと誘う</p>	<p>「世間で評判の高い源氏の君を、この機会にお会いできるのはとても嬉しいです。この世を捨てた私のような法師でも、彼のあまりにも輝く美貌をひと目で見ただけで、人生の苦しみや罪を何もかも忘れて、美しさに溢れているこの世の中に留まりたくなるほどだと言われています。まあ、それは聞いていますけど…」 源氏の君は僧都が家を出るより先に聖人の洞窟に戻っていた。</p>	<p>「世間で評判が高い光源氏を、この機会に会わなくては、俗世を捨てた法師でも、世のことを思い出し、寿命が延びることを望ませるような力を持つ方だそうですね」と言って、立ち上がる音がするので、源氏の君も帰った。</p>
<p>23 光源氏は紫の上に強く心をひかれ、藤壺の身代わりになりたいと思う</p>	<p>なんて素晴らしい女の子を発見できたのだ！以前雨の夜に友達が言っていたように、今回のような旅行でも思いがけないところで美しい人に会う可能性があるのだと。散歩に出かけただけなのに、このような偶然な出会いがあるというのはなんて素敵なことであろう。その優しそうな女の子は誰の娘だろうか。宮殿のあの方と同じように、ずっとそばにおいて、彼女に慰められてさえもらえればどんなに良いだろう。</p>	<p>とても魅力的な人を見たときしみじみに思った。 「そうやって、恋を探している友達がいろいろな所に忍んで意外な発見ができるのだ。一度外出しただけでもこのような思いがけない出会いがあるとは。とても綺麗な女の子だが、彼女の正体は一体…」 と思いながら、あのお方の代わりとして彼女を傍において、毎日の慰めに見たいと心の底に考え始めたのだった。</p>
<p>24 僧都の弟子は、光源氏が臥せるところにやって来て惟光を呼び出す</p>	<p>聖人の洞窟で横になったばかりだったが（そこは狭くて、本当に窮屈な場所だった）、僧都の弟子が惟光を呼んでいるのを聞こえてきた。 「僧都は今しがたあなたがたがこちらに泊まっていることを知ったばかりです。挨拶に来てくださらなかったのがとても悲しんでおりましたが、それでもすぐに伺うつもりでした。しかし、内密に来られたのは理由があると思って今まで遠慮していました。豪華なところではございませんが、僧都の家でも泊まれますし、せめて出発前に一度来ていただきたくお誘いに参りました」 と弟子が話した。</p>	<p>寝ようとしていたときに、僧都の弟子が、惟光を呼び出した。狭いところだったので、源氏の君にも弟子の言葉が聞こえるほどだった。『たった今人から聞いて、こちらにいらしたことを知りました。聞いてすぐに、ご挨拶に伺うべきところを、私がこの寺にいることを知っていないながらも内緒に来たと知り、悲しく思いました。宿も私がより快適な場所を提供できたのに』</p>
<p>25 僧都の弟子を通じて、光源氏はなにがしの僧都の招きを受け入れる</p>	<p>「十日間ぐらい発作に襲われて、もうどうしようもないと思っていたときに、ある人がこちらの山に籠っている聖人に診てもらおうように勧めてくれたのです。しかし、もし治療がうまくいかなかった場合は聖人の名誉に傷がつくと思って、普段よりも注意を払ったのです。僧都に私のお詫びの言葉を伝えて、こちらに来てくださるようお願いしてください」 と源氏の君は洞窟の中から返事をした。</p>	<p>『ここ十日間癩病を患い、発作が続いていたので、ある人の勧めに従って、こちらを訪ねてきましたが、もし効果がなければ、世間体の悪いことになると思って、内密に来ることにした。お誘いありがとうございます』と答えた。</p>

26 折り返し参上したなにがしの僧都とともに、光源氏は僧坊を訪れる	僧都はそのお誘いのことを聞いてすぐに源氏の君を訪れた。この世のことを諦めた法師ではあるが、それでも世間で信頼されて、かなり洗練された方だったので、着ていた粗末な服装で会うのは気が引けたが仕方がなかった。都を離れて山に籠っている間の話をしてから、僧都が自分の家にある噴水を見に行くように源氏の君を誘った。さっき覗いた人たちをもう一度見る良い機会だった。しかし、年老いた僧都がみんなに自分のことをどのように話していたかが気になっていた。でもそれはどうでもいい。何をしてでもあの美しい女の子をもう一度見たいと思って、僧都に付いて行くことにした。	しばらくして僧都本人が現れた。法師ではあるが、とても厳しそうな人で、人品も重々しく、世間からも評価されている人なので、軽々しいお姿を恥ずかしく思った。このように籠っている間の話をし、自分のお家に泊まるように熱く誘った。「この家と同じように素朴な所ですが、庭に水が流れて、涼しく過ごしやすいです」まだ自分と会っていない女性にいろいろなことを吹き込んでいると思い、少し恥ずかしかったが、気になっていた女の子のこともあったので、僧都のところに行くことにした。
27 光源氏を招くため、僧坊にある南面の部屋はさっぱりと整っている	庭では、丘にあった自然な植物は巧妙に整理されていた。月がなくて、遣水のほとりに篝火をともし、ガラスの灯籠が気にぶら下がっていた。正面のリビングの調度類は実にしゃれていて、どこからともなく、外国の雰囲気や彷彿させる濃密な香りが部屋に広がっていた。源氏の君はそのような素晴らしい香りを嗅いだことがなく、奥の部屋の女性陣が用意したのではないかと思われて、どれぐらい彼の訪問を心待ちにしていたかが一目瞭然だった。	しばらくして僧都本人が現れた。法師ではあるが、とても厳しそうな人で、人品も重々しく、世間からも評価されている人なので、軽々しいお姿を恥ずかしく思った。このように籠っている間の話をし、自分のお家に泊まるように熱く誘った。「この家と同じように素朴な所ですが、庭に水が流れて、涼しく過ごしやすいです」まだ自分と会っていない女性にいろいろなことを吹き込んでいると思い、少し恥ずかしかったが、気になっていた女の子のこともあったので、僧都のところに行くことにした。
28 光源氏は夢にかこつけて僧都から紫の上のことを聞き出そうとする	僧都は、この世の話と、来世の罰ことなどを話しました。源氏の君は、既に犯した罪の深さを思い出され、狼狽した。生きている限り、その恐ろしい罪を背負わなければならないというのは恐ろしい。ましてや来世にまで影響を及ぼすのである。どんな恐ろしい罰が待ち望んでいるのだろうか。僧都が話している間に、源氏の君は絶えず自分の罪深い行動について考えていた。全てを捨てて、このような所に住むのは唯一の救いかもしれない…しかし、すぐに午後に見た可愛らしい顔のことを思い出し、もっと知りたいという思いに駆られた。「ここに住んでいるのは、どのような方ですか？以前夢で似たような所を見て、それでびっくりしてそのようなことをお尋ねしたくなりました」と源氏の君が言った。	僧都はこの世のことで来世のことについて話した。源氏の君は、自分の犯した罪を考えた。叶わぬ恋をしてしまい、そのせいで今の人生はもちろん、来世も苦しむことになると思い、全てを捨ててこのような家出生活をしたいとも思ったのだが、やはり昼間に見た女の子のことを忘れられずにいた。「ここに住んでいる方はどなたですか。話をしたい夢を見ました。今日、思い当たりました」と尋ねた。
29 僧都は光源氏に、妹の尼君が故按察使大納言の北の方であると語る	僧都は笑いながら「突然夢の話ですね。しかし、その話を聞いてもがっかりするだけでしょう。按察使大納言という人のことは知らないと思いますが、彼は随分前に亡くなりました。その人が妹と結婚していたのですが、旦那さんの死後に妹が家出しました。そのときいろいろな事情で京都に伺うことができず、妹が私を頼って、こちらに籠った」と話した。	「突然夢の話ですか」とにっこり笑って「知ったらがっかりするかもしれませんが、故按察使大納言は、亡くなってかなり時間が経っているのご存知ないと思いますが。私の妹は彼の最初の妻でした。按察使が亡くなって後、家出をしたのですが、最近病気がかかって、山に籠りきりの私の所に来ました。」
30 光源氏は僧都に故大納言と尼君の間に生まれた娘について質問する	「按察使大納言は娘がいたという話を聞いたことがありますが、本当ですか。色気な気持ちからではなく、まじめに聞いているのですが」と源氏の君がさらに尋ねた。「一人娘がいましたが、十年前に亡くなりました。父親は入内させなかったのですが、彼女は全くその気がありませんでした。父親が亡くなってから、母親と二人になって、無責任な人が兵部卿王子に紹介されて、彼の愛人になりました。その王子の奥さんがとても気が強く、明けても暮れても彼女をいじめ続けて、そのあげくあの可哀想な子が死んでしまったのです。悪意だけでは人を殺せないと言いますが、その子は悪意だけで殺されたというのはこの目で見ました」と答えた。	「按察使には娘がいたと聞きました。どのような方ですか。単なる好奇心ではなく、真面目に興味があります」と当て推量というと「亡くなって十年ぐらいになりますが、娘が一人いました。入内させようと思って大切に育てられましたが、その望みが叶う前に大納言が亡くなってしまい、私の妹が彼女の世話をすることになった。その時に、誰が手引をしたものか、兵部卿宮がこっそり通って来るようになったのですが、本妻が身分の高い人で、いろいろな問題がありました。朝から晩まで苦しまれて、やがて亡くなってしまいました。そのときに心の病は体の病を呼び起こすことをこの目で見ました」と僧都が語った。
31 紫の上の素性を知った光源氏は、藤壺に似ていることに合点がいく	ならあの女の子はその人の娘に違いないと源氏の君が察し、それであの宮殿の人と似ているわけだったのかと納得した。そしてますますあの女の子に惹かれていた。身分が十分に高く、その反面田舎で素直に育ったので、一緒に暮らしたら自分の好みに合わせやすいという利点もあると考えた。	あの女の子は亡くなった若い女性の娘だったのだと察し、兵部卿宮の娘だったらあのお方に似てもおかしくはないはずだった。それ知ってなお、ますます会いたいと思い始めた。綺麗で、身分も高く、ずる賢いところもなく、自分の傍に置いて、理想の女性に育てようと思った。
32 紫の上のことがいっそう気になった光源氏は、僧都に詳しく尋ねる	「とてもお気の毒の話ですね。その可哀想な方の形見などは残っていないのですか。」と、女の子のことを知りたくて、源氏の君が聞いてみた。「子供を産んでもまもなく死にました。それも女の子でした。妹がその子を引き取るようになったのですが、体が弱くて、ちゃんと面倒を見切れるかどうか心配です」	「とてもお気の毒の話です。その方は後に遣して行った人はいないのでしょうか。」 「亡くなる前に生まれた娘を一人残しました。女の子なので、妹の心配の種です」
33 光源氏は僧都に幼い紫の上を後見することを尼君に話すように頼む	やはりそうだったのだと、源氏の君が思って、そして次のように話した。「唐突な申し出ですが、その子を養子にしたいと思えます。妹さんにそのことを伝えていただけますか。まだ幼かったときに結婚してしまったのですが、あまりうまく行かず、誰かと一緒に暮らすのに向いていないようで、今は完全に一人暮らしの状態です。まだ幼い子だとわかってるので、決してお考えになっているような付き合いではなく…」と言葉が途絶えて、	やはりそうだったのだと思った。「急な申し出に思うでしょうが、その女の子を私に預かってくれませんか」と頼んでもらえますか。ちゃんと理由があって頼んでいます。関係を持っている人がいますが、性格が合わないせいか、ほとんど一人で暮らしています。彼女がまだ若すぎるし、ただ遊びたいだけと思われるかもしれませんが」

<p>34 僧都は光源氏に、尼君に相談した上で返事をすると答えて堂に上る</p>	<p>僧侶が「とても嬉しいお言葉ですが、あの子はまだ幼すぎるということをわかっていただいているように思います。一緒にいても退屈だと思うことでしょう。しかし大人になるにつれて、もし出世をしたいのであれば、女というものは権力のある友達が必要というのは確かです。何もお約束はできませんが、祖母に話をしてみます」</p> <p>僧侶の態度が急変して、堅くなった。源氏の君が言いすぎたと反省し、それ以上何も話さなかった。</p> <p>「阿弥陀仏に祈りを捧げないといけない時間となりましたので、お寺に行かなければなりません。初夜の勤めもしないといけないのですが、その後にまたお会いしましょう」と行って、丘を登り始めた。</p>	<p>「このお言葉はとてもありがたいですが、まだ幼すぎて、あなたのようなお方がお世話するというのは、冗談でも、難しいと思います。その一方、女の人は男に守られて一人前になるもので、私が出して世の中のこともわからずあまり力になれないというところもあります。妹に相談してから、お返事を差し上げましょう」</p> <p>と無愛想に言って、態度がいきなり変わってしまったので、源氏の君は何を答えるべきかが困っていた。</p> <p>「阿弥陀仏の堂で勤行を行う時刻になってきました。初夜の勤行もまだしていません。済ませてから戻ります」と言いながら、堂の方に歩き始めた。</p>
<p>35 光源氏は悩ましい気持ちになり、夜が更けても眠ることができない</p>	<p>源氏の君がとても気が重かった。雨が降り始めて、丘が冷たい風に吹かれており、その時まで少ししか聞こえてこなかった滝の音が段々高くなり、少し眠たそうな読経の音が絶え絶えにその音と混じっていた。そのような状況だと、無関心な人でも寂しく感じるに違いない。源氏の君はなおさらそうで、眠れずに考え事していた。僧都は初夜と言っていたが、かなり遅い時間になっていた。</p>	<p>源氏の君は落ち着かない様子だった。雨が少しふりそそぎ、山風が冷たく吹き、滝壺の水嵩も増して、音が大きく聞こえる。読経を読んでいる少し眠そうな声が聞こえてきて、それがなぜか何だか恐ろしく、何も無い人でもしんみりするが、源氏の君はなおさら、いろいろなことを考え一睡もできなかった。僧都は初夜と言ったが、夜はもう更けていた。</p>
<p>36 奥の人が休んでいない気配を感じた光源氏は扇を鳴らして人を呼ぶ</p>	<p>音を立てないようにしていたのだが、数珠が脇息に触れて鳴る音がかすかに聞こえていたことから、尼がまだ起きているということがわかった。そのかすかな、繊細な音に何らかの魅力があるように感じられた。すぐ近くの場所から来ているようだった。源氏の君が中の部屋とリビングの間にあった障子を少し開けて、扇子を鳴らした。</p>	<p>女性が住む奥の部屋でも、誰かが起きている気配がして、とても微かだが、数珠の脇息に触れて鳴る音が聞こえ、ものやさしくそよめく衣ずれの音からとても上品な方がそこにいることがわかった。その微かな音はそう遠くはなかったはずだったので、部屋の外側に建てられた屏風を少し開けて、自分がいることを知らせるために扇で掌を軽く打って音を立てた。気づかないふりができないようで、誰かが膝を床に付いて動いているような気がした。</p>
<p>37 歌を詠んだ光源氏は、女房に尼君へ取り次いでもらうようにと頼む</p>	<p>中の部屋に誰かがためらいながら、<音を聞いたような気がするのだが>と思っているかのように障子に近寄ってきて、<きっと間違えだわ>と考え直して、また離れたような気がしたのだった。そして暗闇の中に誰かが歩いているような気配があったときに、</p> <p>「仏の導きは、暗いところでもけって間違わない」と源氏の君が言った。暗闇からその若そうな声を聞いた女の人が固まってしまって、何を答えればいいのかわからない。気分を取り直して、</p> <p>「どこへご案内すればいいのか。わからないのですが」とやっと答えた。</p> <p>「怖がらせてしまって本当に申し訳ないです。ちょっとしたお願いがありまして。この詩を伝えてください：</p> <p><若い草を見てからというもの 旅寝の袖も露が乾かない></p> <p>と源氏の君が言った。</p> <p>「こちらではそのようなで伝言の意味が分かる人がいないと知っているはずですが。その詩はどちら様宛でしょうか」と女房が言った。</p> <p>「何かの理由があって、そのメッセージをあなたがお仕えしている方に伝えていただきたいです」</p>	<p>しばらく経って、女の人が後戻りして、</p> <p>「おかしいわ、聞き間違いかしら」と不思議がって言っているのが聞こえてきた。</p> <p>「仏が導いてくれるなら、例え暗闇の中でも迷うはずはありません」と彼が言った。彼の声が若くて、品があったので、躊躇いながらも女の人が返事をした。</p> <p>「どちらへの案内でしょうか。わかりません」</p> <p>「唐突な訪問だけあって驚いているのは当然です。それでも伝言をお願いしてもよろしいでしょうか。</p> <p>旅人の袖は 若草の柔らかい葉っぱを見てからというもの 涙の露ですっかり濡れて、乾くことはない</p> <p>「このような言葉をわかる人はこちらにはいないということはご存知でしょう。どなたにお伝えすればよろしいかしら」と女の人が尋ねる。</p> <p>「私を信じて、しかるべき理由があってそのように話しています」と言うので、女の人は奥の方に戻った。</p>
<p>38 光源氏が紫の上にあてた歌を耳にした尼君は歌の内容を不審に思う</p>	<p>その詩には姪のことについてだったということをしぐさ察し着いたが、源氏の君がその子の年齢を勘違いして、交際を申込もうとしていると思ったのであった。しかし、姪の存在をどのように知ったのだろうか。少しの間じっくりと考えたあとに、</p> <p><旅寝の枕を一日しか経験していない人が 毎日山籠りの苔の湿っぽさを知っているその丘の住民のことを分かるはずがない></p> <p>という意味の詩を送ることにした。このように源氏の君の詩の意味を少し和らぐことができたのだった。</p>	<p>『他人に頼んでメッセージのやり取りをすることには慣れていません。できれば直接お話ししたいです』と彼から新たな伝言が来て、尼が再び迷った。「何かの間違いでしょうか。そのような高い身分の方に何とお答えすればいいかしら」</p> <p>「しかし、返事をしないと失礼です」と女房が言う。</p> <p>「なるほど、若い人は躊躇うかもしれませんが、真面目に考えていらっしゃるようなので、会うのが光栄です」と言い、いざり寄った。</p>

<p>39 歌を返した尼君に対し、光源氏は紫の上への切実な気持ちを訴える</p>	<p>その返事を聞いた源氏の君が、 「こういう人を介してのご挨拶は、慣れていないと伝えてください。慎重な性格だとわかりますが、しきたりはさておき、直接話したいと考えています」 と言った。 「誰がそんな間違っただけの情報を彼に吹き込んだのでしょうか」 と源氏の君が交際のことを言っていると思いついて、尼が当惑していた。そんな立派な方と直接会うのがとてもできないと思って、尼は会わない口実を一所懸命考えていた。一緒にいた女房たちが、直接会わないと、源氏の君が気を悪くするのではないかと、女性の部屋から出て、 「もう若くないのですが、それでも直接話をするのが軽率なかもしれません。しかし、大事な話があるそうなので、会わないわけにはいけないと思って…」と尼が言った。</p>	<p>『他人に頼んでメッセージのやり取りをすることには慣れていません。できれば直接お話ししたいです』と彼から新たな伝言が来て、尼が再び迷った。「何かの間違いでしょうか。そのような高い身分の方に何とお答えすればいいかしら」 「しかし、返事をしないと失礼です」 と女房が言う。 「なるほど、若い人は躊躇うかもしれませんが、真面目に考えていらっしゃるようなので、会うのが光栄です」 と言い、いざり寄った。</p>
<p>40 困惑している尼君の気づまりな態度に光源氏は謙虚な言葉をかける</p>	<p>「私の言葉が突然で、軽薄だと思っているかもしれません。しかし、本当にまじめに考えています。仏もお見通しです…」 そして、尼の年齢や慎重な態度に圧倒されて、すぐに話を続けることができなかった。 「そちらの思いを伝えるには思いがけない方法をとったのですね。その提案の中身がまだわからないのですが、きっとまじめに考えているのでしょうか」</p>	<p>「突然に現れて、軽率だと思われても仕方ありませんが、決して気まぐれではないということには仏が証明してくれるでしょう…」 と言いかけたが、女性の落ち着いた様子を見て最後まで言葉が出なかった。 「おっしゃる通り、思いも寄らない形でお話をしているというのは、きっと何かの縁があることでしょう」 と尼が言った。</p>
<p>41 光源氏は尼君に自分の体験を語りつつ、紫の上との結婚を申し出る</p>	<p>その言葉に勇気づけられて、源氏の君が自分の考えを切り出した。 「あなたのご主人と死別し、娘さんも失ったことを知って、とてもお気の毒に思いました。あの女の子と同じように、私も幼いときに、愛してくれる人を亡くし、幼少時代は長年悲しみに暮れていたのです。同じ待遇だからこそ、その子のことは気になり、彼女の世話をしたいと考えました。彼女の母代りの役割を任せていただきたいと思って、そのことをどうしても伝えさせていただきたく、こんな不適切な時間にお呼び立てしてしまったのです」</p>	<p>「お気の毒な待遇だと伺っている女の子のことですが、亡くなった方の代わりに私に世話をさせてください。私も幼いときに大事な人を喪い、海に彷徨う船のように頼りない様子でした。彼女もまた昔の自分と同じような待遇なので、友達だと思ってもらいたいと伝えなかったのですが、お会いできる機会がめったにないので、思い切って今日伺いました」</p>
<p>42 尼君は紫の上が幼く不似合いなことを理由に光源氏の申し出を断る</p>	<p>それに対して尼は 「とても嬉しいお言葉ですが、しかしながら何かの間違いがあるはずですよ。こちらでは私が世話している女の子が確かに住んではいますが、彼女は幼すぎて、あなたの御眼鏡に合うはずがないので、お断りさせていただくほかないです」 と答えました。 「その女の子について全てははっきりと知っています。しかし、彼女に対する気持ちは適切ではないと思わせたのであれば、謝ります」 と源氏の君が言ったが、自分が言っていることがどれくらい重大かというのは理解していないようだったので、尼がそれ以上話をしたいと思わなかった。</p>	<p>「とても嬉しいお言葉ですが、何かの間違いがあったかと思います。この頼りのない自分の所に女の子がいるというのは本当ですが、彼女はまだ幼くて、多めに見てもらえるようなところもないので、あなたのお願いを承諾することができません」 「全て知っていますから、厳しい事を言わずに、どうか私の純粋な思いを考えてください」 と言ったが、尼が、悪気がなくても受け入れがたい申し出だと思って、中々承諾しない。</p>
<p>43 僧都がお勤めから帰って来られたので光源氏は尼君の前を退出する</p>	<p>僧都が戻ってくる頃だったので、最初から賛同してくれると思わなかったが、いずれ自分の申し出に耳を貸してくれると信じていることを尼に伝えて、障子を閉めた。</p>	<p>その間に僧都は祈りが終わって、戻った。『自分の気持ちを伝えたので、心配ないです』と光源氏が自分に言い聞かせ、屏風を閉めた。</p>

<p>44 明け方、深山の景色を見ながら、光源氏は僧都と和歌の贈答をする</p>	<p>明け方になっていた。近くの堂に法華三昧を誦読する声が聞こえ、懺法を歌っている坊さんたちの声が風に乗って滝の音の響きと共に広がっていた。</p> <p><山で吹く風に夢から目を覚まして、音楽のように流れる滝の音に感動した></p> <p>という詩を詠んで、源氏の君が僧都を迎えた。僧都はそれを聞いて、</p> <p><毎日水を汲んでいる川の水音を聞いても、感動することはないでしょう></p> <p>と答えた。</p> <p>「もうその音を聞きなれています」</p> <p>と言いつけているかのうように付け加えた。</p> <p>空が厚い霧で深く霞んで、鳥たちの音さえもはっきりとしない様子だった。その丘には名前のわからない花と木がたくさんあって、岩が色とりどりの刺繍に覆われているかのようだった。鹿がたたずんだり歩いたりしているのを物珍しく見ていると、病気のことを忘れることができた。</p>	<p>夜が明ける時間が近づき、法華三昧を勤めるお堂の懺法の声が風に乗って聞こえてきて、その尊い響きは滝の音に重なっていた。</p> <p>奥山から来る風は 嘘の夢から目醒めさせ 滝の音は 感謝の涙を誘う と彼が詠んだ。</p> <p>あなたの袖を濡らした山水で 心を清められている私たちは 驚きません。</p> <p>私はこの音を聞き慣れています。」 と僧都が言った。</p> <p>明るくなっていく空は春の霧で霞んでいて、どこからかがわからないが、鳥の音が聞こえる。名前の知らない花が様々な色で地面を彩り、色とりどりの絨毯が敷いてあるかのようで、そこに鹿が立ち止まったり歩いたりしているのも彼にとっては珍しく、辛いことを全部忘れることができた。</p>
<p>45 身動きできぬ聖は、光源氏のために護身の修法をして陀羅尼を読む</p>	<p>聖人は、自由に身動きができないが、やっとのことで護身の修法をした。老人らしい聞き取りにくい声だったものの、かえって修行の年功を感じられた。</p>	<p>行者は身動きが不自由だったが、それでも護身法をすることになった。しゃがれた声で、歯が全部揃っていない口から発生され聞き取りにくかったのだが、しみじみと年功を積んだように陀羅尼を誦していた。</p>
<p>46 光源氏は迎えの人からの祝いと僧都から酒などのもてなしを受ける</p>	<p>源氏の君の友達が数人お見舞いに来ており、その中に宮殿から来たお使いもいた。その下に住んでいるお坊さんが、谷の底まで掘り出してきて、めったに見ることができない根を差し入れとして持ってきた。お見送りできず、本当に申し訳なく思っていたと、源氏の君に伝えた。</p> <p>「今年いっぱい固い誓いがあって、喜んでしたかったことをできないでいます」</p> <p>と言いながら、源氏の君にお酒を勧めた。</p> <p>「好き勝手なことができるものなら、しばらくこの丘から離れたくないです」</p> <p>と進められるままにお酒の盃を手に持ちながら源氏の君が言った。</p> <p>「しかし、帝が早く宮殿に戻って欲しいと言っているのでは仕方があるまい。花が散らないうちにまた戻ってきます」</p> <p><街に住んでいる人に帰って話そう この美しい山桜を 風が吹き散らす前に 見てく るように></p> <p>という詩を詠んだ。年老いた老人が源氏の君の優しさで美しい声にうっとりしていて、</p> <p><優曇華の花が咲くのにもぐり逢ったような 気がして 深山桜には 目も移りません></p> <p>という詩で答えた。</p> <p>「優曇華ほど珍しくなんかありません」</p> <p>と源氏の君が微笑みながら言った。</p>	<p>お迎えの人が来て、光源氏が快復されたことを喜び、帝からもお使いが来た。僧都は谷の底から拾ってきた、見たことのない果物を差し出した。</p> <p>「本当に申し訳ないのですが、今年いっぱい山に籠ると誓いましたので、お見送りができません」</p> <p>と言いながらお別れの酒を差し出した。</p> <p>「山や谷川の風景に心を打たれましたが、帝が心配していると思います。桜の花が散る前にまた来ます。</p> <p>大宮の人に帰って この山桜が散る前に 遊びに来るように話す</p> <p>と光源氏が言ったが、彼の声や仕草がいかに魅力に溢れると見た僧都は以下のように答えた。</p> <p>優曇華の花を見ることができた今 山桜には目も移りません。</p> <p>「三千年に一回しか咲かない花を見るのは難しい」 と微笑みながら言ったが、</p>
<p>47 杯をいただいた聖は涙をこぼして光源氏を拝み、守りの独鈷を渡す</p>	<p>そして聖人がお別れの盃を彼に渡して、</p> <p><奥山の 松の扉を 珍しく開けて 見たこともない花のような存在を見ることができた></p> <p>と言いつ、源氏の君の顔を見ながら涙を浮かべている。お守りに、魔法の杖をあげた。それを見て、僧都は聖徳太子が韓国から持ってきた数珠をあげた。玉で装飾されており、唐風の箱のままに入っていた。透き通った袋に入れて、五葉の松の枝に結びつけ、さらに紺瑠璃の壺などに葉を入れて、藤や桜などの枝に結びつけて、山里にふさわしい数々の贈物を用意した。良くしてもらったので、源氏の君はいろいろと京へ取りに行かせた。まず聖人に報酬を払い、そして自分のために祈りを捧げた坊さんにも贈物を配り、最後は近所に住む貧乏人に日常品を配った。出発の準備としてお祈りを読んでいる間に、</p>	<p>行者は、彼から茶碗を受け取りながら、付け加えた</p> <p>奥山の松の中にある私の扉を珍しく開けたら 今まで見たことがなかった花を見ることができた。</p> <p>彼の目が嬉しい涙に溢れていた。光源氏に独鈷を贈り、僧都は聖徳太子が百済から得られた金剛子の数珠で、玉の飾りが付いているのを、そのままその国から入れてあった箱で、唐風なのを、透かし編みの袋に入れて、五葉の松の枝に付けて、紺瑠璃の壺々に、お菓類を入れて、藤や桜などに付けて、場所柄に相応しいお贈物類を贈った。光源氏もまた行者をはじめとして、読経した法師へのお布施類、用意の品々を、いろいろと京都から持ってこさせたので、その近辺の樵人にまで、相応の品物を配り、御誦経の布施をしてから出発の準備に取り掛かった。</p>

<p>48 紫の上を引き取りたい光源氏に尼君は四五 年先ならばと返事をする</p>	<p>僧都は家に入って、妹の尼に何か源氏の君への伝言があるかどうかを訪ねた。 「今は何と答えれば良いかがわかりません」 と言った。 「四、五年後もまだ同じ気持ちだったら考えてみいのです」 「私も同感です」 と僧都が言った。 やはり何の進展がなかったと知って、残念に思った。尼への伝言に応えるために、詩を書いて、僧都に仕えていた青年に届けさせた。 ＜昨日の夕暮れ ほのかに美しい花を見たが 今朝深い雲に覆われて 何もかも見えなくなった＞ それに対して尼は ＜この花の場所から立ち去るのがそんなに苦しいかをわかるために はっきりとしない空をじっと見つめる＞ と由緒のある筆跡でとても優雅に、走り書きしてあった。</p>	<p>僧都は妹の所に行き、提案されたことについて話した。「いずれにしてもすぐに答えは出せません。四、五年経っても同じような気持ちであれば、考えましょう」 と彼女が答えた。前も同じことを言われたので少しがっかりした。僧都のところにいる少年に伝言を預けた。</p> <p>日没の頃、わずかに花の色を垣間見ることができたので、今朝は霧の空に立ち去りがたい気持ちがする</p> <p>本当にその花から立ち去るのがそんなに難しいのでしょうか 真実を知るために霧で霞んでいる空を眺めることにする</p> <p>と、緻密で上品な筆跡で、お返事が無造作に書かれてあった。</p>
<p>49 光源氏を迎えに頭中将や左中弁たちなどの公達が都からやって来る</p>	<p>源氏の君の馬車が用意されていたときに、大きな家からたくさんの若い公達が集まった。源氏の君に起こったことを知ったばかりで、少なくとも彼を家まで送るつもりで来たという。頭中将、左中弁や身分の高くないその他の公達が源氏の君を想って集まっていた。「お手伝いするのが何よりも大事なのに、何も言わずに出かけるなんて」と少し怒っている者もその中にいた。「しかし、せっかくここまで来たので、少しだけでもこんな素晴らしい花の陰に休みたい」と誰かが言った。岩陰の苔の上に並んで座り、次々と壺からワインを飲む。その近くに川が流れ、その水は美しい滝を作っていた。</p>	<p>車に乗るときに、左大臣邸から若者のグループが来て、そのグループの中に左大臣の息子たちもいた。「何も言わずに立ち去るなんて！」という。頭中将、左中弁、その他の人が親しく近寄ってきた。「お供できると思っていたのに、こんな扱いをされるなんてあんまりです」と嘆き「桜を水に平安京に戻るのもったいないです。」とさらに付け加えた。岩陰の苔の上に並び座って、お酒のコップを用意した。滝の元にいたのだが、上から落ちてくる水は風情のある風景を作り出していた。</p>
<p>50 頭中将は懐の横笛を出して吹き、弁の君は扇を鳴らし催馬楽を謡う</p>	<p>頭中将が、服から笛を取り出して、少し吹いてみせた。左中弁は軽く扇を軽く打ち鳴らして『豊浦の寺』という曲を口ずさんだ。普通の人より秀でた若者だったが、その中でも源氏の君のひどくだるそうに、岩に寄りかかっている姿が、ぞっとするほど美しいので、ほかのものに目移りするようなことはない。誰かがザンポーニアを吹き始め、もう一人は笙の達人だった。</p>	<p>頭中将は、懐にしていた横笛を取り出して、吹きはじめ、弁の君は、扇を軽く打ち鳴らして、「豊浦の寺の西」という曲を歌った。普通の人に比べたら、その若者のどれもが優れていたが、源氏の君の、とても苦しうにして、岩に寄りかかっている様子は、恐ろしいくらい美しく、目移りできそうにないほどだった。いつものように、箏を吹く隨身、笙の笛を持たせている風流人などもいた。</p>
<p>51 僧都も自分から琴を持ち出して、光源氏に琴を弾いてほしいと頼む</p>	<p>その後、僧都がチェトラを持って家から出てきて、それを源氏の君に渡して、「山の鳥も驚かしてください」と言って、弾くように促した。源氏の君は気分が乗らないと言ったが、僧都がどうしてもというので、失礼にならない程度弾いてみせたが、悪くない演奏だった。その後はみんなが立ち上がって、出発した。</p>	<p>僧都は、七絃琴という中国の楽器を自分で持ってきて「何かを弾いてみてください。鳥を驚かしてやりましょう」と熱心にお願した。「まだ気分が優れないのですが」と言いながらも少しだけ琴を鳴らして、とても良い曲を演奏した。やがてみんなが旅立った。</p>
<p>52 光源氏の姿に法師と童べは感涙し、尼君たちや僧都は彼を絶賛する</p>	<p>名残惜しく残念だと、なんでもない法師や、童たちまで涙を流している。まして奥では、年老いた尼があんな美しい人を一目しか見ることが出来ず、そしてこれからは会うことないであろうと思って悲しんでいた。僧都も、わずらわしい日本の末世に何でそのような素晴らしい王様が生まれたのかがありえないと言って、涙を流した。</p>	<p>身分の低い法師や、童子も、みんなが別れを惜しんで涙をこぼしており、年老いた尼やその女房も、このように美しい人の姿を見たことがなかったので、この世の人だと思われないうと話し合っていた。僧都も、涙を拭いながら「嗚呼、どのような因果で、このような美しい姿の持つ方が苦しい日本国の末世に生まれたであろうと思うと、悲しくなります」</p>
<p>53 幼心に光源氏に思いを寄せる紫の上は、人形に源氏の君と名付ける</p>	<p>女の子も素敵だと思って、自分の父親よりも美しいと思ったぐらいだった。「本当にそう思うなら、あの方のお子さんになれば」と乳母が言った。女の子がうなずき、そうならいいなと思い始めた。人形遊びでも、絵を書いても、〈これは源氏の君だ〉ときめて、きれいな着物を着せて大切にしていた。</p>	<p>女の子も、子供心ながらも、感心し「父よりも美しい」と言った。「そのように思うなら、彼の娘になりたいと思わないですか」と誰かの女房が聞き、彼女がこっくり頷いて、そうならとても素敵なことだわと思った。そしてその日以来、絵を描いたり、人形と遊んだりしても、〈源氏の君〉を作り出して、一番美しい服を着せて、一番大事にしていた。</p>
<p>54 帰京した光源氏は、宮中へあいさつに伺って父桐壺の帝と対面する</p>	<p>源氏の君は京に戻ってすぐ宮殿に行って、父親にここ数日の出来事を話した。帝は彼がやつれてきて、とても心配した。聖人の魔法についていろいろ聞いて、それに対して源氏の君が詳しく説明した。そして帝は「もっと前から魔法使いとして認定をしなければならなかったのですね。彼の魔法はずっと素晴らしい効果を発揮してきたのですが、なぜか公式に認定されてきてないのですね」と言って、その状況を正すよう命令した。</p>	<p>源氏の君はまず参内して、その数日のことについて報告した。彼のやつれた様子をみた帝がひどく心配した。帝は行者の技術についても尋ね、感心した。「高い地位にいるべき方です。修行の功績は大きいのに、こちらでは全く知られていないなんて」</p>

<p>55 宮中を出た光源氏は、正妻葵の上の実家である左大臣邸へと向かう</p>	<p>源氏の君が帰るところで左大臣と会って、彼が息子たちと一緒に迎えに行かなかったことを謝った。「秘密裡に行ったので、邪魔してはいけないと思って。しかし、私の屋敷で数日ゆっくりして行くのはいかがでしょうか。その後は自宅まで送ります」と言った。源氏の君は全然行きたくなかったが、仕方がなかった。左大臣は自分の馬車に源氏の君を乗せて、屋敷に着いたときに牛を外して、自分で誘導した。細やかな心配りだったに違いないが、源氏の君はさすがに心苦しく思った。</p>	<p>左大臣も参内して 「迎えに行こうと思っていたのだが、何も言わないで出たので遠慮しました。私の家に、数日のんびりと過ごしてはいかがですか」 と言い、「お供します」と付け加えた。その提案をあまり嬉しいと思わなかったが、一緒に行くことにした。大臣は彼を自分の車に乗せ、自分は後ろに乗った。彼は源氏の君を気遣って、大切にしていたことが明らかだったので、やはり胸のつまる思いがしていた。</p>
<p>56 光源氏は久しぶりに葵の上と対面するものの、二人の心は通わない</p>	<p>源氏の君が来るので、葵の部屋は注意深く用意されていた。最後彼が行ったときからいろいろなことが変わっており、その中で新しいバルコニーが造られていた。すべてが完璧に整えていた。いつものように葵の姿が見当たらない。父親がしきりに催促し、やっとのことで主人の前に現れた。まるで絵にかいた姫のように全く身動きをしない。とっても綺麗だった。「興味を持ってくれたり、何かの反応を示してくれたりさえすれば、喜んで山の滞在についてあれこれ話したいのだが。このままでは続けられない。何故そんなに冷たく、ちっとも打ち解けてくれないのか。数年経っているのに懐いてくなくて、むしろ距離を置いている一方だ。普通の夫婦のような関係でも築くことはできないのでしょうか。あんなに病気で苦しんでいたにも関わらず、様子について尋ねてもこななかったのはおかしいじゃありませんか。訪ねてくるとは思わなかったけど、それでもやはりおかしい」</p>	<p>大臣の屋敷でもみんなが準備して待っていた。彼がいない間に、すべてが修復されより美しくなったので、宝石のように光り輝くところになっていた。源氏の君の若い妻は、いつものように、奥の部屋に籠りっきりで、父親の強い催促を受けて、やっと出てきた。まるで小説の絵巻に描いた姫のように座って、仕草がすべて完璧で、心の中の思いを話したり、山への旅行のことを話したりするにも、話のしがいがあって、興味を持つ様子であったならば、愛情が持てたであろうが、少しも打ち解ける感じがなく、照れて、源氏の君をよそよそしく扱い、以前より二人の間の距離がさらに大きくなったかのようで、とても辛くて心外だった。「時々、世間並の妻らしく振舞って欲しいです。私が病気でひどく苦しんでいたにもかかわらず、様子について聞いたりもしなかったというのは、今に始まったことではないが、やはり悲しく思います。」 と言った。</p>
<p>57 古い歌を引用して恨み言を述べる葵の上を光源氏は避けようとする</p>	<p>それに対して葵は 「そうですね。何も気にしない人はひどいですね」 と流し目で言い、そのまなざしは源氏の君の方を超えて遠く見ているようで、こっちが恥ずかしくなるほど、気品高く美しい容貌だった。 「めったに口をきいてくれないし、話してくれたらきつい言葉しか出てこず、こちらが言ったことも曲解するばかりだ。いろいろ試してみても、冷たくされる一方だ。いつか理解してくれたらいいのに…」 と言いながら、源氏の君が寝室に入っていった。しばらくの間ベッドに横たわったままいろいろと思い悩んでいた。しかし、彼女のことをそこまできいていなかったせいか、すぐに浅い眠りに入って、考え事をしはじめた。</p>	<p>「尋ねない人を待つというのは苦しいとおっしゃりたいのですか」 と流し目に見て、とても気後れがしそうで、気品高くとても美しい容貌だった。 「珍しく話してくれるかと思えば、心外な言葉ですね。＜尋ねない人を待つ＞というのは私たちの間柄にふさわしい言葉ではないです。嫌な言い方ですね。時間が経てばあなたの振る舞いが変わるかと思っていたのですが、どんなに頑張っても、やはり距離を置かれている感じがいつまで経っても変わりません。仕方ない、長生きさえしたら…」 と言って、用意されていた部屋に入った。妻がすぐに入らず、どのように誘えばいいかと言葉を見つからないまま、溜息をつきながら横になっているものの、なんとなく興味を失って、眠っているふりをして、他のことで頭がいっぱいだった。</p>
<p>58 光源氏は葵の上への不満と反対に紫の上への思いが強くなっていく</p>	<p>あの子を自分のそばにおいて、大人になるまでその成長を見届けたいと何よりも願っていた。しかし、祖母は正しい。あの子は幼すぎて、その話を聞き入れてくれるのは時間がかかりそうだった。少なくとも、都まで連れてくるのは不可能なのだろうか。近くにいたら、何かの口実を作って呼び出すこともできたし、ずっと一緒ではなくても何かの慰めになれるであろう。彼女の父親、兵部卿、はとても上品な方だか、美しくはなかった。何故あの子は一族のあの方にそんなに似ているのだろうか。兵部卿と藤壺は同じ母親だが、他の兄弟は腹違いなのかもしれないと思った。あの子は好きな人に近い間柄だからこそそばに置きたいという気持ちが増してきてきた。何とかしてそのようにしたいと誓った。</p>	<p>その＜若い草＞の成長を見守りたいと思いつつも、それにふさわしくない年頃になっていたし、近寄りにくいのも確かであった。何かの手段を講じて、自分の家に連れ込んで毎日一緒に暮らしたいが、どうすればいいのだろうか。父親は、とても上品で優れた方だったが、美しいと言えないのに、どうして同じ一族のもうひとりの方にあんなに似ているのだろうか。父親も叔母も同じ女帝から生まれたからであろうか。その血縁がゆえにとっても親しく感じられて、なんとかしたいと深く思う。</p>

<p>59 帰京した翌日、光源氏は僧都や尼君などがある北山へ消息をおくる</p>	<p>次の日は僧都に礼状を送った。当然ながら、その手紙に自分の気持ちも書いていた。尼に宛てたメッセージに次のように書いた「私に提案に反対をしていたので、思っていることを十分に話すことが出来なかった。それでもその言葉を通して、私の気持ちがどれぐらい真剣かということをほんの少しでも伝えることができたならどんなにうれしいでしょう」その中に、小さな結び文にして、以下の詩を書いた</p> <p>《一生懸命忘れようとしたけれど ずっと思い続けていた あの山の花の綺麗な面影》。</p> <p>尼がもう若くはなかったが、その手紙をもらってやはりうれしかった。筆跡も見事に美しかったが、紙のさりげない包み方も素晴らしかった。源氏の君のことが気になって、積極的な返事をしたかったのだが、やはりそれが出来ず</p> <p>「近所に来ていたときに、訪問していただいてとてもうれしかったです。しかし、またお会いするとき（是非とも近いうちにそうしたいです）、私の返事は前回と変わらないでしょう。また、お送りいただいた詩についてですが、あの子からの返事を期待しないでください。まだ『難波津』の歌さえも満足に続けて書けないのですから、仕方ありません。彼女の代わりに私から一言を言わせてください。</p> <p>《嵐が吹けば散ってしまう桜 その散らないほんの一時だけ 心をとめられたのは ほんの気まぐれでは》</p> <p>私は本当に当惑しています」</p>	<p>翌日、僧都にお手紙を送り、それとなく自分の気持ちを伝えた。尼には次のように書いた。『私の願いを聞き入れる様子ではなかったので、思っている事を素直に伝えなかったのです。私の言葉から本当の気持ちを察していただければ嬉しいです。』手紙の中に、小さく結んで：</p> <p>山桜の面影はわたしから離れません 心のすべてをそちらに置いてきたはずなのに 夜中に吹く風を聞いて、心配になりました』</p> <p>言うまでもなく、筆跡がとても美しく、少し無造作に包まれた手紙もとても上品で、年配の尼と一緒にいる女房には素晴らしく見えた。</p> <p>『何てお返事すればいいのかしら。困ったものです』と尼が困っていた。『あなたの言葉を軽く流しましたが、わざわざ手紙までいただいて何を返事すればいいかわかりません。まだ幼くて、『難波津』をさえ、ちゃんと書けませんので、彼女からの返事は期待しないでください。しかし、</p> <p>激しい山風が吹いて散ってしまう前の山桜の花を人目で見ただけで こんなに心が奪われたなんて</p> <p>ますます気がかりです』。</p>
<p>60 僧都からの返事を残念に思った光源氏は、惟光を使者として遣わす</p>	<p>僧都の返事も大体同じような内容になっていた。源氏の君がとても残念に思って、二・三日して、惟光を呼んで、尼当ての手紙を渡し、少納言の乳母からできるだけの情報を聞き出すように頼んだ。</p> <p>「何故こんなに気にするのだろうか」と惟光が思った。彼はあの子を見たのだが、美しいと思った反面、やはり幼い子供という印象を持った。源氏の君が考えていることが時々本当に不可解だ！今度は何を企んでいるのだろうか。</p>	<p>僧都の返事も同じようだったので、残念に思って、二、三日経って、惟光をお使いに行かせた。「少納言の乳母という人がいるはずだ。その人を尋ねて、詳しく相談してください」『いつも以上に感心を示しているな。あれほど子供じみた様子だったのに』と女の子の様子を思い出しながら、惟光はおかしく思った。</p>
<p>61 惟光は少納言の乳母に面会するものの、周囲の人々から警戒される</p>	<p>僧都はわざわざ大事な人を使いを送るまで手紙を届かせたのをみて驚いた。手紙を渡してから惟光は乳母を探した。源氏の君が言ったことを彼女に伝えた後、源氏の君について少し説明をした。彼が話すのが好きで、話しながらいろいろなことを思い出しては説明し、中々話が終わらない様子だった。その結果、やはり少納言も源氏の君が何故あんな幼い子に興味を示しているかをさらにわからなくなった。尼に宛てた手紙は心がこもっていた。源氏の君が女の子の書いたものを見たいと書いていた。前回と同じように詩を入れていた。</p> <p>《山の泉の岩から聞いたのでしょうか 私の気持ちは本気ではないということ》</p> <p>それに対して尼が</p> <p>《誰かが汲んでみて 後悔をしているかもしれない 同じようなことかどうかを影が教えてくれるでしょう》。</p> <p>その詩と一緒に惟光が同じような内容の伝言を預かり、そして尼は体調が良くなって都に行く機会があれば、そのことについて源氏の君と話す約束をした。それを聞いた源氏の君がもどかしく思い始めた。</p>	<p>僧都はお使いが来たことを大層に喜んだ。惟光が少納言と面会ができ、源氏の君が考えていることを話した。彼はとても話が上手くて、その言葉に説得力があったが、それでもみんなが無理な歳なのに、どのようなことを考えているのかわからず困惑していた。今回の手紙も注意深く用意されて、以前と同じように、女の子に宛てたメッセージが入っていた。</p> <p>『貴方が書いた文章が見たいです。字と字の間に隔たりがあって、筆跡が完璧ではなくてもやはり見たいです。</p> <p>浅香山のように浅い気持ちで思っているのではないのに どうしてわたしからかけ離れているのでしょうか</p> <p>水を汲んでから後悔すると言われていた 源がその面影を留めるには浅すぎるかれです</p> <p>と尼が返事をした。惟光からの報告も同じような内容だった。病気が快復して、平安京に戻ったら改めて連絡すると少納言が言っていたそうだが、その言葉を聞いてなおさら待ち遠しい気持ちになった。</p>

<p>62 光源氏は王命婦の手引きで、病気で里邸に退出中の藤壺と密通する</p>	<p>同じ時期に藤壺の宮は病気になって、宮殿から離れて暮らしていた。心配して嘆いている帝の様子を見て、源氏の君がとて気の毒に思った。しかし、自分にとってそれがまたのない機会だった。一日中焦っていて、どこにも出かへず、宮殿にいても家にいてもそのことばかり思って、人と会うような状態ではなかった。やっと夜になって、王命婦を説得して、藤壺の宮に伝言を届かせるように頼んだ。彼女は、二人のやり取りがとて危ないと思いつつも、源氏の君の希望に満ち溢れた表情をみて、断ることが出来なかった。姫にとって、源氏の君との間にあったことがやましく思われて、それを思い出すだけでつらかった。もう二度と同じことをしないと決めていた。</p> <p>彼と会ったときに、冷たい態度を取ったが、それでも美しく見えた。彼の気持ちを読んだかのように、より冷たくした。源氏の君も、彼女に何かの欠点を見つけて、忘れることが出来たらいいのにと心の中に願っていた。</p> <p>その後は何が起こったかを詳しく話す必要があるまい。夜はあつという間に過ぎた。彼は</p> <p>《やっと会えたので 今夜見た夢と一緒に私たちも消えればいいのに》</p> <p>という詩を彼女の耳に囁いた。しかし、彼女は罪悪感で心がいっぱい</p> <p>《永久の暗闇の中に隠れたとして 私の恥が世間に知れ渡るでしょう》</p> <p>と言った。そして、彼女がそこまで思い悩みわけがあったと源氏の君が知ることになった。源氏の君が帰ったときに、王命婦が彼の衣服や他の物を集めて持って行った。</p>	<p>藤壺は体調が悪く、実家に戻っていた。心配していた帝のことが気になってはいたが、せめてこのような機会に会えると思って、どの女性のところにも行かず、宮殿にいるときも、二条の屋敷にいるときも、昼間はぼうっと物思いに沈んで、夕暮れになると王命婦(19)を通じて彼女のところに行こうとしていた。どのように手引きをしたのだろうか、一瞬だけ会うことができたが、現実だと思えないほどだった。藤壺は二人の間に起こった許しがたい出来事を一刻も忘れるがなく、思い出すだけでも苦しく、もう二度と彼に会わないと決めていたのだが、とても情けなくて、ひどく辛そうな様子でありながらも、距離を置こうとしても優しくいじらしくて、やはり普通の女の人と違って、何で欠点をつも見つけられないのだろうか、と辛くまで思っていた。自分の思いを彼女に伝えることがいつかできるのだろうか。そのために、日の出を知らない鞍馬の山に泊まりたいところだが、あいくの夏の短夜なので、情けなく、かえって辛い逢瀬である。</p> <p>夢が現実になる夜はもうないであろう だったら夢の中にそのまま消えてしまいたい</p> <p>と彼の涙に心を打たれた彼女が次のように答えた。</p> <p>世間はずっとこの話を語り続けるだろうか 目覚めることのない、この上なく辛い夢の中で消えたとしても</p> <p>彼女がひどく悩むのもっともであって、彼がその様子を見て苦しんでいた。命婦の君が源氏の君の服を撮り集めて持っていった。</p>
<p>63 光源氏は邸に帰った後、藤壺と密通したことを思い悩んで泣き臥す</p>	<p>一日中横たわって、苦しんでいた。手紙を送ったが、開けられずま戻ってきた。そのようなことが前もあったのだが、今回は耐えられず、二・三日ぐらい苦しんで起き上がれずにいる。その間に、帝が心配して何に悩んでいるかを聞いてくると恐ろしく思った。</p>	<p>屋敷に帰ってからというものの絶えず涙をながし続けた。彼女は手紙すら見てくれなかったと言われたときに、いつものことでありながらも、宮殿にも行かずに、二、三日間引き籠もってしまい、また帝が彼を心配していることも恐ろしいばかりに思う。</p>
<p>64 藤壺の懐妊という密通の結末を、王命婦はあまりに嘆かわしく思う</p>	<p>藤壺の宮も、自分に起こった悲劇を嘆き、日に日に健康状態が悪化していった。宮殿から毎日のようにお使いが行き来をし、彼女が早く参内するように言っていた。確かにに気分がいつもと違っているのはどうしたことかと、ひそかに思い当たることがあるので、自分がどうなるのであろうと思いつ悩んでいた。暑くなったときに、起き上がることもできないでいた。もう三か月が経ち、状況がはっきりとわかるようになった。もうすぐみんなが知ってあれこれ詮索するところだった。起こったことが恐ろしく思う。彼女の抱えている秘密を知らずに、周りの人がみんな何故帝に知らせていないのか不思議に思っていた。みんながあれこれ思案をしていたが、本当のことを知っているのは姫だけだったのである。王命婦と乳母は髪をセットやお風呂のお手伝いをしていたので、藤壺の宮の状況を誰よりも早く気づいて、少し驚いた。しかし、王命婦はそれについて話すつもりはなかった。やはり自分が手引きをした密通が原因なのではないかと思わずにいられなかった。帝には、藤壺の宮の具合が悪かったので、最初から妊娠が原因というのを特定できなかったと報告された。みんながその説明で納得した。帝は一所懸命世話を焼き、お見舞いの使者が頻りに訪れて、状況について把握していたにも関わらず、ひどく心配していた。</p>	<p>藤壺も日に日に悲しくなり、早く参内するように促進されても中々決心がつかない。みんなはまだ知らないうちに、気分の悪さの原因を思い当たって、今後のことについてしか考えられず悩んでばかりいた。暑い季節になって起き上がれなくなった。三ヶ月になる、とても良く分かるようになって、周りの女房がさすがに気づきはじめて、自分の運命をより重く感じられた。女房たちが、なぜまだ帝にお知らせをしていないかが不思議に思っていたが、彼女しか知らない事情があった。お風呂などにも身近に世話をしている、彼女の様子について誰よりも知っていた王命婦や乳母の娘などは、変だと思っていたが、口に出すわけにも行かず、やはり逃れられなかった運命だと王命婦が可哀想に思う。帝に対しては、何かの悪い恩物のせいで、最初に妊娠のことがわからなかったというふうには伝えられた。みんながそれを信じきっていた。ますます心配して、帝は今まで以上にお使いを行かせたが、藤壺はさらに恐ろしく、物思いの休まる時もない。</p>
<p>65 ただ事ではない異様な夢を見た光源氏はわが身に起こる運命を知る</p>	<p>源氏の君はとて恐ろしく異様な夢をみた。夢占いをする者と呼んだが、誰もその夢の意味が分からなかった。所々判読できないところがあった、一つのことが明らかだった。誰かがしてはいけないことをしたので、気をつける必要があった。</p> <p>「私の夢ではない」</p> <p>と煩わしく思った源氏の君が言い</p> <p>「人の代わりに相談しているのです」</p> <p>してはいけないことが何だったかと考えていたところで、姫のことを知った。夢の意味はそれだったのか！すぐに彼女に宛てた長い手紙を送り、自分の罪の深さにつてや励ましの言葉を書いた。その手紙を届けたら姫がより苦しむと思った王命婦が拒否し、その反面彼女以外その手紙を預かる人がいなかった。そのときまでたまにはしか送ってこなかった言葉少ない伝言も完全に途絶えてしまった。</p>	<p>源氏の君も恐ろしく変な夢をみたが、夢解きをする者と呼んで、夢の意味について尋ねると、思いも寄らないことが起こるとの判断だった。</p> <p>「悪いことが起こる可能性もあって、気をつけたほうがいいです」</p> <p>と言われ、その言葉を聞いた源氏の君がひどく動揺し、</p> <p>「自分の夢ではない、他の方の夢の話です。この夢が実現するまで、誰にも話さないでください」と言って、心の中では夢の意味について考えをめぐらしていると、藤壺のことを知ることになった。『あの夢はもしかしたらこのようなことだったのか』と思いながら、ますます熱心な言葉で彼女にもう一度会えるように頼んだが、命婦も、状況のことを考えるだけで恐ろしく、お手伝いできないでいた。ほんの一行の返事が稀にあったものの、それもすっかり絶えてしまった。</p>

<p>66 七月になり、宮中に帰参した藤壺へ桐壺の帝の寵愛はいっそう増す</p>	<p>七月になって、藤壺の宮が参内した。彼女が戻って帝がこの上になくうれしく、ますます彼女に愛情を注いだ。藤壺の宮は少しふっくらして、顔が青白くやつれていたが、ますます綺麗になっているように見えた。昔と同じように、暇時間をすべて彼女と一緒に過ごしていた。この時期にいろいろ催しが開催されて、源氏の君の参加が必要で、ときに琴や笛の演奏をしたり、ときに違うことをして帝の手伝いをしていた。そのとき、源氏の君がひたすら自分の気持ちを隠そうとしていたが、堪え切れなくなることを恐れていた。その一方、藤壺の宮にとって彼の顔を見ること自体が耐え難かった。</p>	<p>藤壺は7月になって参内した。帝の愛情は言葉にできないくらい深かった。少しふっくらになって、苦しうだったが、それでも彼女は依然として美しかった。以前と同じように、帝は明け暮れ彼女のそばに時間を過ごし、管弦の遊びに最適な季節の秋になっていた。源氏の君も暇のないくらい琴や笛の演奏に呼ばれていた。源氏の君は極力自分の気持ちを抑えようとしていたが、それでも我慢しきれなくて、気持ちが外に現れ出たとき、藤壺もそれを察知し、さすがに忘れられない出来事をあれこれ思い出して、悩み続けていた。</p>
<p>67 光源氏は六条京極から帰る途中に、帰京して療養中の尼君を見舞う</p>	<p>尼の体調が良くなり、今は都に暮らしていた。源氏の君は彼女の住所を知り、ときどき手紙を送っていたが、(当然ながら)前にももらった返事と同じような内容の返事が来るばかりだった。ここ何か月かは、女の子を引き取る気持ちがなくなることなく、むしろ強くなる一方だったが、何もできず月日が過ぎるだけだった。秋の終わり頃、とても心細く嘆いていた。月の美しい夜で、あまり気が進まなかったが、忍んで通う所に出かけると、雨が降り始めた。宮殿から出て、行き先が六条京極のあたりで、雨の中少し遠く感じた。迷っているときに、古い木に囲まれた荒れた家があると気づいた。その暗いところは誰の住まいなのかを聞いて、いつも供をしている惟光が「按察大納言の家です。少し前にそこを訪れたが、尼の体調がとても悪く、周りに何が起っているかが分からないほどです」と言った。「何でそれをもっと早く言ってくれなかったのですか」と源氏の君が言い「知っていたらお見舞いに行ったのに。今すぐ状況を聞いてきて」惟光はすぐに誰を行かせて、源氏の君がわざわざ来たということと言わせた。供が家に入って、源氏の君が様子を知りたいだけでなく、彼本人が外で待っていると云ったら、みんなが大層に驚いた。尼はこの頃すっかり弱まり、とても人と会うような状態ではないと女房たちが言った。しかし、そのような立派な方を帰らせるわけにもいかず、慌てて南の間を片付けて、</p>	<p>街の北方にある山に住んでいる尼は体調が快復し、戻ってきた。源氏の君は彼女の住まいを調べて、時々手紙を送っていた。当然ながら、返事の内容は今までと変わらなかったのだが、ここ何ヶ月は、以前にも増す物思いによって、他のことを考える暇もなく過ぎていった。秋が終わろうとしている頃、彼はいつもにも増して寂しく感じていた。月がとても美しい夜に、以前秘密裏会っていた人のところに行こうと思いついて、出たときに突然雨が降り始めたのだが、それがその季節によくある夕立だった。行き先は街の東方面にある六条京極辺りで、宮殿から出発をしたので、そこまで行くのは遠すぎるように感じはじめたとき、途中で荒れた屋敷で古い木が鬱蒼していたところを見かけた。いつも一緒だった惟光は「故按察大納言の家です」と彼に知らせ、「理由は忘れたが、数日前にたまたまそちらに訪問をしました」が、尼はひどく弱り、もうどうしようもないと言われました。「お気の毒なことです。お見舞いすべきでした。どうしても前に教えてくれなかったのですか。入って状況を調べてきて」と言ったので、惟光は人を呼んでお使いに行かせた。源氏の君がわざわざこのように立ち寄った旨を言われたのだが、入って行って「源氏の君がお見舞いに来ました」と言うと、女房はみんな驚き、「申し訳ございませんが、ここ数日尼がひどく弱まり、とても人と会うような状況ではないです」という。しかし、そうはいつでも、そんな立派な客を断るわけにも行かず、南に面している部屋を用意して彼を迎えた。</p>
<p>68 病床の尼君は、紫の上が成長した暁には光源氏に託すことを決める</p>	<p>「大変見苦しい所をお見せして申し訳ございません。いらっしゃると知らなかったで、まともにも用意が出来ず、お許しください」と言いながら、そこに源氏の君を案内した。源氏の君は確かにそのような所に案内されるのは慣れていなかった。「前々から訪問しようと思っていたのですが、いつも素っ気ない返事ばかりいただいていたので、つい遠慮してしまったのです。病気がこんなに重くなっていると知っていたら…」と彼が言った。「今は気が確かだが、いつまた意識が朦朧するのかわかりません。命が終わろうとしているときに立ち寄っていただいても感謝しています。直接話が出来なくて残念に思っています。前に話したことについて、もし気持ちが変わってなければ、時期が来たらあの子をご自分の家にいる女房達の仲間にしてやってください。彼女のことが心残り、この世とそんな強い縁を残したまま死んだら、あちらの世界には行けないような気がします」</p>	<p>「ちゃんと片付いてなくて本当に申し訳ございませんが、せめてお礼だけでもとのことで。突然の訪問ということもあり、何の用意もなく、不便なところにお招きして恐縮です」と言う。正直にいうと、普段彼が通っている所とは違って、前々から訪問しようと思っていたのですが、そっけない返事ばかりでしたので、遠慮していました。病気が悪化したこと全然知らなくて、申し訳ございません」と話した。「気分が優れないのは前からのことで、いよいよ最期が近いような気がします。来ていただいたお礼を言いたいのですが、お会いするのは難しいです」と尼が女房を通じて言って、「この前の申し出に関していうと、女の子がもう少し大人になって、まだお気持ちが変わらないければ、彼女をそばに置いてください。彼女をひとりに残して行くのは仏道の妨げになるように思います」</p>

<p>69 光源氏は紫の上の無邪気な声を聞き清純な彼女にいつそうひかれる</p>	<p>尼の病床すぐ近い所なので、少納言に伝言を言っている彼女の心細そうな声がとぎれとぎれに聞こえていた。その後誰かにこう言っているのを聞こえた「ここまで来ていただいて、本当に親切なお方です。あの子がお礼を言えればいいのに…」 「親切だからではないです」と源氏の君が少納言に言った。 「こんなに言い続けるのはとても本気な気持ちを持っているからです。あの女の子を初めて見た瞬間から愛おしく思い、その愛情がこの世の関係だと思えないぐらい、どんどん深くなった。わがままだと思うかもしれませんが、どうしても彼女の声が聞きたいです。帰る前にこちらに来てさせてください」 「あの子はもう寝ていて、こんな困ったことになっているのはまったく知らない」と少納言が言った。しかし、彼女が話している間に女房たちの部屋から音が聞こえて、そして急に声が聞こえてきた。 「おばあさん！おばあさん！山の家に遊びに来ていた源氏の君が来ているの。ここに入れて話をすれば？」 と女の子が言うのを、女房たちは決まりが悪い思いがして「しゃべらないで！」と言った。「でもおばあさんが、彼と会ったときに体調が良くなったと言っていたもん。私は正しい！」それを聞いた源氏の君がとても喜んだが、女房たちが聞こえなかったふりして困りきっていた。 源氏の君はお見舞いの言葉だけ言って、家に帰ることにした。帰っているときに、あの子の態度はまるで子供のように思った。しかし、彼女を育てるのはどんなに幸せだろう！</p>	<p>尼がすぐ近くにいたので、源氏の君が彼女の苦しそうな声が聞こえて、「とても嬉しいお言葉です。あの女の子がちゃんとお礼を言えるような年齢だったらいいのに…」 と年配の尼が女房に話しながら言った。彼はその言葉に心を打たれ「気まぐれな気持ちでそんな事をお願いすると思いますか。初めて会った時から感じる事があって、不思議なまでに、この世の縁だけとは思われません」 などと言った。 「彼女の可愛い声だけでも聞かせてください。お願いします」と付け加えて、「彼女は何も知らずもう寝てしまいました」 と女房が言ったが、ちょうどそのときに向こうの方から声が聞こえてきた。「おばあさま、先日の寺に来ていた源氏の君さまが来ているそうですね。どうして会わないのですか。」 女房たちが決まり悪そうで、静かにするように彼女に言うが、「何で？『会ったら気分が良くなる』とおばあさまが言っていたわ。」 と彼女が利口そうに話つづけた。 源氏の君がうっとりして聞いていたが、女房たちが当惑して、困っている様子だったので、聞いてないふりして、行き届いたお見舞いを言ってから、帰った。あの女の振る舞いは確かに子供っぽかったけど、彼女の世話をし、理想な人に育てるのは楽しそうだとも思った。</p>
<p>70 翌日、光源氏は尼君への見舞いとともに紫の上へも結び文をおくる</p>	<p>次の日はまた訪問をした。いつものように小さい結び文に次のような詩を書いた 《若い鶴の一声を聞いてから 私の船が葦の間をさまよってばかり》 女の子に宛てた詩だったので、字を大きく、わざと子供っぽく書いたのだが、とても綺麗だったので、「習字の手本のノートに入れよう」と女房たちが言った。 少納言が返事をした。 《尼は今日一日ももたないような状態で、山寺に移ることにしました。もう出発しています。間に合えば、あなたが来たことをお伝えしておきます》 その手紙を読んだときに、とても悲しく思った。 秋の夕べは気持ちが落ち着かない様子だった。別の心配事で頭がいっぱいだったが、しかしやはりあの方と血がつながっていたので、そのときにこそあの子をそばに置きたくて仕方がなかった。あの子を初めてみたときのことを思い出し、《死ぬに死にきれない》という尼の言葉を頭の中に反復した。綺麗になるでしょう。思うほど綺麗にならない可能性もあるが、賭けに出る価値がある。次の詩を詠んだ 《いつになったら 手に摘んでみる事が出来るのだろうか あの紫草の根に繋がっている 野辺の若草を》</p>	<p>翌日は手紙を送り、いつものように、小さく結んだ紙を入れた。 若い鶴の声を聞いてから 葦の間を歩き悩む舟は行き先が定まらず 同じ人の所に行き来し続ける わざと可愛らしく書かれた字がとても綺麗で、女房たちが感心してそのままお手本にだと言っていました。少納言が返事をした。『お見舞いをいただいた方は今日でも最期を迎えるような状態なので、山の寺に移るところですが、優しくしていただいたことのお礼は、あの世からでもお返事をさせていただきます』と手紙に書いてあったが、源氏の君がそれを読んでとても悲しくなった。 秋の夜に、いつもにも増して、心の休まる間もなく自分の苦しい恋のことについて考えこみ、そばにあの方とゆかりのある女の子をおいておきたい気持ちが次第に強くなり、『露が消えきれない』という尼が以前言った言葉を思い出し、焦りを感じていたが、同時に実際に会ってみたら思い通りの結果にならないかもしれないとも思い、不安だった。 自分の手で早く摘みたい 紫草にゆかりのある野辺の若草を</p>
<p>71 十月に朱雀院の行幸が予定され、舞人は練習など多忙な日々を送る</p>	<p>十月に帝は紅葉を見に朱雀院に行く予定だった。舞人などには、高貴な家の子息たちだと決まっていた。帝自ら上達部、殿上人などでも その方面に優れた人々を選んで、親王たちや大臣をはじめとして、それぞれが技芸の練習のため、多忙だった。</p>	<p>10月に帝が朱雀院へ行くことが決まっていた。舞人などを、高貴な家柄の子弟や、上達部、殿上人たちなどの、ダンスで優れている人々が選ばれ、親王たちが寸暇を惜しまず練習していた。</p>
<p>72 尼君の死去という知らせが届き光源氏は母更衣との死別を思い出す</p>	<p>源氏の君は久しく、山にいる人たちにご無沙汰だったと思い出した。すぐに特別な使者をお使いに行かせて、僧都からの次のような返事が来た。 《先月の20日に尼がとうとう亡くなりました。人間の宿命とはいえ、とても悲しく思います》 などと書いてあって、源氏の君はその手紙を読んで、人の人生のはかなさについて考えた。尼が心配していたあの子は今後どうなるのだろうか。源氏の君は自分の母親が死んだときにことをはっきり覚えていなかったが、おぼろげながらその気持ちを思い出し、心を込めたメッセージを書くことができた。少納言は少し大げさな返事をした。</p>	<p>そのことで忙しかった源氏の君が、しばらく山にいる尼の具合について訪ねていなかったことに気づいたが、お使いを行かせたときに、僧都から返事があった。 「先月の20日のころに亡くなりまして、それが人間の宿命だと分かりながらも悲しいものです」 と書いてあったが、世の中のもろさと悲しさを感じさせられたが、その反面気にかけていた女の子が今どうしているであろうと思わずにはいられなかった。子供心でも、一人ぼっちになっていることを悲しんでいるのだろうか。母親を亡くしたときの、曖昧な記憶を思い出しながら、丁寧な返事をした。少納言の乳母が、心得のある返礼を送った。</p>

<p>73 夜、光源氏は自分から、忌みの期間が終わった紫の上の邸を訪れる</p>	<p>忌中が過ぎて、その女の子が都に戻った。それを知った源氏の君は、少し時間が経つのを待って、晴れた静かな夜に、彼女がいる家を訪れた。とても不気味な荒れはてた所で、人気も少ないので、若い子が憂鬱だろうと思われた。前回案内された同じ部屋に通された。少納言が尼の臨終の様子などを泣きながら話し、それを聞いた源氏の君は妙に悲しくなった。「若い姫を父親の所に行かせるつもりだったのですが、あの子の母親がとてもいじめられていたことを思い出してしまいました。周りの気持ちが分からない赤ちゃんだったらまだよかったのですが、意地悪をしてしまう知らない子供たちがいるところに行かせるのは大きすぎて。祖母もずっと同じことを言っていました。あなたは今までとても親切でしたし、先のことを考えずに、しばらくの間だけでもあなたのところにおいでいただければどんなに楽でしょう。もう少し年齢が上だったら、是非ともお付き合いをしていただければと思います。しかし、育て方のせい、本当の年齢より、さらに幼くみえるぐらいです。」</p>	<p>忌みが明けて、みんなが京都の邸に戻ったと聞き、数日経ってから、用事がなかった夜に自分でそちらを尋ねた。誰も住んでいないかのように荒れているところで、女の子が怖いだろうと思った。外の部屋に通されて、少納言がその時までの出来事を涙流しながら話し、それを聞いた源氏の君が耐え切れず袖を涙で濡らした。「お父さんのところに行かせようという話もあったけれど、母親がとても苦しんだ場所だし、完全に子供ではないが、世の中の理解がまだなさすぎるという難しい年頃ですし、大勢の女の子がいる中に、いじめられるのではないかと亡くなった尼も始終心配していて、実際その心配を裏付けることが沢山あった。このような状況なので、例え軽い気持ちの故だったとしても、あなたのありがたいお言葉は、後の事を考えずに、とても嬉しく思わなければなりません、全く相応しい年頃ではないし、年のわりには幼くてちゃんとした教育も受けていないです」と彼女が言った。</p>
<p>74 光源氏は少納言の乳母に紫の上への気持ちを伝えて歌を詠み交わす</p>	<p>「幼いだということを繰り返していうのをよしてください。若くて無防備だからこそ気にかけているわけで、そして（あなたにはすべて話すつもりです）私たちの魂はより深い何かで結ばれていると思います。直接私たちの決めたことを伝えたい」と言い、 ≪葦の若芽の生える 海辺に近づく波のように 私も進んだと思ったら後ずさりになってしまう≫ というような意味のする詩を詠んだ。 「彼女が驚くと思いますか」 と付け足した。少納言は女の子を呼ぶと言って、その彼を忠告するという意味で、詩に返事をした。その返事に彼の本当の目的がわかるまで、 ≪玉藻のように波に翻弄される≫ つもりはないというような内容だった。 「彼女に会わせないで帰すわけではないけれど」 と言って、その言いぐさは馴れ馴れしくて源氏の君はいい気がしなかった。 <岡を超えるのは何故そんなに難しいか> という曲を口ずさんで、座って待っている源氏の君の見た目が美しすぎて、彼を見ていた女房たちはしばらく忘れることができなかった。</p>	<p>「どうしてこのように繰り返し伝えている気持ちを信じてくれないのでしょうか。その幼い様子もまた可愛く思っているし、宿縁が特別なものと、わたしの心には自然と思えてくるのです。やはり、人を介してではなく、直接話したい。</p> <p>和歌の浦に玉藻が葦の茂みに隠れているが 一度近づいた波が立ち帰ることはしません</p> <p>失礼でしょう」と言ったが、少納言が「大変申し訳ございません…</p> <p>和歌の浦に寄せる波に身を任せる玉藻が 相手の気持ちをよく確かめせずに従うことは頼りないことです</p> <p>それはできません。」その巧妙な返事がその内容を忘れさせるぐらいのものだった。『どうしてバリアを乗り越えられないのであろうか…』と彼が嘔き、女房達の心がその言葉に強く打たれた。</p>
<p>75 尼君を恋い慕って泣く紫の上は、訪問した光源氏を父と勘違いする</p>	<p>女の子は祖母の死を嘆き、横になっていた。 「大きなマントを持った人が遊びに来ました。父親かしら」 と一緒にいた一人の女房が言った。女の子がすぐ起き上がって 「少納言、マントの人はどこですか。父ですか。」 と言いながら走って部屋に入った。</p>	<p>女の子は、祖母を慕っていたので泣き臥していたが、遊び相手から宮殿の服を着た人がいると聞き、起き上がった。 「お父さんかもしれません。」 「少納言、その人はどこですか。お父さんですか」 と言って、近づいて来るお声が、とてもかわいらしい。</p>
<p>76 少納言の乳母は紫の上を年よりも幼い様子であると光源氏に伝える</p>	<p>「いいえ、父親ではありません。あなたに愛されたいと思っている別の人です。ここへおいで」と源氏の君が言った。みんなの話している内容から、源氏の君は立派な人だと彼女もわかっていて、<マントの人>と呼んでしまったので、彼が怒っているに違いないと思って、乳母の所に直行して、小さな声で「眠いです」と言った。 「遠慮することなんてない。眠かったら、膝の上に眠ればいい。私と話したくないの？」 「だから言いましたでしょう。こんなふうはまだほんの子供で」と少納言が言い、女の子を彼に近づかせた。彼女は源氏の君の隣にぼんやりと座り込み、手で自分の髪を毛を触って、波のように服にかけるようにして、または肩の高さ辺りに、髪を端をつかんだりしていた。</p>	<p>「お父さんではないのですが、他人でもないです。こちらへおいで」と源氏の君が言ったが、地位の高い方だと、子供心にも聞き分けて、まずいことを言ってしまったと思って、乳母の側に寄って、 「行きましょう。眠いから」 「今さら、どうして逃げ隠れするでしょう。わたしの膝の上で休めばいい。もう少し近くへ来て」と源氏の君がいうと、乳母が「この年ですから、まだ世間の常識を全く知らないのです」と言って、女の子を彼がいる方に少し押した。女の子がそれに従って近づいてきて、二人の間に敷いてあったカーテンのところまで行ったが、彼が手を差し入れて、柔らかい服の上に、髪がつやつやと掛かって、その美しさが触るだけで伝わってきた。</p>
<p>77 幼い紫の上の手を強引にとらえる光源氏に少納言の乳母は困惑する</p>	<p>源氏の君が彼女の手を握ったが、女の子が、知らない人に触られるのにびっくりして「寝ようと言っているのに」と叫び、手をほどいて、女の部屋に向かって走り出した。源氏の君が女の子を呼びかけてついて行った。 「愛おしい人よ、逃げないで！祖母がいなくなって今、私を愛して」 「まあ、困ってしまいます。とんでもないことを。あの小さい子になって残酷なことをいうのですか！言えは愛してくれるとでも思っているのですか」 と狼狽しながら少納言が言った。 「今は足りないかもしれませんが。しかし、私のように心を込めて接すると妙な効果があるのです」</p>	<p>手を握ろうとしたが、よその人がそんなに近くにいるのが恐ろしくなって、「眠いと言っているのに」 と言って奥に入っていた。彼が後を追って、御簾の中に入って 「これから私が世話をしあげます。嫌がらないでください。」 と源氏の君が言った。乳母が 「よしてください。幼すぎて何を言ってもわからないです」 と困った様子で言った。 「年齢など関係ありません。世間並ではない私の愛情を理解してほしいだけです」</p>

<p>78 あられが降り風が激しく吹く夜、光源氏は紫の上の御帳の中に入る</p>	<p>雹が降っていた。荒々しい夜に、その暗くてぞっとするような家で女の子を一人にするのが考えられなくて、それを彼女の隣にいる口実に使った。 「格子を下ろさない」と叫び、 「今夜は本当に恐ろしいので、私が番人になってあげましょう。みんな近くに来てください」と言いながら、当然なことのよう、女の子を抱き上げて、寝処に運んだ。女房たちがびっくり仰天で、身動きもできず、</p>	<p>雹が降り、風が強く吹き、本当に恐ろしい夜でした。 『このような頼りないところでどうやって過ごしているのでしょうか』と涙が込み上げてきて、その場を離れることができない。 「格子を下ろしてください。恐ろしい夜なので、宿直人となって彼女を守ります。女房たちの近くに来てください」 と言って、とても物馴れた態度で御帳の内側に入ったときに、女房たちが大変驚き、</p>
<p>79 少納言の乳母がため息をつく中、光源氏は紫の上に一晩中寄り添う</p>	<p>その一方少納言は、不安で気が気でないが、事を荒立てて騒ぎ立てるわけにもいかないの、ため息をつきながら隅に座ったままにいた。最初、女の子はとても恐ろしく思った。源氏の君の目的がわからず、体が震えていた。源氏の君のとても美しい肌に触れた瞬間も恐ろしく鳥肌が立つ程だった。彼は気づいたが、それでも優しく服を脱がして、寝かせた。そして、彼女が怖がっていると分かりながらも、優しく話しかけた。 「たくさんの絵、人形やおもちゃがいっぱいある所に、いつか一緒にいかない？」 と気に入りそうなことを話し続けて、少し打ち解けている様子だった。それでもしばらくは落ち着くことができず、中々寝付かない。外は嵐が続いていた。 「彼が泊まってくれなかったか、どうすれば良かったかしら。いてくれなかったら本当に怖かったと思います。あの子との間の年齢差がこんなになかったら良かったのに」と女房たちが囁き合った。 少納言まで彼を信じきれず、一瞬たりとも離れたりしなかった。</p>	<p>乳母は大抵許されない行動だと思ったが、何も言えず、ただ溜息をついただけだった。女の子は何か起こっているのであろうとわからないまま震え始めた。鳥肌が立っているのに気付き、源氏の君が肌着だけで彼女を包み込んで、自分の行動が常識的ではないとわかりながらも、優しく囁いた 「一緒に来てください。遊べる美しい絵と人形がたくさんあります」 と、彼女が興味を持ちそうなことについて話す様子がとても優しいので、子供心にも安心しはじめたが、とは言っても、眠れなくて、何度も寝かえりを打った。</p>
<p>80 女房たちは、悪天候の中での光源氏の訪問が心細さを慰めたと話す</p>	<p>少しずつ風が弱くなり始めた。夜が明けるところだったが、源氏の君がその時間に帰っても誰も不思議に思わないだろう。 「とても懐いてしまって、彼女が寂しがっている今こそ離れることができないでいる。いつも会える所に住ませよう。このような恐ろしい所に良く住めると思います」</p>	<p>一晩中、風が吹き続けた。『彼がいなければ、どんなに心細かったでしょう』と女房たちが囁きあっている。『この子の年齢が違ってればよかったのに…』乳母は心配で、すぐ近くにいた。風が少し止んだが、夜の深いうちに帰るのも、いかにも忍びに来たような感じに見えてならなかった。 「どんなに可愛くて、優しい子だとわかった今諦めることができません。毎日物思いをして暮らしている所に連れていきたい。ここにはいられないでしょう。怖がっていないのが不思議なぐらいです」</p>
<p>81 尼君の四十九日後に、兵部卿官は紫の上を邸に引き取る意向を示す</p>	<p>「父親は引き取りたいというようなことを言っていました」と少納言が言い、 「四十九日が過ぎてからと思っています」 「普通だったら、父親が世話をするのは当然だと思いますが、幼い時から別の人に育てられたので、父親と言っても、私同様に赤の他人です。最近知り合ったばかりですが、父親より愛していると自負しています」 と言って、女の子の髪を何度もなでて振り返りがちに部屋を出て行った。</p>	<p>「お父さんが迎えに来ると言っていたのですが、葬式の四十九日忌が過ぎてからかと思います」と乳母が言うと、彼は 「彼は素晴らしい方ですが、ずっと別々に暮らしていたので、私と同じように他人同然です。これから彼女を世話することになるけれど、わたしの深い愛情は父親以上でしょう」と言って、女の子の髪を撫でてから何度も振り向きながら出ていった。</p>
<p>82 紫の上と別れた後、光源氏はかつて通った女性の家の門を叩かせる</p>	<p>白くて厚い霧が立ち込めていて、草が霜で真っ白になっていた。それは恋の逢引だったらよかったのにと急に思って、源氏の君が寂しくなった。それで通り道は普通通っていたところがあると思出した。ドアを叩いたが、返事がなかった。良く通る声を持つ付き人に命令して、以下の歌を歌わせた。 《お姉さんの門の前に、霧がまだ世界の全てを闇に包んでいるにもかかわらず、留まらないわけにはいかない》 その歌を二回歌わせたところ、行儀のなっていない下仕えをドアに現れて、 《この場所を囲っている霧の花壇が本当に嫌なら 壊れた門ごときで 邪魔にならないはずです》 という詩を詠んで、すぐに中に引っ込んだ。源氏の君は待っていたが、それ以降誰もドアに現われる気配がなく、夜が明けた今、このまま家に帰るのはばかばかしいと思っても、仕方はない。</p>	<p>空はひどく霧が立ちこめて、地面が霜で真白になっていた。このような風景は本当の密会の帰りだったらよかったのにと少し何か物足りなく思った。そのときに、忍んで通っていた家とその道筋にあると気づき、門を叩かせたが、誰も出なかった。仕方なく、一緒にいた人の中から声の良い人に詩を朗読させた。 霧の中に迷っていても 明け方には 好きな人の家の前は素通りできない と、二回ほど歌わせたところ、その家に住む女性が地位の低いが品格のある仕え人を出した。 霧の立ちこめた家の前を通り過ぎるのが難しいのであれば 生い茂った草が造る門が大した妨げではないでしょうに と女の人が言い、その後は誰も出てこなかった。帰るのは悔しかったが、空が明るくなっていたのでそこで止まるのも恥ずかしく、邸へ帰った。</p>
<p>83 光源氏は紫の上のかわいらしい面影が恋しくて文を書き絵をおくる</p>	<p>自宅で長い間横たわっていて、女の子と交わした会話と彼女の可愛らしい仕草を思い出した。正午ぐらいに起きて、彼女宛の手紙を書き始めた。しかし、適切な言葉が思い浮かばず、何度か筆を動かそうとして置いてから、綺麗な絵画を送ることにした。</p>	<p>女の子のことを思い出しながら、笑顔で眠りに入った。起きたときにもう日が高く、手紙を書こうとしたら、ありふれた言葉を使いたくなくて、何度も筆を置いてあれこれ考えた。手紙と一緒にかわいらしい絵も一緒に届けさせた。</p>

<p>84 父兵部卿宮は少納言の乳母に、紫の上を引き取ることをうち明ける</p>	<p>前々から約束をしていたが、その日兵部卿王子は亡くなった尼の家を訪れた。その屋敷がますます荒れているように見えた。少人数でそこに住むのがどれだけ寂しいだろうか。周りを見回して、 「こんな所に、幼い女の子は一日たりとも住むわけにはいかないのです。場所もたっぷりあるので、連れて行きます」 そして少納言に向かって、 「あなたはそこの女房になればいいのです。遊べる子供たちがたくさんいるので、彼女も楽しいでしょう」 と言った。</p>	<p>その日に父親が女の子を訪ねた。数年前に比べるとすっかり荒れて、広くて古めかしくなった屋敷が、ますます淋しく、侘しく見えた。 『このような所には、どうして、少しの間でも幼い子供が過ごせるか。やはり住んでいる所に彼女を迎えよう。場所も十分にある。乳母にも部屋を与えて世話をしてもらおう。若い女の子たちもいるので、一緒に遊べば良い』</p>
<p>85 紫の上の着物がしおれているのを目にした兵部卿宮は、娘を憐れむ</p>	<p>王子は女の子を呼んで、その時に源氏の君が彼女を抱き上げたときに移った香りに気づいた。 「いい匂いだね。でも服は暗すぎないのか」 と言ったそばから、喪服だと思い、少し焦った。 「彼女をうちにもっと遊ばせて、家族の習慣に慣れてもらわなければならないと、祖母にもよく言っていたのだが。体も魂も丈夫ではない人と長年一緒にいさせるのはおかしいです。しかし、何らかの理由で気が進まなかったし、向こうも向こうで、彼女をあまり歓迎していない人がいて、今回もどこまでわかってくれることやら…」 「そのような状況でしたら、彼女が自立できるまで、別の所に移すのを止したほうが良いと思います」 と少納言が言った。</p>	<p>彼女を近くに呼んだが、彼女の服からまだほんのりの香りがしていた。『とてもいい匂いだが、しかし服がしわくちゃになっている』と、気の毒に思った。 「これまでは、病気の年寄と一緒にいるより、私の家に来てみんなと馴染むように何度も言っていたが、彼女が抵抗しているように見えて、家族の人も彼女が来るのをあまり面白く思っていないので、このようなときに移ってくるのもかわいそうです」 と言った。 「でしたら何故移すのでしょうか。心細くても、もう少しこちらに置いておけばいいではありませんか。もう少しこの世のことがわかるようになってから移したほうが良いでしょう」 と乳母が言った。</p>
<p>86 少納言の乳母の言葉と紫の上の様子に兵部卿宮はもらい泣きをする</p>	<p>女の子は悲しみに暮れて、何日も何も食べずにいたので、顔が大層やつれていたが、それでもなお美しかった。父親は彼女を優しく眺めて 「もうこれ以上泣かないでくれ。人が死ぬときは誰も何もできないので、その悲しみを耐えるしかないのだ。でもこれから良くなるのだ、僕が付いているから」 もう大分遅くなって、それ以上いられなかった。帰り際に、彼が世話するというのを聞かされてもちょっと安心した様子がなく、女の子がまた泣き出していた。王子も少し涙を流しながら、彼女を安心させるのに精を出した。 「悲しむことはない。今日か明日に迎えに行き、私の所に住ませるから」 と言いながら帰っていった。しかし、女の子は泣き止む気配がなかった。</p>	<p>「夜も昼も死んだ祖母のことで悲しみ、ほとんど何も食べていません」 確かに少し痩せたように見えたが、それがかえて美しく見えた。 「どうしてそんなに悲しむのでしょうか。もうこの世にいない方のことは仕方ありません。父親がついているのに…」 と言って、日が暮れると帰り仕度をしたが、女の子がとても心細く泣いていたので、彼も涙が込み上げてきて 「心配しないで、すぐ迎えにくるから」 と彼女を慰めるように、何度も繰り返して言った。 父親が帰ったあと、女の子が慰めようがなく泣き続けた。</p>
<p>87 紫の上は幼いながらも、自分の身の上と今後の事を思って涙を流す</p>	<p>まだそこまで考えられなかったので、将来のことについて心配していたわけではないのだが、長年ずっとそばにいた人を失ったので、悲しみが深かったのだった。幼い心ながらも、悲しすぎて遊ぶことができず、昼間は気を紛らわしているときがあったにしても、夜となるとひどく吹き込んでおり、少納言はいつまでそれが続くのかと思いつつ、彼女を慰めることができず、一緒に涙を流す。</p>	<p>将来のことを心配していたわけではないが、今までずっと世話をしてくれていた人が亡くなったと思うと悲しくて、子供心であるが、いつものように遊ぶことすらできず、昼間はなんとか気持ちを紛らわすことが出来ても、夜になると寂しくなって、乳母が慰めようがなく、一緒に泣いていた。</p>
<p>88 光源氏は宮中へ行く自分の代わりに、惟光を紫の上の屋敷に遣わす</p>	<p>そのちょっとあとに惟光が伝言をもって現れた。源氏の君はそちらに訪問する予定だったが、宮殿に行く用事ができてしまい、行けなくなったという。しかし、幼い女の子の状態が心配で情報が欲しいとのこと。メッセージを伝えてから、惟光は源氏の君が番人として派遣していた人を部屋に入らせた。 「おかしいではありませんか。源氏の君が派遣した人がここに泊まるのが普通だと思うかもしれませんが、父親が知っていたら、結婚している人を姫に近づかせたそばに仕えている私たちを責めるでしょう。何でそれを許したのかと絶対に言われます」 とそのあと女房たちに向かって 「番人たちについて王子に何にも言わないでください」 しかし、女の子はそれをなんとも思わないので、</p>	<p>源氏の君の邸から惟光がメッセージを持ってきた。自分自身行きたかったが、宮殿に行く用事が出来てしまい、その状況を考えて気がかりで、惟光を行かせたとのことだった。 『嗚呼、情けないことです。軽い気持ちだったとしても、最初からこの有様。父親が知っていたら、私たちが軽率だったと思うでしょう。お父さんには何も言わないでください』と女房たちが言ったが、女の子があまり興味を示さなかった。</p>
<p>89 少納言の乳母は、屋敷を訪問した惟光へ自分の考えと不安を訴える</p>	<p>少納言が困って、惟光にいろいろ悲しい話をして、 「きついつか二人が結ばれることになるでしょう。それは運命だとさえ思えます。ただ、しばらくはそんなことはないし、彼もそれを知っているはずですが。何が目的なのかはさっぱりわかりません。ちょうど今日父親に彼女のことを見張るように言われたばかりなのに。言われたときに、当時なんともないと思って源氏の君に許したことの数々を思い出して、申し訳なく思いました」 まだしゃべり終わっていないうちに、惟光が起こったこと以上のことを想像するのではないかと考えて、ひどく困って、黙り込んだ。彼女が心配するのも無理がなく、現に惟光は源氏の君が何をしたのかと考え納得がいかない様子でした。</p>	<p>乳母が惟光にそのときまでに起こった気の毒の出来事を話した。 「何年か経って、自分の運命を受け入れることになるでしょう。ただ今は、まったくありえない話だと私は思いますが、何故源氏の君がそんな常識はずれなことを言ったり、したりしているのがまことに理解できません。今日は父親が見えて、娘のことを頼まれて、軽率なことをしないように念を押されたので、なおさら源氏の君の気持ちが心配です」 と嘆いたが、惟光が何かを勧めるかもしれないと心配になって、それ以上話さなかった。彼もまた何が起こっているかがよくわからないでいた。</p>

<p>90 光源氏は惟光から父兵部卿宮が紫の上を引き取る予定であると聞く</p>	<p>惟光のレポートを聞いて、源氏の君は女の子を不憫に思い、すぐにでも彼女の所に飛んでいきたくて強く願っていた。しかし、訪問を重ねると誤解される可能性が高く、女の子の年齢を知らない人が噂をし始めるのではないかと心配していた。それより、自分の屋敷につれてきてもらってそばおいておいたほうがずっと簡単に思えた。源氏の君は一日中たくさんの手紙を書き、夜になると、女の子の家に惟光を送り込み、急用ができて、今夜も訪問できないという伝言を言わせた。少納言はそれをろくに相手にしない様子で、女の子の父親は次の日に娘を迎えることにしたので、今は忙しすぎて訪問どころではないと言った。「女房たちは、この荒れた古い家を出て、広々とした豪華なところに住むと考えるだけで嬉しくてたまらないです」質問しても、きちんと答えず、とても忙しそうにみえたので、惟光は帰ることにした。</p>	<p>邸に戻って、源氏の君にすべてを伝えたと、彼は涙が込み上げる思いでいたが、訪問するのは不適切だと思い、もしそちらに行ったことが知られたらとても軽率で風変わりなことをしていると思われる可能性があった。その女の子が彼の所に越してくる以外他にないと考えた。その日にいくつかの手紙を届けさせて、夜になると訪問できないことを許してほしいという伝言を惟光に伝えてお使いに行かせた。乳母の返事が素っ気なかった。「父親から、明日急に娘を迎えることになったので、とても忙しいです。荒れた所とはいえ、長年住み慣れた家を離れるのは心細くて、みんなも心が乱れています」と言っ、惟光をろくに相手もせず、縫い物で忙しい様子だったので、彼が帰っていった。</p>
<p>91 左大臣邸に来ている光源氏は惟光に紫の上を連れ出すことを命じる</p>	<p>源氏の君は大きい屋敷にいたのだが、相変わらず葵が言葉の一つも話してくれない。機嫌が悪くて、何気なくチェトラを引いて、 《この雨の夜に、何でこんなに早く田んぼや丘を走るのか》 という歌を口ずさんでいた。その曲の歌詞を葵に向けて、心を込めて歌っていた。ちょうどその時に、惟光が大きい屋敷に着いたのだが、すぐさま呼び出して、訪問の報告をさせる。惟光が話した内容は源氏の君を心配させた。女の子が父親の所に住み始めたら、例え彼女が望んだとしても、源氏の君が彼女を自分の家に迎えるというのはおかしい。そんなことをしたら、子供を盗んだ人、周りに悪者にされるに違いない。それより、父親より先に行動を起こし、女房たちを口止めしたうえで、彼女をすぐにでも迎えたほうが良いと思えた。「明け方に彼女の所に行く」と惟光に行って、「ここに来たときに使った馬車を出して。準備はいいから今のままで結構。あとは一緒に来てくれる一人、二人を用意して」と源氏の君が言った。惟光がそれを受けて、お辞儀して退室した。</p>	<p>源氏の君は妻の父親である左大臣邸の邸にいたのだが、いつものように彼女はすぐに会いに行かなかった。がっかりして、和琴の線に触りはじめ、「常陸では田圃を作っている」という有名な曲を口ずさんだ。惟光が来るとすぐ彼を呼んで、様子について尋ねた。彼の報告が源氏の君の機嫌を損ねた。女の子が父親の家に行ったら、迎えに行ったら子供を盗むような非常識な人に思われるに違いないので、女たちの口を封じさせて、行動に移る必要があると考えた。「明日はあちらの邸に行きます。車が用意されるように指示をして、一緒に来る人を二、三人呼んで」と言っ、惟光が承知して下がった。</p>
<p>92 思案のあげく、光源氏は滞在中の左大臣邸から夜明け前に出かける</p>	<p>源氏の君は、どう振舞ったとしても、そのこと自体が世間に知られたら、スキャンダルになるに違いないということがわかっていた。嫉妬深い人たちが、幼いながらも女の子だから、何故源氏の君が彼女を自分の屋敷においたかをわかる年齢だと噂を流すだろう。他人が考えることはどうでもいい。それよりも深刻なことを考えなければならない。父親が娘の居場所を知ったらどうするのだろうか。人の娘を誘拐するというのはかなりみっともないし、王子に恥をかかせることになるだろう。それを考えて、源氏の君が悩んではいたが、その機会を逃したらもう次がないし、行動を起こさないと後々は後悔するに違いないと思って、明け方よりはるかに早くから出発の準備を進めていた。葵はいつものように冷たく、距離を置いていた。「たった今、家で見てこないといけないとても大事なことを思い出した」と言っ、出て行ったが、出たときにあまりにも静かだったので家の人は誰ひとり気づかなかった。自分の部屋からマントをもって来させて、馬に乗って後ろについていた惟光と二人で出て行った。</p>	<p>源氏の君がとるべき行動について考えた。そのことが世間に知られたら、色男だと思われるだろうし、せめて相手の年齢がもう少し上だったら合意の下だと考えられる、実際そのようなことがよくあるものだ。しかし、彼女を二条に連れてきてから、父親が探しに来たら、世間体が悪く、とても恥ずかしいことになりそうと悩んでいたが、その機会を逃したくはなかった。いつものように妻は冷たくよそよそしかった。「二条でやらないといけないことがあると忘れていました。すぐ戻ります」と言っ、他の女房達が気づかないくらい静かに出ていった。自分のために用意されていた部屋でラフな格好に着替えた。惟光だけを馬に乗って一緒に行った。</p>

<p>93 少納言の乳母が対応に出るもの光源氏は制止も聞かずに奥へ入る</p>	<p>ドアに何度もノックをしたあげく、やっと門を開けてもらったが、開けてくれたのはその秘密について全く何も知らない召使だった。惟光は極力音を立てずに、源氏の君の場所を入れるように命令をして、すぐに正門に回って、少納言に自分の存在を伝えるために、咳払いをしながらドアを叩いた。少納言がドアに出てきたときに「源氏の君が待っています」と伝えた。「しかし、姫はまだぐっすり寝ています。こんな時間に訪問するなんて非常識すぎます」と少納言が言った。源氏の君が何かの逢引からの帰りで、ただ寄っただけと思っていた。「女の子がまもなく父親の所に連れて行かれると聞いたので、その前に大事なことを伝えたくて」と入りながら源氏の君が言った。「どんなことをお話になっても、気の利いた返事をくれるでしょうね」と少納言は皮肉混じりに言った。10歳の子供と大事な話ができるものか！源氏の君が女性たちの部屋に入っていった。「あそこは入っては行けません！」と少納言がびっくりして叫び、「服を着ないで寝ている年配の方もいます…」「みんなぐっすりと寝ています。女の子だけ起こします」と源氏の君が言って、「朝の霧が上がっているところ。もう起きる時間だ」と彼女の耳に囁いた。</p>	<p>邸に付いたら門を叩き、何も知らない誰かが開けたので、車を静かに入れて、惟光が咳払いをして彼らの訪問を知らせると、乳母が現れた。「源氏の君が来ています」というと「若君が休んでいます。何故こんな時間に来たのでしょうか」とどこかの密会の帰りだと思っで訪ねた。「父親の家に引っ越すと聞いたので、その前にどうしても話しておきたい」と言う。「どのようなことでしょうか。そして、すぐにお返事ができると思っているのでしょうか」と言って、微笑んでいた。源氏の君が入ろうとして、乳母がとても困った様子で「見苦しい姿で休んでいる年寄もいますよ」「まだ起きていないのでしょうか。私が起こしてあげよう。このような素晴らしい朝霧を知らないで寝るのはもったいないです」と言いながら、乳母が止める間もなく中に入っていった。</p>
<p>94 光源氏は父宮の使いであると嘘をついて、寝ている紫の上を起こす</p>	<p>そして、少納言が何かをいう前に、女の子を抱き上げて、起こすように体を揺らした。まだ完全に目が覚めておらず、女の子が迎えに来た父親だと勘違いをした。「おいで。お城に連れて行くために父親が私をここに送り込んだのだ」と源氏の君が彼女の髪の毛を撫でながら言った。父親ではないとわかった瞬間とてもびっくりして、怖くて離れようとした。「父親ではなくても怖がることはない」と言いながら彼女を抱き上げて部屋を出た。「なんてこと！」と惟光や少納言が言った。何をするつもりなのだろうか。</p>	<p>女の子が静かに寝ており、彼が彼女を抱きかかえたときに目を覚まし、一瞬迎えに来た父親かと思った。彼が髪を撫でた。「さあ、一緒に来て。お父さんのお使いとして来ました」と部屋から出ながら言ったが、女の子が父親ではないとわかり、怖がっていたので「怖がらないで。違いはありません」と付け加えて部屋を出ていった。惟光と乳母は何が起こっているかがわからず、とても驚いた様子でいた。</p>
<p>95 二条院へ誰か来るようにと指示して、光源氏は紫の上を連れて行く</p>	<p>「ここにいて、好きなきに会えないのが辛からもっといい所を用意すると言ったはずですが、それなのに彼女に会えるのはもっと難しくなるというように所を行かせようとしたじゃないか。仕方があるまい。誰かが一緒に来るために準備をしておいてください」と源氏が君が言った。源氏の君が女の子を連れ出すつもりだとやっとわかった少納言はうろたえた。「今日はいくらなんでも無理でしょう。父親が迎えに来る日です。少し辛抱して待ってくれば全部うまくいくのに。こんなことをして自分にもメリットがないし、この家の女房たちも困らせることになるだけです」「なら来たい女房は後から来ればいい」と源氏の君が言って、馬車を走らせた。女の子は涙を流し、何が起きているかわからない状態だった。乳母は、もう止めることができなく、前夜に用意をした女の子の服を集めて、一番いい服に着替えて馬車に乗った。</p>	<p>「こちらに訪問するのが難しく、もう少し静かな所に移すことをお勧めしたのですが、こちらを出て行ったらすべてが難しくなります。誰か一人付いてきてください」乳母は気が動転し「今日は本当に都合が悪いです。父親が来たら何を言えればいいのでしょうか。そうなる運命だったのであれば、月日が経って自然にそうなってしまったでしょうけれど、心の準備ができる間もなく急なことなので、私たちも困ります」「後からでも女房たちがくれればいいでしょう」と言って車を行かせた。女房たちが呆れかえって、何をすればいいかわからない。女の子が泣きわめき、乳母が、彼を止めようがなかったので、急いで前日に準備をしていた服を集めて、自分もちゃんとした複数に着替えてから車に乗った。</p>
<p>96 少納言の乳母は困惑するもの紫の上のことを思って涙をこらえる</p>	<p>源氏の君の屋敷はそんなに遠くなかったので、夜が開ける前に着いた。西の方に馬車を止めて、源氏の君が女の子を優しく抱き上げて下ろした。少納言はその時までであったことを全て夢のように思えて、何をすべきかを迷い、部屋に入るのに躊躇っている様子だった。「入りたくなければ好きにすればいいです。女の子は安心できる所にいるから、それ以上は望めない。あそこに戻りたいのであれば、言ってくれば送ります」と源氏の君が言った。急なことで驚き呆れていたが、それより王子は娘がいなくて知ったらどう思うかと考えるだけぞっとした。今後の自分はどうかやら。いずれにしても、頼りにしてくれる人たちを次々と失う運命のように思えた。涙が止まらなくて、長すぎる間にずっと泣き続けたと気づき、自分を落ち着かせようとして祈り始めた。</p>	<p>二条の邸は近いので、夜が明ける前にたどり着いた。車を西側に寄せて降りた。軽々しく女の子を抱きかかえて降ろした。乳母がまだ当惑をしていて「まるで夢みたいです。何をすればいいのだろうか」「あなた次第です。若君がこちらに来ているので、あなたが帰りたいければ送ってあげましょうか」と源氏の君が言い、乳母が苦笑して降りた。全てがあまりにも急すぎたので、自分が取るべき行動を判断できないでいた。若君の父親は何を思うのであろう。そして若君の運命はこれからどうなるのであろう。とにかく頼れる人が誰もいないのが気の毒で、それを思うと涙が込み上げてきた、その場で涙を流すのが不吉だと思われて、じっと堪えていた。</p>
<p>97 紫の上のために、光源氏は通常は使わない対屋に調度などを整える</p>	<p>西の部屋は長い間誰も住んでいなくて、家具もほとんどなかったのだが、いつの間にか惟光が必要な屏風やカーテンを持ってこさせた。源氏の君のために、屏風を引き下ろして休める所がすぐさまに用意された。他の部屋においてあった寝巻きを取りに行かせて寝た。</p>	<p>邸の西側に誰も住んでいなかったで、カーテンなどが敷かれていなかったのである。惟光を呼んで、御帳や、屏風などを準備するように指示をした。自分は御几帳の帷子を引き下ろし、簡単に寝る場所を整えて、東の部屋から必要最低限の物だけ運ばせて、寝た。</p>

<p>98 二条院へ連れてこられた紫の上は、気味が悪くなり体をふるわせる</p>	<p>彼から少し離れた所に寝かせられていた女の子が新しい所にいたせいか、とても怖がっていた。唇が震えていたが、叫ぶことができなかった。 「少納言と一緒に寝たい」 とやっとの思い出、涙混じりで、小声で言った。 「もう乳母と一緒に寝る年齢ではないでしょう」 と彼女の声を聞いた源氏の君が言った。 「いい子にして、そのまま休んで」 いきなり心細くなって、しばらくの間寝ずにずっと泣き続けていた。乳母は落ち着かなくて一睡もできず、召使用の部屋にいて、周りで何が起きているかわからない程泣いていた。”</p>	<p>女の子は何が起こったのであろうかと思ひながら震えていたが、やはり声を出して泣くのがしなかった。 「乳母の近くにいたい」 と遠慮がちに、幼稚な声で言った。 「あなたの年齢だとそんなことが許されません」 と言われ、今度はとても悲しくなり、堪え切れず泣き出した。乳母は寝ることができず、何も考えられずにそばにいた。</p>
<p>99 少納言の乳母は、輝くばかりの立派な二条院で間の悪い思いをする</p>	<p>しかし、夜が明けていくと少しずつ周りを見渡した。素晴らしい柱と彫刻がいっぱい入っている宮殿はもちろん、外に敷いてあった砂も宝石のように見えて、あまりの美しさに圧倒された。そして、女ばかりではなかったのも、少し安心もできた。 いろいろな人が屋敷を出入りする時間になった。男たちのグループはちょうど彼女がいた部屋の窓を取りすぎて、 「新しい人がここに住み始めたようだ。誰だろうか？絶対特別な人だと思うのだ」 とささやきあっているのを聞こえた。</p>	<p>夜が明けていくにつれて、周りを見回すと、とても立派な豪邸と家具だけではなく、きまり悪く感じるぐらい庭の砂でさえ宝石のように光り輝いていた。しかし、そちらの部屋には女房などがおらず、たまに来る客を迎えるために使う部屋だったので、男たちが御簾の外に控えているだけだった。人が来ていると聞いた人はその正体について囁き合っていた。普通の人ではないということだけが確かだった。</p>
<p>100 かわいらしい女童を呼び寄せた光源氏は休んでいた紫の上を起こす</p>	<p>お風呂のための水が別の部屋から運ばれて、朝ご飯として蒸したご飯が用意された。日が高くなっている時間になってやっと源氏の君が起きた。 「ずっと一人でいるのは良くないので、昨日迎えに行く前に何人かの女の子がここに来るように手配しました」 と源氏の君が言ってから、その女の子を東の部屋から呼んでくるように命令した。小さい子だけ集めるように頼んでいたのだが、小さくて可愛らしい子四人が現れた。 紫は源氏の君の上着に身をくるんでまだ寝ていた。 「もう悲しがるのはよしてください。あなたのことが大事だと思っていなければこまですると思うかい？女の子は可愛らしく素直が一番」 と言った。それが女の子の教育の始まりだった。</p>	<p>朝ご飯としてはお米と体を洗うための水が出された。源氏の君が目覚めたときに日が高くなっていた。 「女房がいなくて不便だろうから、夕方になってから適任だと思う人を呼んでください」 と乳母に言い、東の部屋から何人かの女性を呼んだ。若い女性が来るように指示をしたのだが、とてもかわいらしい女性が四人きた。女の子は彼があげていた服にくるまってまた寝ていたので、彼が起きた。 「まだ怒っているのですか。あなたのことを本気で心配していなければこまでしないのです。女の人は従順で逆えない性格が良いのです」 などと、そのときから教育を始めた。</p>
<p>101 紫の上の気をひこうと、光源氏は面白い絵などを見せて相手をする</p>	<p>やっと近くから見る事ができて、思ったより可愛く見えて、すぐ二人の間に親しげな会話が始まった。彼女に見せたいと思った美しい絵画と玩具を持ってこさせて、一生懸命彼女を楽しませようとした。 ちょっとずつ起きて周りを見るように彼女を説得した。薄墨色の喪服の姿えたのを着て、辛いことを忘れて無邪気に笑ったり遊んだりして、とても可愛らしく、源氏の君もつい微笑んで見ている。</p>	<p>近くから彼女を見ている今、以前より美しくかわいらしく見えた。持ってこさせたおもちゃと絵を見せながら彼女と話し、気に入ることをしようとしていた。彼女は起きていて、次第に見せられるものに興味を持ち始めていたが、鈍色の色濃い喪服を着て座って微かに笑っている様子があまりにも美しく、源氏の君も微笑まざらなれなかった。</p>
<p>102 紫の上は光源氏が留守にしている間に、二条院のあちこちを見回す</p>	<p>彼が東の部屋に行ったら、女の子が外に出て庭を見に行くことにした。池の近くにあって木々の間に歩いたりして、霜枯れの前栽が絵に描いたように美しく、いろいろな色の服を身にまとった人たちが行き来している様子を眺めて、とても素敵なお所だと改めて感じた。屏風など、とても素晴らしい絵を見ながら、うっとりしていた。</p>	<p>東の部屋に行ったときに、彼女は自分の部屋から出て庭の木立や、池を見回した。霜のかかった草がまるで絵のようで、見たこともない四位や五位の人々の服装が色とりどりに入り乱れて、ひっきりなしに出入りして、面白そうなお所だと思って、すぐに心が落ち着いた。</p>
<p>103 留守にする光源氏は紫の上のために手習いの手本などを残していく</p>	<p>源氏の君は二、三日宮殿に行かず、絶えず女の子と一緒に過ごして彼女を楽しませようとした。アルバムに入れるようにいろいろな絵を書いて、彼女の一つひとつ見せたりしていた。今まで見た中では一番綺麗な絵に見えた。そのあとは《武蔵野》という詩の一部を書いた。とても力強い筆跡で紫に書かれたその文字に女の子が心を打たれた。小さく以下の言葉が書かれていた。 《根が見えないが この若い芽が可愛くてたまらない 武蔵野の紫草のゆかりのあなたが》</p>	<p>源氏の君は二、三日宮廷に行くのを控えて、自分に馴染ませようとずっとそばにいた。字や絵など、お手本になるものを作り、とても素晴らしい作品を書いて集めた。女の子が「武蔵野と言うと文句を言うだけで苦しい」という文字が手慣れた字で書いてある紫色の用紙をみて、その隣に少し小さく 根はまだ知らないが、近寄りたたい武蔵の平原の草と ゆかりのある紫の草が愛しく思う とある。</p>

<p>104 光源氏は紫の上へ手習いを教え、人形などの家を作って一緒に遊ぶ</p>	<p>「さあ、あなたも何かを書きなさい」 「でもまだ綺麗には書けない」 と無邪気な目彼を見つめて、さらに可愛く見えて、源氏の君が微笑まずにいらなかった。 「上手に書けなくても、なんにも書かないのはよくないよ。教えてあげるから」 彼を覗き込みながら、紫が書き始めた。その手つきや、筆を持つ様子があどけないのが、た だもう可愛くてたまらないので、源氏の君が自分ながら変に思う。 「書きそこねた」 と女の子が急に叫びだして、顔が赤くなって、書いた物を隠そうとした。源氏の君が無理に 見せさせると、この詩が書いてあるのを見た。 《何で武蔵なんて言っているのか さっぱりわからない わたしはどんな草の ゆかりな の》 字が稚拙で大きすぎたが、期待できそうな感じだった。尼の筆跡にとても似ていた。今風の 手本で習ったらすぐに上手なるであろうと思われた。 そのあとは人形の家を作ったりして、あまりにも夢中になりすぎたので、しばらくの間不安 に思っていたことを忘れることもできた。</p>	<p>「あなたも何かを書いてみてください」 と言うと、 「まだうまく書けません」 と言って、顔を見上げている様子が無邪気でかわいらしいので、つい源氏の君も微笑んだ。 「構わない。何も書かないよりましです。教えてあげましょう」と言って、自分の横に座って 書いているのを見ると、字の書き方も筆の持ち方もかわいらしくてたまらないので、我なが ら不思議だと思った。 「全然うまく書けなかった」 と恥ずかしがりながら紙を隠そうとしたが、彼がそれを取り上げた。 そのようなことを言われる理由がわからず 紫の草はどの草にゆかりのあるのでしょうか 字が稚拙だったが、しっかりしていて、将来的に上達できるであろうと思われた。亡くなっ た尼に少し似ていた。『当世風の手本で習ったら、とても良く書けるようになるでしょう』と 思い、彼女と一緒に人形の家を作ったり、並んだりしているとなつらいことが忘れられるよ うな気がした。</p>
<p>105 事情を知らぬ兵部卿宮は紫の上の失踪を嘆き、少納言の乳母を疑う</p>	<p>紫の家の女房たちが、兵部卿が迎えに来たときに大層に困った。源氏の君が彼女たちにしば らく誰にも知らせないように頼んでいて、少納言もそのほうが良いと思っていた。行方も知 らせないで、少納言がお連れして隠したのだとしか言わなくて、王子はそれ以上知ることが できなかった。王子がとても当惑していた。尼に言われて父親の宮殿だと辛い思いをすと 少納言が思ったかもしれない。それで彼に思っていることを打ち明けずに、機会が訪れたと きに連れ出したのだった。王子はどうしようもなく帰ったが、その前に何かわかったら知ら せるように女房たちに頼んだ。そのことが彼女たちをさらに困らせた。山に住んでいる僧都 にも聞いてみたが、何も手がかりを得られることができなかった。とても良い子だったので、 行方がわからずまま離れ離れになるのはあまりに悲しく思った。</p>	<p>あの家に残った女房たちが、迎えに来た父親に何て説明をすれば良いかわからず、とても困っ ていた。源氏の君はしばらくの間内緒にしてもらうように頼んだが、乳母も同じように考え ていたので、固く口止めさせていた。女房達は若君の居場所が分からず、乳母が彼女を連れ だしてどこかで隠していたとだけ言い、父親は何することもできなかった。尼は若君が父親 の所に行くのを嫌がっていたので、乳母が、尼の意見を大事に思い、移してほしくないなど と言わないで、自分の一存で見つからないように連れ出したのであろうと思い、泣く泣く帰っ た。 「何かわかったら知らせてください」と言っていたので、女房たちがそれも厄介だと思った。 山に住んでいる僧都にも情報がないかと尋ねたが、彼からも何も聞き出せなかったので、失っ て初めて大事だとわかった人のことを恋しく思っていた。</p>
<p>106 継母の北の方は、紫の上を意のままにできなくなったのを残念がる</p>	<p>奥さんも、女の子の母親に対する嫉妬は忘れて、自分が彼女の面倒が見られな いと思われたのがとても心外だった。</p>	<p>彼の女房もまた、若君の母親に対する憎しみが弱まり、自分の娘のように育てようとやっ と決心がついていたので、そのことを知って残念に思った。</p>
<p>107 紫の上は尼君を慕って泣く時があるもの、光源氏にもなれ親しむ</p>	<p>紫の女房たちが少しずつ新しい家に移った。彼女の遊び相手として選ばれた子供たちが彼女 ととても仲良くなれた。すぐになんの気がねもなく遊ぶようになった。 源氏の君が出かけて一人の夜は、たまに尼のことを懐かしく思って少し泣いたりしていた。し かし、そもそもあまり面識がなかった父親を思い出すことがなかった。今は新しい父親がで きて、日に日に彼のことが好きになっていた。</p>	<p>女房達や召使は少しずつ二条に移動しはじめた。遊びの友達は、源氏の君と若君の素敵な風 貌や品格にすぐに馴染み、無邪気に遊んでいた。時々、源氏の君のいない夜に、女の子が尼 のことを懐かしく思い、泣き出したりしていたが、父親のことを思い出すことはほとんどな かった。幼いときから一緒に過ごしていなかったので、新しい父親のように振る舞っていた 源氏の君にすぐ馴染んだ。</p>
<p>108 光源氏は、かわいらしい紫の上を「風変わりな秘蔵っ子」だと思ふ</p>	<p>源氏の君が家に帰るなり、彼女は最初に彼を迎えて、ずっと一緒に時間を過ごして、遊ん だり楽しい話をしたりして、絶えず彼の膝の上に乗って、遠慮したり恥ずかしがりたりする ことはもはやない。彼女より可愛い相手はいないほどだった。成長するにつれてそんな に素直では亡くなるかもしれない。まだ明らかにわからない性格の異なる側面も出てくる可 能性もある。例えば、彼が別の人に興味を持っていると知っていたら嫉妬をして大変なこと になることもあるだろう。しかし、今は本当に可愛い遊び相手だった。本当の娘だった らそまでの親密な関係を続けることが許されなかっただろうが、二人の関係は特別だとな り源氏の君が思っていた。</p>	<p>彼が帰るなり、すぐ会いに行って、親しく話をし、彼が抱きしめたりするとちっとも嫌がらず、 とてもかわいらしかった。 通常、嫉妬や自尊心によって関係が拗れるとき、悪い影響を避けるために距離を置いたりする こともあり、相手も憎しみを感じたりするのであればなおさらである。しかし、女の子と一 緒にいるといいことづくめで、嫌な気持ちになることは全くなかった。もちろん、自分の娘だっ たら、彼女の年齢になると、あんなに親しく振る舞うことも、一緒に寝起きなどはとてもで きないのに、この人は誰とも違う特別な存在で、誰よりも大切にしないといけないと思った。</p>

●ロシア語訳『源氏物語』「若紫」データ

小見出し	ロシア語訳訳し戻し（ドリュージナ訳）
1 瘡病をわずらった光源氏はすすめにより北山の聖のもとへ出かける	<p>ゲンジは重い熱病で苦しんでいて、非常に多くの僧が祈祷やまじないを行うために召されたが、良くなる兆しは一向になく、病は何度も何度もぶり返していたので、ある時誰かが言った：</p> <p>「キタヤマ、北山のとある僧院に、とある賢い僧 — 祈祷師が住んでいると聞きました。去る夏、世に病気が流行して他の医療者によるまじないが無効だと分かった時、彼は多くの人々を治すことが出来ました。すぐに彼の助けを求めるときです、病が完全にご主人をとらえてしまうことを許してはいけません。」</p> <p>それでゲンジは僧を呼びに使いを送ったが、悲しいかな：</p> <p>「年齢と病が負担となって、もう長い間自分の小屋を出ていません、」と老人は答えた。</p> <p>「どうしたらいいだろう？ 忍んで自ら彼の元へ行こう」とゲンジは決心し、最も忠実な従者三、四人を伴って、未明に出発した。</p> <p>その僧院は山奥にあった。</p>
2 聖は、峰が高い山に囲まれた奥深いところに籠り、修行をしている	<p>三月の月は下弦で、京はとうに花の時期は過ぎていたが、山桜は花盛りだった。道が旅人達を山のさらに奥に導くにつれ、斜面に広がる霞のたたずまいはいっそう素晴らしくなっていく、ゲンジは魅力的な、彼にとっては全く新しい景色を楽しんだ、なぜなら高い身分の人なので、ほとんど都を出たことがなかったからである。</p> <p>僧院自体の様子も魅力で満ちていた。高く尊敬される隠者は、山々の頂や荒々しい岩の間の高いところに住んでいた</p>
3 光源氏は自分を誰とも知らせず、驚き騒ぐ聖から加持祈祷を受ける	<p>彼の僧院に登っていった時、ゲンジは名乗らなかったが、つましい着物にもかかわらず、老人はすぐに高貴な人物だと見抜き、驚いて、お客を笑顔で見ながら言った：</p> <p>「おお、私が値しまししょうか…恐らく、私を召したのは貴方でしょうか？ 悲しいかな、私はもう長いこと世間の事を考えなくなってしまい、奇跡を起こす祈祷を行う決まりは — 記憶から消えてしまいました。貴方は自ら私に栄誉を与えて下さった…徒勞になってしまうのではないのでしょうか？」</p> <p>この僧は、その徳で世に知られていた。彼が準備しなければならぬこと全てを準備して、ゲンジに薬を供し、必要な儀式を行っているうちに、太陽はかなり高く昇っていた。</p>
4 光源氏は高い所から見た目がきちんとしたきれいな僧坊を見つける	<p>少し外へ出て、ゲンジは山々を見渡した：彼がいる高い頂からは、下に散在する僧院がはっきり見えた。</p> <p>「見て下さい、あそこの斜面に小道が折れ曲がっていて、さらに先には — 他と同じものだが、特別な優雅さで際立っている葦の垣がある。その向こうに — 廊のある清げな小さい家があり、その隣の庭には — 美しい木立がある。知りたいものだ、あそこに誰が住んでいるのか？」とゲンジは自分の同行者に尋ね、その一人が答える：</p> <p>「その住まいは、僧院長である某ソウズの所有です。もう二年ここに隠遁者として住んでいます。」</p> <p>「そうだったのか…こんなにみずぼらしい姿では、彼の目に触れるのはあまり適切ではない」とゲンジは嘆いた。</p> <p>「彼に知られないと良いのだが…」</p>
5 なにかし僧都の僧坊で、光源氏は若い女性と子どもたちの姿を見る	<p>上から、廊のある小さい家から可愛い外見の召使いの女の子が群れをなして走り出てきて、聖なる水をお供えし、花を集めているのがよく見える。</p> <p>「家には女性もいるようだ。」</p> <p>「まさか僧院長が…」</p> <p>「彼女は一体誰だろう？」ゲンジの同行者は話し合う。下りて、熟視して何かを見つけようとする者達もいる。</p> <p>「あの小さい家には — 魅力的な女の子、若い侍女、下女がいます」と彼らは知らせる。</p>
6 供人たちは病を気にする光源氏を、気分転換のために外へ連れ出す	<p>儀式が行われていた間に、太陽はすっかり高くなり、ゲンジはいつもの病気のぶり返しを不安げに待ち受けていたが、そこへ同行者の一人が彼に言う：</p> <p>「ご主人は、暗い考えを紛らわせるべきです。」</p> <p>僧院の後ろの山の斜面に出て、ゲンジは都の方に目を向ける。</p>
7 光源氏は後ろの山から、遠くまでずっと霞がかかった景色を眺める	<p>「春の霞が辺りに広がっていて、それを透かして木立がぼんやりと見える…全く絵のようだ。本当に、ここに住んでいる人には悔いることはないだろう」とゲンジは口にした。</p> <p>「この山々には珍しいものは何もございません」と供人の誰かが言う。「他の地方の海や山をご覧になる機会があったなら、必ずや、絵画の腕はもっとさらに完成の域に達せられることでしょう。ああ、そう、富士山、某の岳…」</p> <p>他の者達は、彼の気を晴らそうとして、西国にある絵のような浦々や岩の多い岸を称賛する。</p>
8 良清は、光源氏に官位を捨てて播磨で暮らす明石の入道の話をする	<p>「近い所では、ハリマの国のアカシの浦が目につきます。その浦には何も特別なものはないようですが、海面を眺めやるだけの価値があります — 驚くべき、かつてないような穏やかさが感じられることでしょう…遠からぬ以前に出家していて、一人娘の教育が最も重要なお世話の対象になっている、前の統治者の家も素晴らしいです。彼自身は大臣の家の出身で、全てが彼に輝かしい未来を約束していたにもかかわらず、かなり変わった気質の人であることが判明し、宮中に仕えることができず、チュウジョウの官位を捨て、その後自ら志願してハリマの国の統治者の職に任命されたのですが、そこでも、どうやら、馴染めなかったようです。『都へ帰るのは面目が立たない』と彼は述べて、出家しました。でもそれでも世の決まりとは違う、変わった行動をしています：山奥に隠棲しようと思わず、海辺に居を構えたのです。ハリマの国には、世俗から離れられる場所が少なからずありますが、恐らく、彼の妻と娘が、人里離れた山の頂の間で日々を過ごすのを望まなかったのでしょうか。あるいはもしかしたら、過去の不成功に関する記憶を心からぬぐい去ることができるだろうと期待したのかもしれない…」</p>
9 光源氏は話を聞いて、誇り高いという明石の入道の娘に興味を持つ	<p>遠からぬ以前、ハリマに行って、彼を訪問しに立ち寄ったところ、どうでしょう — この人は、都では相応の地位を占めることができなかったのですが、かしこでは見事な、豪勢だとも言うても良い住まいを構えていて、それは、疑いなく、統治者の職にあったお陰で、その在任中に、残りの年月を満足して生活するのに十分な資産を用意するのに成功したのでしょうか。彼は来世の生活に関する配慮にも少なからぬ力を入れているので、出家は彼に有益な影響をあたえました。」</p> <p>「それで娘は？」とゲンジが尋ねた。</p>
10 明石の入道は上昇志向が強く娘は容貌と気立てが良いとの話が出る	<p>「顔も気だても悪くないです。その土地の統治者が次々に彼女に思いを寄せ、彼女の両親の同意を取り付けようと努めましたが、彼は全て断り、娘には『私はかくも低く落ちようとも、お前には違う運命を願っている。私の念願がかなわず、お前の将来を保証できずに私が世を去ったなら、お前は海に身を投げなければならぬ』と書いていました。」</p> <p>興味をそえられる話ではありませんか？ ゲンジは少なからぬ関心を持って聴き入った。</p> <p>「ということは、このお世話好きの親は娘を海竜の妻にすると定めているのか？」と供人の誰かが聞いた。だした。</p> <p>「なるほど、このような野心は決して好感を呼ばない」と笑いながら、語り手は答えた。</p>

<p>11 供人たちは明石の入道の娘を洗練されていない娘であると言い合う</p>	<p>この話の語り手は、今のハリマの統治者の息子で、新しい年に五位に叙せられ、クロウドの官位にある若者である。 「このならず者はどうやら、自ら、彼女に出家者の遺言を破らせる気があるらしい。」 「多分、一日中彼女の家の周りをうろついているのだろう。」とゲンジの同行者達は話し合った。 「それでも、そうは言っても、彼女は恐らく、全くの田舎者でしょう。」 「幼い時からあんな僻地で育って、自分の前には古風な両親しかいないのだから、当然…」 「でも母親が、名家の出身のはずでしょう？」 「そうです、それで彼女は、都の最も価値ある家庭の支援を取り付けて、良い教育を受けた乙女や側仕えの女の子を探し出し、自分の娘の為に申し分のない環境を作り出すことができました。」 「冷酷な人がそこへ統治者として派遣されたら、その家族は今後、かくも心安く暮らすことはできないでしょう。」</p>
<p>12 娘を気にする光源氏を、供人は風変わりな好む性質があると察する</p>	<p>同行者による悪評に耳を澄ませながら、ゲンジは指摘する： 「彼が何を考えているのか知りたいものだ、娘に海に身を投げるよう、かくも断固として遺言するとは？海草の中で底にいるのは、何と不快なことだろう…」 娘の運命に彼は無関心ではられないようだった。 ゲンジが、普通じゃないもの、珍しいものに惹かれることは供人達にとって秘密ではなかったのだから、彼らは、この話が彼の気を紛らわせることを期待して、— それは根拠のあることだった— 語ったのだった。</p>
<p>13 都へ帰ろうとした光源氏は大徳の言葉に従って明け方まで滞在する</p>	<p>「もう暗くなっていますが、病気のぶり返しの兆候は全くありません。もう帰路につく時間ではないでしょうか？」と彼らは不安になったが、僧は反対した： 「朝までどまった方がよろしいでしょう。ご主人に何らかの悪い霊がとりついているのではと心配ですから、夜も儀式を続けるべきであります。」 「そうですね、きっと、実際のところ、そうした方がいいでしょう」と皆が同意し、一方ゲンジには僧の提案が極めて魅惑的に思えた、というのも今まで彼は一度も山の僧庵に泊まったことがなかったからである。 「それでは、暁に出発しよう」と彼は決めた。</p>
<p>14 夕暮れ時に僧房をかいま見た光源氏は、気品のある尼君を見つける</p>	<p>日がうんざりするほど長く続き、源氏は無為に過ごすことに参ってしまって、夕霞に紛れてあの葦の垣までやって来た。コレミツ以外の全ての供人を帰し、彼はそのすぐ近くに寄って内部を覗いた。何であろうか？ちょうど彼の前、西向きに部屋に仏像が立っていて、隣に尼が勤行している。竹製の簾が少し上げられていて、尼が仏に花を供えているのが見えた。それから、柱に近づいて、お経が書かれた巻物を肘掛け台の上に置き、側に座る。疲れたようにお経を読むこの尼が、全く重要ではない人物だとは想像できない。彼女は、あらゆることから判断して、四十歳を過ぎていて、品よく痩せていることが、魅惑的な白い顔の心地よい丸さを強調している；切られた髪の毛が肩にかけ、姿に特別な優雅さを加えている。本当に、もしそれが長かったら、むしろ印象を損ねていたであろう。</p>
<p>15 光源氏は二人の女房と女童たちの中にかわいらしい少女を見出す</p>	<p>尼の隣にかわいらしい侍女が二人座っており、そこへ女の子たちが、家に走って入ったり、外へ飛び出たりしながら、はしゃぎまわっている。ほらその内の一人が— 年は十歳ほどのようだ— 部屋に走って入ってくる。柔らかい白い下衣と、山吹の上衣を着ている彼女は、時がたてば真の美女になりそうだと思わせ、特別にかわいらしさを際立っている。女の子は尼に駆け寄ってくる— 髪は、開いた扇のように肩に垂れていて、頬は紅潮している…</p>
<p>16 幼い紫の上は、尼君に「雀の子を犬君が逃がした」と泣いて訴える</p>	<p>「何が起こったのですか？子供たちとけんかしたの？」と尼は目を上げる。 「恐らく、これは彼女の娘だろう」と源氏は、彼女たちの顔の似ている所に気づいて、推し量る。 「イヌキが、籠の下にいた私の雀の子を、逃がしてしまったの！」と女の子は不平を言う。彼女は、冗談でなく本気で口惜しがっているように見える。</p>
<p>17 雀を逃がして残念そうな紫の上の様子に少納言の乳母が立ち上がる</p>	<p>「またしてもこの悪がきのせいですね、」と侍女の一人が怒る、「たびたび彼女を叱らなければなりません。一体どこへ飛び去ることができるのでしょうか？あんなに可愛くて、ほとんど全くもう飼いなされています。からすの目に入らなければいいですが…」 そして立ち上がり、彼女は探しに行く。濃く輝かしい髪が、まさにほとんど床まで垂れ下がっている。あらゆることを判断すると、彼女はかなり美しいようだ。他の人々は彼女をショウナゴンの乳母と呼んでいて、恐らく、彼女は女の子の面倒を見ているのだろう。</p>
<p>18 尼君は自らの余命の少なさを語りつつ雀を追っている紫の上を諭す</p>	<p>「何と愚かな子供でしょう！こんなふうには振る舞うことができませんでしょうか？お前は、今日明日にも私の命が途切れることを全く考えないで、雀のことばかり心配しています！何度も私にお前に『罰は遅れない…』と言ったじゃないですか。ああ、何と悲しいことでしょう！」そして、重苦しげにため息をつき、女の子を自分のもとに呼び寄せる。</p>
<p>19 光源氏は、思いを寄せる藤壺に紫の上が本当によく似ていると思う</p>	<p>その子は近づいて来る。彼女のお顔は魅力的で、眉は薄い煙のようにかすんで見え、広く高い額、子供らしく後ろへ掻きやられた髪は驚くほどかわいらしい。この愛らしいものから目を離さずに、「成長した時の彼女を見たいものだ」と源氏が思うと、突然、彼の秘められた想いを占める女性に女の子がはっとするほど似ていることに気づく。この類似によっても彼女は彼の想像を引きつけたのではないかと涙が彼の目に浮かぶ。</p>

<p>20 尼君は亡くなった娘の話をしつつ、少納言の乳母と歌を詠み交わす</p>	<p>その間に尼は、女の子の髪を撫でながら言う：</p> <p>「何と見事な髪でしょう！髪が解かされる時を、お前は好まないけれども。悲しいかな、お前はまだまだ全く子供で、それが私を心配させずにはいられません。お前の年齢では多くの人は全く違う振る舞いをしています。お前の亡くなった母は十二歳で父親がいなくなってしまった — そう、何という悲しみでしょう！ — でも彼女はその頃、もう多くのことを理解していました。もし私が今お前のもとから去ったら、どうやって一人でこの世で生きていくのでしょうか？」</p> <p>彼女の頬に涙が流れ、彼女を見て無関心でいられる人はいそうもなかった。</p> <p>尼を見て、女の子はきまり悪そうに頭を垂れ、輝かしい、驚くべき髪的美しさが彼女の顔を覆う。</p> <p>露はできない 一瞬で消えることは、この 柔らかい芽を残して。 どこに身を寄せることか、どうやって育つのか、 それさえも分からないのだから…</p> <p>「ああ、何とそれは正しいのでしょうか！」と侍女達は涙を落としながらため息をつき、その中の誰かが答える：</p> <p>まさか露は 私達の世を去ろうと決意するのか、 知る間もなく、 この若い芽が来るべき年に どうなっていくのかを？</p>
<p>21 僧都から光源氏の訪れを聞いた尼君は、恥じて簾をおろしてしまう</p>	<p>そこへソウツ・僧が入って来る。</p> <p>「まさかここ、皆に見える所に座っていることができるでしょうか？」と彼は婦人方をとがめる。</p> <p>「今日に限ってあなた方は何故か廊下のまさに側に身を落ち着かせることにしたのですね！実は、上の、尊敬される長老の僧庵にゲンジ・ノチュウジョウが自らいらっしゃって、相応の儀式によって熱病を治そうとしています。このことをたった今私に知らされました。彼の訪問は厳重な秘密になっていて私は何も知りませんでした、そうでなければ、必ず表敬に訪れるのに。」</p> <p>そして尼は、声を上げて：</p> <p>「まあ恐ろしい！私どもを誰も見なかったならいいけれど！しかも、私はこんなに醜く見える…」と急いで簾を降ろす。</p>
<p>22 僧都は尼君に、世間で評判である光源氏の姿を見てみないかと誘う</p>	<p>「かくも世で評判になっている輝かしいゲンジ！ついに私達にも彼を目にする機会が訪れています！もし噂を信じるなら、彼の美しさは、見る者は誰でも命が延びるほどで、世を背いた僧ですらも世の悲しみを忘れられる力があります。さて、彼を表敬訪問に行こう。」</p> <p>僧が出るのを聞いて、ゲンジは急いで戻った。</p>
<p>23 光源氏は紫の上に強く心をひかれ、藤壺の身代わりになりたいと思う</p>	<p>「この女の子には何と魅力が多いことか！私の供人達、この冒険好き達は、偶然によってしばしば思いがけない出会いが与えられているに違いない。私はこんなに稀にしか出かけないのに、それで…本当に、予期できたのだろうか？」</p> <p>彼は驚嘆した。</p> <p>「それにしても…何と魅力的な子供だろう！彼女が誰か知りたいものだ。悲しいかな、私がむなしく心を寄せるかの女性に代わる私の昼夜の慰めには、他の誰もなれないだろう…」</p> <p>このような考えが一度起こると、深く彼の心に刻まれた。</p>
<p>24 僧都の弟子は、光源氏が臥せるところにやって来て惟光を呼び出す</p>	<p>ソウツ・僧の弟子がコレミツを呼び出した時、ゲンジはもうお休みになっていらっちゃった。僧庵はとても狭くて、ゲンジは彼の言葉が一つ一つ聞こえた：</p> <p>「私の主人は、高貴なるチュウジョウ殿に次のことを伝えるようお願いしています：『チュウジョウ殿がこの辺りを訪れる榮譽をお与えになりながら、私の粗末な住まいを通り過ぎたのを知って、私ははなはだ悲しんでおります。勿論、私はそれでも遅滞なく彼に敬意を表するべきで、私を許すことができるのは、チュウジョウ殿は私がかこの僧院にこもっていることを知りながら、自らの訪問を非常に厳重な秘密についでいらっしゃるとい、私にとって非常に遺憾な状況だけであります。本当に、彼が草の筵を私の小屋に敷くのをより適切だと見なさなかったのは残念です…』」</p>
<p>25 僧都の弟子を通じて、光源氏はながしの僧都の招きを受け入れる</p>	<p>「もう十日以上私は熱病の発作に苦しんでいます。毎回それに耐えるのはさらに苦しくなり、ついに、親しい人々の説得に従って、私はここに急いで来たのです。尊敬される長老は非凡な人物であり、もし祈願が望まれる効果を持ち始めなかったなら、普通の僧以上に、比較にならないほど残念がるだろうことを理解して、私は自分の訪問を秘密にしようとしたのです。でも今は、ソウツ殿を訪問するのを妨げるものは何もありません。」とゲンジは僧院長に伝えた。それで、その人は遅滞なく現われた。</p>
<p>26 折り返し参上したながしの僧都とともに、光源氏は僧坊を訪れる</p>	<p>この僧は、最も古い都の家系に属していて、世に大きな影響力を有していたので、ゲンジは彼がいる所ではかなりきまり悪く感じた。そう、実際に — かくも重要な人物を簡素な旅装束で迎えるのは…山々での隠遁生活について話しながら、僧院長はついでに言った：</p> <p>「私の葦の小屋はここより優れた所はありませんが、涼しき流れのせせらぎは、貴方の注目にも値しましよかと存じます…」</p> <p>彼の頑固さが非常に強かったので、やはりゲンジは彼を訪問することにした、実際どんなに誇張された表現で僧が、ゲンジがまだ会ったこともない女性達にゲンジの美質を描いたかを覚えていて、苦しい困惑を感じていたけれども。もしかしたら、魅力的な女の子について詳しく知りたいという密かな願いがなかったなら…</p>

27 光源氏を招くため、僧坊にある南面の部屋はさっぱりと整っている	実際に、ソウズ僧の庭では、全く見慣れた木や花ですらも、何か非凡な、洗練された美で感動させた。その頃の夜には月がなく、気まぐれな水の流れの上に明かりが懸かっていて、石の灯籠に火が灯っていた。特別な優雅さで際立っていたのは南の部屋の装飾だった。空気中に悩ましく甘い香りがあり、祈祷の香が漂っていて、ゲンジが動くたびに着物から発する又とない芳香がそれと混じり、内の部屋に住む人々の心をときめかせていた。
28 光源氏は夢にかこつけて僧都から紫の上のことを聞き出そうとする	ソウズ・僧はのどやかにお客と語らう — この世の空しさ、来世について、そしてゲンジは自らについて考える：「私の罪の重荷はどれほど大きく、許されざる願いがどれほど深く心にしみ込んでいることか。どうやら私は、この世の最後の日まで苦しむ運命のようで、未来については考えるのも恐ろしい。ああ、もし私もこのように暮らすことができたなら…」 だがそこへ彼の心の中の目の前に昼の面影が浮かび、心は苦しく締め付けられる。 「貴方のところにお住まいになっているのはどなたでいらっしゃいますか？」と彼は僧に話しかける。 「最近、私が誰かについて詳しく尋ねている夢を見ました、そしてご覧のように、今日その夢がつい実現したのです。」
29 僧都は光源氏に、妹の尼君が故按察使大納言の北の方であると語る	「実に思いがけない夢ですね！」と微笑んで僧が答える。 「ただ、彼女の話を聞いても、落胆することでしょう。アゼチ - ノ ダイナゴンがこの世を去ってから、少なからぬ月日が経ちましたので、恐らく貴方は彼についてお聞きになったことはないでしょう。彼の家の北の間の夫人は、貴方の忠実な僕の妹でございます。夫の没後彼女は出家しましたが、最近、重い病気に悩まされて、私の助けを求めることにして、この奥地に住むことになったのです、というも私は都に移住できないからです。」
30 光源氏は僧都に故大納言と尼君の間に生まれた娘について質問する	「故アゼチ - ノ ダイナゴンには娘がいたと聞きましたが…信じて下さい、けしからぬことは何もするつもりはありません…」とゲンジは当てずっぽうに尋ねる。 「娘ですか？はい、一人娘がいました、でも彼女も十年以上前にこの世を去りました。故アゼチ - ノ ダイナゴンは、娘を宮仕えに出したいと願っていて、少なからぬ力を彼女の養育に注ぎましたが、悲しいかな、彼の夢が実現する前に亡くなってしまいました。彼が亡き後、尼は一人で娘の世話をしなければならなくなり、そこへ — もしかしたら、誰かが引き合わせたのでしょうか — ヒョウブキョウ皇子と密かな関係が結ばれました。皇子の家の北の間の夫人は非常に名門の家系に属していると言わざるをえません、それでまさに彼女のために、哀れな娘は少なからぬ悲しみを経験しなければなりません。一日中彼女は悲しみにふけっていて、まもなく彼女は亡くなりました。こうして私達は、物思いがいかにか人を損なうかを自分の眼で眼の当たりにしました。」
31 紫の上の素性を知った光源氏は、藤壺に似ていることに合点がいく	「きっと、私が見た女の子は彼女の娘だろう」とゲンジは推察する。 「彼女とヒョウブキョウ皇子は、だから似ているのだ」 この発見は彼を興奮させずにはいられなかった、そして女の子ともっと近く知り合いたいという願いはさらに強くなった。 「彼女の顔立ちはあるに高貴で素晴らしい、彼女には何の欠点も気付かなかった。ああ、もし私が彼女を自分のもりに引き取って、自ら養育に従事することができたなら！」
32 紫の上のことがいっそう気になった光源氏は、僧都に詳しく尋ねる	「何と悲しく感動的な話でしょう！」と彼は言う。「彼女は自分の形見をこの世に何も残さなかったのですか？」 彼は明らかに、より詳細な情報を得たいようだ。ソウズ・僧はこのように答える： 「彼女が亡くなる少し前に生まれた子供がいます。その子も女の子です。寿命が近づいている私の妹にとって、常に心配の種です。」 『そうだ、それが彼女だ』とゲンジは決める。
33 光源氏は僧都に幼い紫の上を後見することを尼君に話すように頼む	「貴方は、私のお願いを少し奇妙だと思われるかと心配です。でも、女の子を私にお世話させていただきませんか。信じて下さい、私には理由があるのです…実際、夫婦の絆は既に私とある女性との間に結ばれていますが、この結び付きは私の心に馴染まず、一人で住んでいることの方がより頻繁です。『彼女は若すぎる！』と言わないで下さい。貴方が私をよくある好き者だと考えないよう期待します…」
34 僧都は光源氏に、尼君に相談した上で返事をすると答えて堂に上る	「おお、貴方のご提案が私どもにとっていかに自尊心を満足させるか、私はよく分かりますが、貴方ご自身もご覧の通り、女の子はまだ全く幼く、冗談にしても想像ができません…当然、女性は、彼女の世話をする用意のある人がいると、成長するものですが…いずれにしても、最終的なお返事は今のところ私はできません。その前に妹と話さなければなりません。」 僧は、明らかにゲンジの意向に賛同せず、厳格な様子に見え、この会話を続けようとはしなかった。 「私は、祈祷を行う為に阿弥陀堂に行く時間です。夕方の勤行の時間になりました。私は急いでそれを執り行って、戻ります。」 この言葉と共に僧は出て行った。
35 光源氏は悩ましい気持ちになり、夜が更けても眠ることができない	ゲンジは気分が悪くなり、そこへ雨がぼつぼつ降り始め、山から冷たい風が吹いてきて、水で満たされた滝は、石を流れて以前より大きく轟き始めた。眠たげで不明瞭なお経を読む声が耳に届いた…感受性にとくに秀でていない人ですら、この哀感をたたえた魅力の力の影響を受けるだろう、ましてゲンジはなおさらのこと…考え込んで、長い間眠れずに横になっていた。僧は夕方の勤行について言っていたが、夜は深くなっていった。
36 奥の人が休んでいない気配を感じた光源氏は扇を鳴らして人を呼ぶ	あらゆる面から考えて、内部の部屋でも寝ていないようだった、そこに住んでいる女性達は全く自分たちの存在を表に出さないように努めていたけれども。肘掛台に数珠が当たる弱い音や、上品な、魅力的なほど近い着物の音がゲンジまで聞こえてきた…僧の住まいは大きくなく、内部の部屋はすぐ隣にあった。ゲンジはほんの少し屏風を脇へ動かして、それを扇で軽く打った。婦人方の驚きはいかに大きくても、彼女達はそれでも何も聞こえなかったような振りをしようとした、そしてまもなく侍女の一人が現われる。

<p>37 歌を詠んだ光源氏は、女房に尼君へ取り次いでもらうように頼む</p>	<p>少し後ろに下がって、不審そうに言葉を発する。 「何と不思議なことでしょう？私達は聞き違えたのではないのでしょうか？」 「仏に導かれた者が、暗闇中で道に迷うでしょうか？」とゲンジは答える。 彼の優しい、若い声を聞いて、女性は驚いて不明瞭に話す： 「でも偉大な方はどこへ導くのでしょうか？理解しかねます…」 「そう、私の言葉はあまりにも唐突で、あなた方が不審に思うのは分かりますが、それでも…」</p> <p>ある時私の眼差しは 若い芽の 柔らかい緑葉にとまった。 それ以来、私の袖は枕において 露が全く乾かない。</p> <p>これをご主人に伝えてくれませんか？」 「でも殿には、家に彼の言葉が向けられるような人は誰もいないことは知られているはずですよ。一体誰に伝えたらいいのでしょうか？」侍女はなお不審がった。 「信じて下さい、私にはこのように言う理由があります。」とゲンジが言い張るので、彼女は戻って全てを尼に伝える。</p>
<p>38 光源氏が紫の上にあてた歌を耳にした尼君は歌の内容を不審に思う</p>	<p>「何と優雅に言われたものでしょう！どうやらチュウジョウ殿は、私達の幼い姫君が十分に分別のある年齢に達していると考えていらっしゃるようです。ただ、どうやって彼は私の若い芽についての言葉を聞くことができたのでしょうか？」と尼は驚き、全く困惑して、長い間返事をする勇気が出なかった。だがついに、このように遅れるのは礼儀に合わないという侍女達の主張を聞き入れて、次のように伝える。</p> <p>「一晩だけ 露に覆われた枕で 貴方、おお旅の人は、過ごした。 それを、山の僧庵における苔の 永遠に濡れた枕と一緒にしないで下さい…」</p> <p>まさにそれは乾くのが難しいです…」</p>
<p>39 歌を返した尼君に対し、光源氏は紫の上への切実な気持ちを訴える</p>	<p>「私は取り次ぎを通して語らうのに慣れていません。貴方のご配慮を悪用するのはと案じておりますが、それでも、私がここにいる以上、貴方ももう少し詳しくお話することはできませんか？」とゲンジはお願いする。 「チュウジョウ殿は、どうやら、誤解しているようです。そう、あのような重要なお客様と一体私は何について話すことができましょうか？彼を一目見るだけでどぎまぎします…」 と尼は困惑する。 「ですが、全くお返事をしないのも礼儀に合わぬことでございます」と侍女達が催促する。 「実際に、むしろあなた方のような若い人々にとって、彼と語るのは適切でないでしょう。それにこれはとても名誉なことですし、もし彼がお望みならば…」 と尼はゲンジの方に出て来る。</p>
<p>40 困惑している尼君の気づまりな態度に光源氏は謙虚な言葉をかける</p>	<p>「貴方は、私がかくも頑固になるとは予期しなかったでしょうし、恐らく、軽率だと私を非難しようとしていることと思いますが、私の考えに全く悪意がないと信じて下さい、仏自らがその証人です。」 と彼は言い始めたが、落ち着いた品格に満ちた尼の姿を見て、どぎまぎして黙る。 「そうですね、かくも思いがけない機会が私達をここで結びつけました、私達の宿命は全く結びついていないとみなすのは正しいでしょうか？」と尼が言う。</p>
<p>41 光源氏は尼君に自分の体験を語りつつ、紫の上との結婚を申し出る</p>	<p>「幼い姫君の悲しい運命がいかに私の心を動かしたか、貴方は想像できないでしょう。私に、亡き人の代わりに務めさせていただきませんか？私も、最も身近な人を失った時は全く幼くて、それ以来何年も、私の存在の不安定さの奇妙な感情が私をとらえています。私達の運命は似ていますから、もっと近くお知り合いにならせていただきたくお願いしようと思いましたが、このような機会には他に期待できないでしょうから、貴方の非難を恐れず、すっかり心中を打ち明けているのです。」</p>
<p>42 尼君は紫の上が幼く不似合いなことを理由に光源氏の申し出を断る</p>	<p>「貴方のご信頼は私を喜ばせます」と尼は答える。 「ですが、恐れながら、あまり正しい理解ではないようです…おっしゃる通り、今貴方がお話をなさっているつまらない尼以外に生活の支えを持たない人はこの家にいますが、彼女はまだまだ幼くて、しかも彼女の欠点に対し貴方が寛大に接することは難しいでしょう。ですから、情け深いご提案を受け入れることはできかねます。」 「私は彼女について全て知っています。私にそんなに堅苦しくしないで下さい、私が貴方の養育している子に対し、全く特別に接していることを理解するよう努めて下さい」とゲンジは懇願するが、尼はそれでも「きっと、彼女がいかに幼い年齢かを彼は知らないに違いない」と案じて、結局明確な返事をしない。</p>
<p>43 僧都がお勤めから帰って来られたので光源氏は尼君の前を退出する</p>	<p>そこへ僧院長が戻ってきたので、ゲンジは屏風を動かし始める。 「まあ、始めの土台は築かれた。少なくとも、期待できるものはある。」</p>

<p>44 明け方、深山の景色を見ながら、光源氏は僧都和歌の贈答をする</p>	<p>夜が明け、山の頂から吹いて来る風が、懺法を唱える声を法華堂から運んで来る。それらは滝の音と一緒にあって、荘厳に響いている。</p> <p>山の頂からの風が 魂を空虚な夢から 目覚めさせる。 滝の音を聞いて、 目から涙が降る。</p> <p>君の袖は 山の泉の水によって 濡れている 私の心はとうに洗われている、 何がそれを騒がせうるだろうか？</p> <p>「これらの音は、私の耳には慣れ過ぎているようです」と僧は付け加える。 明け行く空は朝の霞みに覆われ、辺りは、目には見えないが、山の小鳥たちがさえずっていた。知らない木や草の花が、まるで高貴な錦のように、多彩な綾で地面を飾っていた；辺りを鹿がうろろうしていた一辺りの全てが、新しく見慣れない美しさで目を楽しませていて、ゲンジは自分の体調不良について全く忘れてしまった。</p>
<p>45 身動きできぬ聖は、光源氏のために護身の修法をして陀羅尼を読む</p>	<p>尊敬される長老は、一つ一つの動きが非常に大きい骨折りであったが、それでも防護の儀式に着手する力を見出した。歯がなく、むにゃむにゃ言う口で彼は呪文を発音していて、彼の年老いたしゃがれ声はとりわけ感動的に響き、思わず、この高德の長老を包む最上の天恵について思いを馳せた。</p>
<p>46 光源氏は迎えの人からの祝いと僧都から酒などのもてなしを受ける</p>	<p>そこへ、ゲンジの供人達が都からお迎えにやって来て、彼らの主人が快復しているのを見て、彼らの喜びは非常に大きかった。帝ご自身からのお使いも到着した。ソウズ・僧はお客を、見たことのない珍しい果物でもてなした。それを見つけるのに、彼の従者はあらゆる地域、最も深い谷まで探していた。 「今年行った誓いを謹んで守っており、私には貴方を見送ることができかねます。悲しいかな、時折、最も良い意図が悔しさの源になってしまうということがあり得るのですね、」と僧は、優れたお酒をお客に注ぎながら言う。 「私の魂はこの山や水に惹かれているのですが、」 とゲンジは言う。 「長い不在で帝を悲しませてしまわないか心配です。花が散ってしまう前に、再び訪れます…」</p> <p>都の友人のもとへ 今は急いで行き、彼らに言おう： 「山桜まで 風がそこへ届くよりも速く たどり着くよう努めなさい」</p> <p>本当に、感嘆しないで彼を見ることも、聞くこともできない： 「私には感じられる： 私の前についに開花した ウヅンバラの花が。 ですから、山桜が今日 私の目を惹きつけることができますか？」</p> <p>とソウズ・僧は言い、ゲンジは微笑みながら指摘する： 「実に、それほど長い年にたった一度だけ開花する花を見るのは稀ですね…」</p>

<p>47 杯をいただいた聖は涙をこぼして光源氏を拝み、守りの独 鉢を渡す</p>	<p>そして尊敬される長老に杯を渡す。</p> <p>「いつも閉まっている 山の僧庵の松の戸は。 だが今日はそれを 私は開けて、見たことのない花が 私の前で顔を見せた」</p> <p>彼は目に涙を浮かべて述べ、ゲンジにトコのお守りを差し出す。それを見て、ソウズ・僧は、かつてショウトク・タイシ皇子がクダラ国から持ち帰った、聖なる木であるボド ヒの種でできた数珠、宝石で飾られた見事な数珠を取り、同じ国から持ち出された中国の箱に入れる。箱は、透かした織物の包みに入れ、五葉の松の枝に付ける。それから、 青金石で出来た紺色の壺を取り、治療に良い薬をたくさん入れ、藤と桜の枝に結びつける。この全てを、折にふさわしい他の贈り物は言うまでもなく、彼はお客に差し出した。 ゲンジは、前もって供人を都へ、帰路それなしには済まされない様々な物を取りに行かせており、その中には尊敬される長老や、お経を読んだ僧達のためのお布施も含まれ ていて、今や誰もが、貧しい山の住民に至るまで、それぞれの身分に応じた贈り物を受け取る。お経を読んだことへの報いをして、ゲンジは出発の支度をする。</p>
<p>48 紫の上を引き取りたい光源氏に尼君は四五年先ならばと返 事をする</p>	<p>ソウツ・僧は、お客の申し出を妹に伝える為に内部の部屋へ急いだが、尼は答える： 「差し当たり、何もはっきりしたことは言えません。チュウジョウ殿の意向が変わらないままなら、五年ぐらい後に考えてもいいでしょうが、でも今は…」 尊敬されるソウズはこのように、自分からは何も加えずにゲンジに伝える。彼は、少しも満足せず、僧に仕える子供の召使いを通して尼に次のような内容の手紙を送る：</p> <p>「夕方の薄闇に 一瞬目の前に現われた 開花した桜。 もう朝になったが、霞が 山の頂のもとで滞在を引き延ばす…」</p> <p>「本当でしょうか 霞が花と離れがたいのは？ 今はこのことを 判断する時期ではない、ちょっと待ちましょう、 空が晴れるまで…」</p> <p>と尼は答える。彼女の筆跡は洗練された簡素さと非凡な高貴さで惹きつける。</p>
<p>49 光源氏を迎えに頭中将や左中弁たちなどの公達が都から やって来る</p>	<p>ゲンジのお迎えに派遣された左大臣の家の若者達が騒々しい群れを成して現われた時、彼は既に車に乗っていた。 「誰にも何も言わないで消えていいもののでしょうか？」と彼らは憤慨した。トウ・ノチュウジョウ、クラウド・ノベン、そして多くの他の人々が来た。 「私達がどんなに喜んで貴方に同行するか知っていながら、私達の付き合いを無視するのは甚だ薄情です…それで今は…まさか私達に、この驚くべき花の陰で休むこともしな いで帰ってもらいたいのでしょうか？」 それで、岩の下の苔に座り、彼らは酒を飲んで楽しむ。滝の側で、その清い流れは何と素晴らしいのだろう！</p>
<p>50 頭中将は懐の横笛を出して吹き、弁の君は扇を鳴らし催馬 楽を謡う</p>	<p>トウ・ノチュウジョウは、懐から横笛を出し、唇に近づける。クラウド・ノベンは、小さい音で扇で拍子を取りながら歌う： 「トヨハラ寺の西に…」 これらの若者達はその美しさで多くの人々に勝っているが、疲れたように石に寄りかかったゲンジは見るに値する…彼は非常に素晴らしいので、彼の顔から全く目をそらし たい気がしない。それと同時に、彼を見た者は、思わず胸騒ぎをする： 「本当に、こんな美しい人が長命でいられようか？」 いつも通り、ゲンジの供人達の間に「ヒチリキ」という簡素な横笛を吹く若者が見つかり、若い廷臣は「ショウ」という横笛を持ち合わせていたことが分かった。</p>
<p>51 僧都も自分から琴を持ち出して、光源氏に琴を弾いてはし いと頼む</p>	<p>ソウズ・僧はそこへ「キン」という7弦のコトを持ってきた。 「後生ですから弾いて下さい、山鳥達を楽しませて下さい」と彼はせがみ、ゲンジは「でも私はまだ弱すぎます」 と断ろうとしたが、それでも結局かなり心地よいメロディーを演奏した。ようやく若者達は去った。</p>
<p>52 光源氏の姿に法師と童べは感涙し、尼君たちや僧都は彼を 絶賛する</p>	<p>「心行くまで楽しむことはできなかった、そしてほら…何と残念なことか！」と涙を流しながら、誰もが、一人の僧や召使いに至るまで嘆いた。 内部の部屋では何が起こったか、言うまでもあるうか？ こんなにも優れた容貌の人を生まれて以来見る機会がなかった年配の尼達は、お互いに尋ね合った： 「彼が私達の世界に属するのでしょうか？」 僧院長ですら涙をぬぐった、宣告しながら： 「ああ、かくも稀なる美しさを持つ人物が、不運な太陽の国に、しかも末法の時期に生まれたとは、いかに心動かされ悲しいことか！何がその理由か知りたいものだ。」</p>

53 幼心に光源氏に思いを寄せる紫の上は、人形に源氏の君と名付ける	女の子の方は、子供らしく、無邪気にゲンジの美しさ感嘆して、「彼は皇子様にさえも勝って美しい」と言った。「それでは、彼の娘になることに同意するの？」と聞かれ、彼女は「それは名誉なことであろう」と思っとうなづいた。それ以来、人形遊びをしても、絵を描いても、一つの姿が彼女の想像を占めていた―それは「ゲンジ様」で、彼女は豪華な衣で着飾らせ、優しく可愛がった。
54 帰京した光源氏は、宮中へあいさつに伺って父桐壺の帝と対面する	都に帰って、ゲンジは何よりもまず、この期間に何が起こったかを帝に語るため、宮殿へ行った。「お前は随分痩せこけたね」と帝は言い、息子を案じる恐れが思わす彼の心を締め付けた。彼はゲンジに、尊敬される治療者について詳しく尋ね、後者は細かいことも惜しまずに語った。「本当に、その僧は十分アザリの位に値します。偉大な功績があるにもかかわらず、彼が宮中で全く知られていないのが奇妙に思われます。」と長老の高徳を評価して、ゲンジは言う。
55 宮中を出た光源氏は、正妻葵の上の実家である左大臣邸へと向かう	帝のお部屋にちょうど左大臣もいた。「私自身が貴方のお迎えに行こうと思っていました、決意しませんでした―貴方はお忍びで私どものものを発ちましたので、誰が知り得ましょうか…貴方は私の家で一・二日お休みになるべきです」と彼は言い、すぐその場で付け加えた：「私は今すぐ貴方をそこへお送りすることができます。」ゲンジは大臣の家に行く気がしなかったが、彼があまりにも言い張るので、断るのは気が引けた。二人で宮殿を出て、大臣は婿を自分の車に乗せ、自身は後ろの居難い場所を占めた。悲しいかな、このような感動的な配慮は、ゲンジを喜ばせるというよりはむしろ当惑させた。
56 光源氏は久しぶりに葵の上と対面するものの、二人の心は通わない	左大臣の家では全てが彼の来訪に備えられていた。彼はもう長い間ここに来ておらず、豪華にしつらえられた玉楼を見てただ驚いた。若い姫君はいつも通り、夫の前に出たくなくと強情を張って隠れていて、大臣は彼女に出てくるよう苦勞して説得した。婦人達は丁重に彼女をゲンジの前に座らせた、そして礼儀正しく固まった彼女は、彼には絵に描かれた古い物語のヒロインのように思われた。本当に、もし彼が、彼女は温かく共感して応答してくれると完全に自信を持って、最近の山への旅について彼女に語り、自分の考えや感情を吐露することができたなら、どれほど彼らの対面は感動的であろうか…だが、悲しいかな、世界中にこれ以上堅苦しい女性はいない。彼女の一つ一つの動きにぎこちなさが見え、ゲンジの存在は明らかに彼女にとって負担になっている。年を重ねるにつれて夫婦はよりいっそうお互い遠ざかっていて、このことがゲンジには突然かくも苦痛に思えたので、思わず彼は言う：「もし貴方が時折、夫婦の間でしかるべきように行動してくださったなら、私は特別な幸せだとみなすでしょう。この頃私の状態は甚だ重かったのですが、貴方は全く同情を示して下さいません。私は、勿論、これには慣れていますが、それにしても残念です…」
57 古い歌を引用して恨み言を述べる葵の上を光源氏は避けようとする	「私にはいつも、同情を示して下さいないのはむしろ『逢瀬を探すのをやめた』人だと感じられていました。」と、姫君は流し目で夫を見て、いやいや答える。彼女の誇り高き威厳のある美しさは彼を恐れさせた。「貴方はかくも稀にしか私とお話しして下さいませんが、私が耳にすることは何でしょう？『逢瀬を探す』のは夫にはふさわしくありません、そのように言われるのは違うケースです。何と貴方は冷酷なんでしょう！どうやら、貴方の心を和らげようという私のあらゆる試みは逆効果で、私はただ貴方の反感を呼び起こしているようです。本当に、『もし命さえあれば…』」と彼はため息をつき、寝台の覆いの向こうへ進みながら言う。だが姫君は彼に従おうと急がない。彼女を呼ぼうと決意できず、ゲンジは大きな声でため息をつきながら一人で臥しているが、彼女は無関心なままなので、眠っている振りをして、彼は目を閉じ、近頃の日々の出来事を思い出し始めた。
58 光源氏は葵の上への不満と反対に紫の上への思いが強くなっていく	「あの若い芽がどのように成長し伸びていくか見てみたいものだ…しかしながら、彼らは女の子がまだ幼すぎると言っているが、それは正しい。彼女に近づくのは容易ではない。特別な騒ぎを起こさずに彼女をこちらへ移し、昼夜の慰めにするためには、どんなことを思いついたらいいだろうか？ヒョウブキョウ皇子は、容貌は高貴で感じが良いけれども、美しさで抜きん出たはいいない。あんなに驚く程の類似は一体どこから来ているのだろうか？しかしながら、腹違いの兄妹だから、恐らく、そのために…」女の子がかくも密接にゲンジの物思いの対象と結びついていると知っている今、彼女はいっそう彼には望ましく思えた。「でも、それにしても、一体どうやって…」と彼は思っていた。

<p>59 帰京した翌日、光源氏は僧都や尼君などがある北山へ消息をおくる</p>	<p>翌日ゲンジは尼に手紙を送った。彼が自分の望みを僧院長自身にもほのめかすのを忘れなかったのは想像に難くない。ゲンジは尼にこのように書いた： 「貴方のつれなさに困惑して、なかなか貴方に自分の心を開くことができませんでした。私の根気強さによって、私の意図が並々ではないと貴方が確信して下さるといいのですが…」 一方、個別に、丹念に結ばれた紙には次のように書かれている：</p> <p>「君の姿は 離れず目の前に立っている、 山桜。 どうやら、私の心はとどまっているようだ あそこ、遠い山々に…」</p> <p>ゲンジの筆跡の非凡な優雅さについては言う必要があるだろうか？とうに盛りの時期を過ぎた尼達は、このごく小さい書簡がいかに優雅に結ばれているかというだけでも歓喜し、暗くなった目から感動の涙が流れた。「おお、今やどうしたらいいでしょう？彼に何とお返したらいいでしょう？」と彼女達は途方に暮れた。「私達のお別れの会話を真に受けませんでした、こうして貴方は再びそれに戻っています。それでどんな返事をしたらいいでしょうか？悲しいかな、この子は恐らく「ナニワヅ」をも最後まで書けないでしょう、彼女宛に書くに値しましょうか？おおそうです、」</p> <p>風に吹かれて 山頂の桜が 散らぬ間に 彼女は君の心を波立たせる、 だがその瞬間は何と短いでしょう！</p> <p>私にはかくも不安なのです…」と尼は書いた。</p>
<p>60 僧都からの返事を残念に思った光源氏は、惟光を使者として遣わす</p>	<p>ゲンジにとって非常に残念なことに、ソウヅ・僧もだいたい同じように答えたので、二・三日待ってから、ゲンジはコレミツを旅支度させた。 「あそこに乳母ショウナゴンがいると覚えている、彼女を見つけ、全てについて話し合え。」 「そう、彼の目からは何も隠せない！彼女は全くまだ子供だったのに、それでも…」とコレミツは、あの夕方にほのかに見た魅力的な女の子を思い出しながら、驚嘆した。</p>
<p>61 惟光は少納言の乳母に面会するものの、周囲の人々から警戒される</p>	<p>再びゲンジの手紙を受け取ったソウヅ・僧が、彼の謝意を表現できる言葉を探している間に、コレミツは乳母ショウナゴンと会うことができ、細かいことも惜しまず彼女にゲンジの気持ちと意向を語った。雄弁の才能に最高度に恵まれ、彼は巧みに言葉を次々に連ねたが、会話に居合わせている婦人達は、皆一致して、耳にしたことにかなり不賛成の態度だった：「彼女は全くまだ子供で、それについて考えることができましょうか？」 ゲンジは尼に温かい懇ろな手紙を書き、その中に再び小さい手紙を入れた： 「貴方の手でたどたどしく書かれた文字を一度でも見てみたいものです！</p> <p>深くないと この小川は呼ばれるが、深い感情が 心に生じた。 どうして君はかくも遠いのか、 山の井戸の影？</p> <p>汲むのを急ぐな、 汲むと一後で悔やむだろう。 山の井戸の 影を信用する決心ができようか？ それは、噂によれば、やや浅いという…」</p> <p>と尼は答えた。そう、コレミツ自身も何も慰めになるお知らせをすることができなかった。 「もし状況が順調で、病人の状態が改善したら、私どもは都へ移ります。そうすれば、私はよりはっきりしたお返事ができるでしょう。」 乳母が言ったのはこれが全てで、ゲンジは苦しい不安と待ちきれなさの内に日々を過ごした。</p>

<p>62 光源氏は王命婦の手引きで、病気で里邸に退出中の藤壺と密通する</p>	<p>ちょうどその時、藤の御殿の皇女が病気になって宮殿を退出した。帝は恋しがり悲しんで、ゲンジは勿論彼が気の毒ではあったが、それと同時にかすかな希望が彼の心をときめかせた：「ああ、もしかしたら、せめて今こそは…」</p> <p>彼はどこへも外出せず宮殿や家で日々を憂鬱な無為のうちに過ごし、一方夕方になれば、オウミョウブ女史から一步も離れなかった。彼女がどうやって全てを手配することが出来たのか、誰が知っているのか！</p> <p>いずれにせよ、ゲンジの秘められた願いが実現した時がついに訪れた。悲しいかな、彼にはこれが夢としか思われず、悲しみが彼の心を締め付けた。皇女も憂鬱であった。彼女は、自分の存在を尽きせぬ苦悩によって暗くする自らの許し難い弱さについて思い出しながら、起こったことは決して繰り返さないとまだ全く最近固く決意したのに、ほら再び…彼女の顔は深い憂愁を表わしたが、優しい顔立ちはいっそう優しく見え、ゲンジから背ける可愛らしい内気さは、彼女の風貌に何か並々ならぬ感動的なものを与えていた。彼女はとても素晴らしいので、ゲンジは思わず彼女の前でひるんだ。</p> <p>「本当に、せめて彼女に何か不完全なところがあったなら…」</p> <p>と幾分かの残念さがないでもなしに、彼は思った。悲しいかな、言葉が彼の魂にあふれる感情を表現することができただろうか？暗黒山、クラブ山に隠れ家を見つけない、この夏の夜は冷酷にも短いだから、そして逢瀬はむしろ悲しい気持ちにさせた…</p> <p>「君は今日は私と一緒に。 だが新しい逢瀬を待ちおおせようか？ 一瞬の夢のように 夜は瞬く間に過ぎる…ああ、もし私が この夢の中に溶けて、消えてしまえたなら…」</p> <p>と彼はむせび泣きながら言い、そして、思わず彼が気の毒になるのを我慢できずに、彼女は答える：</p> <p>「皆の知る噂に 私の名はなるでしょう、分かっている。 たとえ果てもなく 悲しい人生を、醒めることを知らぬ夢が 途切れさせてしまったとしても。」</p> <p>本当に、彼女はこのために絶望しそうで、ゲンジは彼女を見た時、心は憐憫のために締め付けられた。オウミョウブはノウシや他のゲンジの物を持ってきた。</p>
<p>63 光源氏は邸に帰った後、藤壺と密通したことを思い悩んで泣き臥す</p>	<p>二条院に帰って来て、彼は一日中床から起き上がらず、一日中泣き通した。オウミョウブは、奥方様は以前と同様に彼の手紙を読むのを拒否したと伝え、ゲンジはそれ以外の何もものも予期していなかったにもかかわらず、彼の心は深く傷つき、二・三日ほど彼は寢所から出なかった、帝が彼の不在を察して「一体また何が起こったのだろうか？」と不審がるに違いないと恐ろしく思いながら。</p>
<p>64 藤壺の懐妊という密通の結末を、王命婦はあまりに嘆かわしく思う</p>	<p>皇女も自らの不運な宿命を嘆き、悲しんだ。日ごとに彼女は気持ちさがさらに悪くなり、帝が絶えず、急いで戻ってくるよう頼む使いを送ってくるにもかかわらず、閉じこもっているのをやめる決心はできなかった。事態は、彼女の体調不良があまり普通ではなかったことによっていっそう複雑化し、一人になってしばしば「一体何がこの原因だろうか？」と考え込んでいた。最も重苦しい疑念が彼女の魂を暗くし、将来についての考えは絶望に陥れた。暑い間は、皇女は床から全然起き上がらなかった。三ヶ月経って、彼女の体調不良の原因が明らかになった。</p> <p>自分に対する不審の眼差しに気付きながら、彼女は、自らの不幸な運命を嘆き、苦悩した。何の疑いも持たなかった侍女達は「今に至るまで帝に知らせないのか？」と驚いた。だが、彼女達は知ることが出来ただろうか…彼女の乳姉妹であるベン、オウミョウブや、浴室で彼女の近くに仕える他の婦人達は、彼女の病の真の原因を他の人々よりも早く悟り、彼女達の驚きは限りなかったが、そのような事は声に出して言うべきではないので、オウミョウブは、誰も逃れることのできない宿命を嘆き、ただ黙って座していた。結局帝には、悪霊の妨げによって、すぐに体調不良の原因を見抜くことが出来なかったと報告された。そして周囲の皆がこれで落ち着いた。帝は、今やいっそう優しい気持ちを皇女に抱き、始終彼女の家に使いを送った、それは一瞬たりとも彼女を暗い考えから逸らさせなかった。</p>
<p>65 ただ事ではない異様な夢を見た光源氏はわが身に起こる運命を知る</p>	<p>その頃チュウジョウ殿は驚くべき、奇妙な夢を見た。この夢が何を予言するのかわかる為、彼は解釈者を自分のもとに呼んだところ、何か理解できない、全く信じられないことを耳にした。</p> <p>「ですがこの夢は大きな不幸も予言しています、ですから極めて慎重に行動しなければなりません」と解釈者は彼に警告し、ゲンジは、突然はっとして、説明した：</p> <p>「この夢を見たのは私ではなく、全く別の人物です。これが実現するまで、このことを誰にも言わないようお願いします。」</p> <p>しかしながら、耳にしたことは彼を最も強い不安に陥れた。</p> <p>「一体これは何を意味しているのだろうか？」</p> <p>そこへ、藤の御殿の皇女に関する噂が彼に届いた。</p> <p>「まさか？…」と思い当たることが生じ、最終的に平静を失って、彼は必死で逢瀬を懇願し始めたが、オウミョウブは、あらゆることから判断すると、思案の上、今仲介すれば以前よりも計り知れないほど悪い結果になりかねないと結論付けたようだ；ともかく、かつても稀であった短い手紙は全然来なくなった。</p>
<p>66 七月になり、宮中に帰参した藤壺へ桐壺の帝の寵愛はいっそう増す</p>	<p>七月に皇女はようやく宮殿に移った。かくも長い不在の後で彼女は帝にとっていっそう素晴らしく見え、彼の寵愛は限りを知らなかった。彼女は既にウエストが広がり、顔は痩せて、それに物愛しい蒼白さが特別な魅力を付与した。昼も夜も帝は彼女の部屋を去らず、優雅な歓楽が予定された素晴らしい時期になったので、コトや横笛の演奏によって彼の耳を楽しませる為に、絶えず宮殿にゲンジを呼んでいた。いかに冷静さを保とうとゲンジが努めても、彼の顔には魂を乱した感情があまりにも頻りに反映されていて、皇女も常に、彼女を触んでいた苦しい胸騒ぎから気をそらすことができなかった。</p>

<p>67 光源氏は六条京極から帰る途中に、帰京して療養中の尼君を見舞う</p>	<p>その頃、年配の尼の状態は良くなったので、彼女は山の住まいを去ることを決めた。都での彼女の住まいを探し出し、ゲンジは時折彼女と手紙をやりとりするようになった。この間、尼の彼に対する態度に何の変わりもなかったことは、驚くに値しないだろう。しかしながら、ゲンジは、日増しに増えるばかりの自分の悲しい物思いに沈んでいたもので、それ以外のことは彼の頭を占めなかった。</p> <p>憂愁が実に耐えがなくなった秋の末、ゲンジも暗い憂鬱に沈んでいた。素晴らしい月夜のある時、彼はようやく恋人の一人を訪れる決意をした。冬の細かい、冷たい雨がそぼ降っていた。ゲンジの道は六条の、都の境の渡河点の方角にあった。彼は宮殿から向かっていて、道は既に果てしなく思われ始め、古くて濃い陰を保っている木立によってほとんど隠れている、打ち捨てられた家が突如彼の目に入った。そして離れぬ同伴者であるコレミツが彼に言った：</p> <p>「これは故アゼチ-ノ ダイナゴンの家です。近頃私はここにある用事で来まして、『尼は全く衰弱してしまい、どうやったら彼女を助けられるか、私達には分かりません』と言われました。」</p> <p>「悲しいことだ！私はとっくに彼女を見舞うべきだったのだ。どうしてお前は私に、彼女の状態が悪化したと知らせなかったのか？中に入って、彼女が私を受け入れるかどうか尋ねてみよう。」</p> <p>そしてゲンジは、主人達に彼が近づいて来ることを知らせるため、前に人を送った。</p> <p>「『チュウジョウ殿はわざわざここへ来たのだ』と言え。」</p> <p>と彼に命じると、彼は次の言葉と共に家に入った：</p> <p>「チュウジョウ殿が、ご病人の健康について尋ねる為に、こちらへお越しになりました。」</p> <p>家では騒ぎが起こった。</p> <p>「ああ、何と決まりが悪いことか！ここ数日で彼女はとても弱くなったので、チュウジョウ殿を受け入れることは恐らくできそうもありません、」と言った人々がいたが、他の人々は反対した：「彼を帰すのはもっと失礼です。」</p> <p>結局、南の前面の部屋にお客のための座所が設けられ、彼はそこへ導かれる。</p>
<p>68 病床の尼君は、紫の上が成長した暁には光源氏に託すことを決める</p>	<p>「こちらの状況はかなり見苦しいのですが、せめて貴方にご親切の御礼を申し上げるべきだと決意しまして…急にいらしたので、私どもは貴方の為に、この暗く狭い部屋の他は何も準備が間に合いませんでした、本当に申し訳ありません…」</p> <p>と尼は、彼女に仕える婦人達を通して伝えた。</p> <p>実際に、ゲンジはかつて一度もこんなに粗末な住まいに来たことはなかった。</p> <p>「私はずっと前から貴方をお見舞いするつもりでしたが、貴方の変わらぬつれなさを覚えていて、おじけておりましたし、その上、貴方の状態が悪くなったことを誰も私に伝えてくれませんでした、本当に私は残念です…」</p> <p>と彼は答える。</p> <p>「長い間私は重い病気に苦しんでおり、私の命は最後の限界に近づきました。ああ、身に余るご配慮に対し、私は貴方に極めて感謝いたしております。あいにく、私は自分で貴方を、然るべきように受け入れることができかねます。私達の以前の話につきましては、もし貴方のご意向が変わらなければ、私どもの幼い姫君が、貴方のお世話なさる人々の数に入りますように、ただし相応の年齢に達した時に。私は彼女を、何の支えもなしに、全く一人にして残します。恐怖と、彼女の運命に対する不安が、まるで足枷のように、望まれる目的地へ進むのを妨げるのです」</p> <p>と尼は彼に伝える。</p>
<p>69 光源氏は紫の上の無邪気な声を聞き清純な彼女にいつそうひかれる</p>	<p>彼女の部屋はすぐ隣で、ゲンジまで弱い、途切れがちな声が聞こえてくる。</p> <p>「私どもはこのようなご慈悲がいただけると当てにすることができたでしょうか？彼女がまだ全く頑足なくて、相応しい形で貴方に感謝を表現できないのが何と残念でしょう！」</p> <p>「信じて下さい、自分の意向が完全に清廉でなければ、それをわざわざ貴方に打ち明けることはしないでしょう、」</p> <p>とゲンジは、彼女の言葉に感動して言う。</p> <p>「どうやら、私達の運命の間には結び付きがあるようです；貴方が養育している子を目にした日から、私の心に彼女に対する優しい気持ちが宿りました。悲しいかな、きっと私は、空しい期待によって、無益に自分を慰めているのでしょう、」と彼は付け加える。「おお、せめて一度彼女の子供の声を聞かせていただけたなら…」</p> <p>だがショウナゴンは答える：</p> <p>「ああ、いえいえ、彼女は何も知らずにもう深く眠っています。」</p> <p>ちょうどその瞬間に、近づいてくる足音が聞こえた。</p> <p>「お祖母様、私達のもとへ、あの時僧院にいたあのゲンジ様が来たそうですね。どうして私は彼を見てはいけませんか？」と女の子は聞き、婦人達は「何と不運な！」と仰天して、ささやく：</p> <p>「静かに、静かに…」</p> <p>「でもどうして？だって貴方は自分で『彼を見る価値がある、すぐに心は楽になる』と言っていたではありませんか、」</p> <p>と女の子は、かくも反論し難い論拠を見つけられたことに明らかに満足して、黙らない。</p> <p>「何とかかわいい子供だろう！」</p> <p>とゲンジは感じ入ったが、いかに困難な状況に婦人達が置かれているかを理解して、何も聞かなかった振りをして、最も丁重な形でお別れの挨拶をして、去って行った。</p> <p>「どうやら、彼女は本当にまだ全く幼い。でも私は彼女をしつけられるだろう、」</p> <p>と彼は思った。</p>

<p>70 翌日、光源氏は尼君への見舞いととも紫の上へも結び文をおくる</p>	<p>翌日、並々ならぬ配慮を示して、再び尼の健康状態を問い合わせるため急いだ。彼の手紙には、かつてそうあったように、ごく小さい書き付けが見つかった。</p> <p>「ある時耳にした 鶴の子のいわけない声を、 そして魂は永遠に 平静を失った、小舟は スゲの沿岸にはまり込んでいる…」</p> <p>「君一人に変わらず…」と彼はわざと子供の筆跡で書き、それは婦人達にはとても洗練されて見えたので、『彼女のお手本にしよう』と決めた。</p> <p>彼にショウナゴンがお返事した： 「貴方が健康状態をお尋ねになっている方は、今日の日も生き延びられそうにありません。ちょうど今私どもは山の僧院に向かうところです。ですから、かくも親切な同情に対する貴方への御礼を申し上げるのは、恐らく、もうこの世からではないでしょう」</p> <p>とゲンジは読んで、苦しい悲しみが彼の心を締め付けた。</p> <p>この頃の秋の夕べはゲンジにとってとりわけ物悲しかった。彼は、藤の御殿の素晴らしい住人のことを絶えず考えていて、彼の秘められた思いの対象と同じ根から育ったあの若い芽を取りたいという望み（もしかしたら、実際には時期尚早かもしれないが）が彼の心に根付いた。彼には「露はできない 一瞬で消えることは」と言われた夕べが思い出されたり、「彼女は、勿論、可愛らしいが、私を落胆が待っていることもあり得る…」と思わず不安に襲われたりした。</p> <p>いつしか、摘み取って 心行くまでお前を眺めたい 一つの根から 望ましいムラサキの花と共に 育った若い芽…</p>
<p>71 十月に朱雀院の行幸が予定され、舞人は練習など多忙な日々を送る</p>	<p>十月に、赤い鳥 — サザク宮殿への行幸の儀式が予定されていた。舞への参加には最も相応しい人々の中から最も相応しい人々が選ばれることになっており、そのため、皇子や大臣を始め皆が、疲れを知らずに自らの腕前に磨きをかけていた。</p>
<p>72 尼君の死去という知らせが届き光源氏は母更衣との死別を思い出す</p>	<p>ある時、もう長いこと山の僧院と連絡を取っていないことを思い出し、ゲンジはそこへ手紙を送ったところ、ソウヅ・僧からお返事をもらった。</p> <p>「先月二十日、妹は私どものもとを去りました、これは普遍的な運命だと理解はしておりますが、悲しまずにはいられません。」</p> <p>手紙を読みながらゲンジは、この世に属しているもの全ての空しさを嘆きながら、ため息をついた。</p> <p>「故人がかくも運命を心配していた哀れな孤児は、今やどうであろうか。彼女の悲しみは、非常に大きいに違いない！私だってミヤストコロに先立たれたし…」</p> <p>悲しい思い出が彼の心に蘇って、彼は山に最も誠意あるお悔やみの使いを送った。 ショウナゴンは彼にかなり立派なお返事をした。</p>
<p>73 夜、光源氏は自分から、忌みの期間が終わった紫の上の邸を訪れる</p>	<p>追善の儀式の為に定められた期日が過ぎ、女性達は都に帰ってきた、そしてゲンジは、しばらくの間待ってから、静かなある夕方、彼女達を見舞うために出発した。ぞっとするような荒廃が、居住者がほとんど皆去った家を支配していた。かくも幼い存在にとってこのような場所に住むのは、いかにも恐ろしかったに違いない！</p> <p>ショウナゴンは、お客を同じ前面の部屋に案内して、涙に暮れながら、年配の尼の最後の日々について彼に語った、そして彼の袖は思わず濡れてしまった。</p> <p>「何人かの婦人達は、幼い姫君を皇子の家に移すべきだと考えていました。」と乳母は伝えた。</p> <p>「ですが、故人は彼女達と決して合意しませんでした：『第一に、幼い姫君の母が、もし生きていたなら、かつて彼女自身がかくも冷酷に扱われた家に引き渡すのを許さなかったでしょう。』と彼女は言っていました。『第二に、幼児期の年齢を過ぎましたが、女の子はまだ実生活の事柄において十分な経験をできていないで、人々の心を読むことを習得していません。友情よりもむしろ軽蔑を持って迎えるであろう皇子の他の子供達と、仲良く暮らすのは彼女にとって恐らく難しいでしょう。』彼女は正しかったです、そして私どもにはそのことを納得する機会が少なからずありました。ですから、貴方の情け深いお申し出は — 思いつきでなされたものであれ — 私どもにとりまして非常に大きい喜びであります、将来は保証できませんけれども…ですが、残念ながら、私どもの幼い姫君は貴方にお似合いにならないでしょう、彼女はまだ幼すぎますし、それに、彼女の年齢で然るべき以上に無邪気で、私どもはただ当惑しております…。</p>
<p>74 光源氏は少納言の乳母に紫の上への気持ちを伝えて歌を詠み交わす</p>	<p>追善の儀式の為に定められた期日が過ぎ、女性達は都に帰ってきた、そしてゲンジは、しばらくの間待ってから、静かなある夕方、彼女達を見舞うために出発した。ぞっとするような荒廃が、居住者がほとんど皆去った家を支配していた。かくも幼い存在にとってこのような場所に住むのは、いかにも恐ろしかったに違いない！</p> <p>ショウナゴンは、お客を同じ前面の部屋に案内して、涙に暮れながら、年配の尼の最後の日々について彼に語った、そして彼の袖は思わず濡れてしまった。</p> <p>「何人かの婦人達は、幼い姫君を皇子の家に移すべきだと考えていました。」と乳母は伝えた。「ですが、故人は彼女達と決して合意しませんでした：『第一に、幼い姫君の母が、もし生きていたなら、かつて彼女自身がかくも冷酷に扱われた家に引き渡すのを許さなかったでしょう。』と彼女は言っていました。『第二に、幼児期の年齢を過ぎましたが、女の子はまだ実生活の事柄において十分な経験をできていないで、人々の心を読むことを習得していません。友情よりもむしろ軽蔑を持って迎えるであろう皇子の他の子供達と、仲良く暮らすのは彼女にとって恐らく難しいでしょう。』彼女は正しかったです、そして私どもにはそのことを納得する機会が少なからずありました。ですから、貴方の情け深いお申し出は — 思いつきでなされたものであれ — 私どもにとりまして非常に大きい喜びであります、将来は保証できませんけれども…ですが、残念ながら、私どもの幼い姫君は貴方にお似合いにならないでしょう、彼女はまだ幼すぎますし、それに、彼女の年齢で然るべき以上に無邪気で、私どもはただ当惑しております…。</p>
<p>75 尼君を恋い慕って泣く紫の上は、訪問した光源氏を父と勘違いする</p>	<p>女の子は、最近故人を悼んでほとんど起き上がらなかったが、幼い親友達から「誰かノウシ姿の人が来ました。皇子様ではないでしょうか？」と聞いて、起き上がって出てくる。「ショウナゴン、ノウシ姿の人はどこ？それは皇子様が来たの？」と彼女は寄ってきて尋ねる。彼女は何と優しいお声であることか！</p>

76 少納言の乳母は紫の上を年よりも幼い様子であると光源氏に伝える	<p>「いいえ、私は皇子ではありませんが、私をおざりにするには値しませんよ。近くに来てください。」とゲンジは言う。</p> <p>『これは、来訪の折、皆をかくも感激させたあのお方ではないか！』と女の子は彼がそれと分かる。</p> <p>『きっと、私がこんなことを言ったのは悪い』と女の子は当惑し、乳母に寄り添って、願う： 「行きましょう、私は眠たい。」</p> <p>「どうして私から隠れるのですか？ここに横になって、頭を私の膝に置いた方が良いです。近くに来て下さい、怖がらないで下さい、」とゲンジは言う。</p> <p>「ほら貴方ご自身でご覧になって下さい。分別のない全くの子供です…」と乳母は、女の子を彼に押しやりながら、愚痴をこぼす。</p> <p>その子は無心に近寄り、ゲンジは、幕の中に手を差し入れて、柔らかい絹の着物の上に輝かしい房となって垂れ下がっている彼女の髪を触る。いかにこの髪が素晴らしいかは想像に難くない—彼の指の下でほどけて、末に至るまでふさふさしている。</p>
77 幼い紫の上の手を強引にとらえる光源氏に少納言の乳母は困惑する	<p>ゲンジは彼女の手を取るが、女の子は、この見知らぬ人が突然近づいたのに驚き、離れる： 「私は、寝たいと言ったじゃないですか！」</p> <p>この言葉と共に彼女は急いで内部の部屋に隠れるが、ゲンジは彼女の後を追って滑り込む： 「今度は貴方をお世話するのは私です。私を怖がる必要はありません。」</p> <p>乳母は困惑する： 「でもどうやって…まさか可能でしょうか…何という無分別でしょう！だって彼女は、貴方がおっしゃったことを全く、理解すら出来ませんのに…」</p> <p>「これが貴方を動揺させないように。全てを非常に良く理解しています。ただ、私の意向がかくも普通ではないということを、貴方にもう一度納得してもらいたいのです。」</p>
78 あられが降り風が激しく吹く夜、光源氏は紫の上の御帳の中に入る	<p>屋根にあられが当たって、非常に苦しい闇が家の周りを包む。</p> <p>『彼女がこんな陰気で人気のない場所に住んでいてはいけません』とゲンジは思い、涙が彼の目に浮かぶ。まさか彼は、彼女をここに一人で残すことができるだろうか？</p> <p>「格子を下ろして下さい。どうやら、不穏な夜になりそうだ。私はここにどまり、貴方の部屋を守ります。皆、もっと近くに集まって下さい、」とゲンジは命じ、手慣れた様子で、まるで毎日これを行っているかのように、寝台の覆いの内側に入る。</p> <p>婦人達は、かくも信じ難い厚かましさに仰天して、驚愕の目で彼を見送る。</p>
79 少納言の乳母がため息をつく中、光源氏は紫の上に一晩中寄り添う	<p>乳母は、いかに憤慨が大きくても、ただ嘆息するだけである。しかしながら、彼女にはそうする他はない、なぜなら、このような状況では騒ぎを起こすには当たらないから。</p> <p>幼い姫君は、途方に暮れて震えていて、彼女の素晴らしい体は、まるで寒気によるかのように鳥肌で覆われている。感じ入ったゲンジは彼女を下の着物で包み、優しい言葉で落ち着かせようとする、心底では、彼の行動は本当に無分別すれすれであると認めないではいられないけれども。</p> <p>「家へ遊びに来て下さい。美しい絵がたくさんあって、人形で遊ぶこともできます。」</p> <p>彼は、彼の意見ではかくも幼い存在の注意を惹きつけることが出来た事について話そうと努めて、女の子の気を引くことに成功したので、恐怖はほとんど彼女から去ったが、完全に落ち着くことはやはり出来ず、眠りにはつかなかった。</p>
80 女房たちは、悪天候の中での光源氏の訪問が心細さを慰めたと話す	<p>一晩中風邪が吹き荒れていた。</p> <p>「本当に、もしチュウジョウ殿がいなかったら、私どもは一晩中恐怖で震えていたことでしょう。そう、私どもの姫君がこんなに幼くなかったなら…」と婦人達は小さい声でささやき合った。</p> <p>心配する乳母は寝台により近づいて横になっていた。朝方近く、風がとうとう静まった時にゲンジは彼女達の家を去った、それはまるで彼らの間に何かがあったかのように見えかねなかった…。</p> <p>「あなた方の姫君は私の心にとってとても大切になったので、今や私は、最も短い瞬間だけ別れても彼女を恋しがらうでしょう、ですから、私が昼夜悲しみのうちに過ごしている住まいに彼女を移したいです。自身でも考えてみて下さい、私は彼女をこの家に残していけるのでしょうか？まさかあなた方はここに住むのが怖くないのですか？」とゲンジはお別れに言い、ショウナゴンはこのように答えた：</p>
81 尼君の四十九日後に、兵部卿宮は紫の上を邸に引き取る意向を示す	<p>「皇子様も彼女を引き取る意向を言い出して、私どもは、それは定められた四十九日が終わった後に行われるだろうと思っております。」</p> <p>「皇子は、疑いなく、彼女にとって頼もしい支えになるでしょうが、彼女は彼と別居するのにも慣れていて、彼女にとって彼は私のように他人同様です。信じて下さい、私はほんの最近あなた方の幼い姫君と知り合いましたが、今や私の気持ちはもう非常に深いので、恐らく父親の気持ちよりも強いでしょう。」</p> <p>ゲンジは、女の子の頭を撫でて、絶えず振り返りながら出た。</p>

<p>82 紫の上と別れた後、光源氏がかつて通った女性の家の門を叩かせる</p>	<p>空は濃い霧に覆われ、地面は霜で白くなった。この早い時間は特別な魅力を秘めていて、ゲンジは、今は本当の恋の逢瀬にかなり相応しい時だと幾分残念に思った。不意に、一度ならずこの道を恋人の一人に向かって密かに通ったことが思い出された。ゲンジは、長くは考えず、護衛に彼女の家の門を叩きに行かせたが、その叩く音に誰も反応しなかった。</p> <p>それならゲンジは、最も美しい声を持つ供人の一人に、詠むよう命じた：</p> <p>「早い朝焼けの時 濃い霧で道に迷ってしまった、 だがいずれにせよ 君の門の側を 通り過ぎてしまうことができない。」</p> <p>この詩は二度詠まれ、そこへ家から可愛い容貌の侍女が送り出された。</p> <p>「もし霧でさえ 君が私の家を見つけるのを 妨げることができないなら、 まさか君を阻止するだろうか 草で編まれた錠を？」</p> <p>と彼女は答え、すぐに隠れた。それ以上誰も出て来なかった。ゲンジには、何もなしに去るのは悔しかったけれども、空は速く明るくなっていき、あらゆる長居を望ましくないものになっているため、家へ急いだ。</p>
<p>83 光源氏は紫の上のかわいらしい面影が恋しくて文を書き絵をおくる</p>	<p>寝所にこもり、彼は長い間眠れずに横になっていて、優しい気持ちで可愛らしい子供の顔を思い出しながら、思わず微笑んでいた。</p> <p>ゲンジが目覚めた時、太陽は高く出ている。彼はすぐに幼い姫君に手紙を書くことに着手し、その内容は特別であるはずだったので、筆を絶えず置きながら、長い間それについて熟考していた。手紙と共に美しい絵をいくつか送った。</p>
<p>84 父兵部卿宮は少納言の乳母に、紫の上を引き取ることをうち明ける</p>	<p>まさにその日、ヒョウブキョウ皇子も女の子の子を訪問した。彼はもう長い間この古い家に来ていなくて、辺りに満ちている荒涼さは彼を驚愕させた。広々とした部屋はがらんとしていて、全てに憂鬱の痕が見られる。見渡して、ヒョウブキョウ皇子は言う：</p> <p>「短い時間でさえ、かくも幼い存在をこの住まいに残しておいてはいけません。姫君を自分のもとへ移しましょう。我が家では、彼女は快適だろうと確信しています。乳母も部屋をもらって、変わらず彼女に仕えるでしょう。家には子供が多くて、その子達と彼女が見事に仲良くなるだろうことに疑いはありません。」</p>
<p>85 紫の上の着物がしおれているのを目にした兵部卿宮は、娘を憐れむ</p>	<p>皇子が娘を呼び寄せると、ゲンジの衣から彼女の着物に移った絶妙な芳香が空気中に広がる。</p> <p>『何と素晴らしい香りだろう！でも彼女は何と醜い服装をしていることか…』と彼は苦しく思い、それから言う：</p> <p>「年老いて病気で、悲しいかな、今は私どものもとを去った女性の世話の元にこの間ずっといた娘が、私のところへ移るよう私は既に以前から提案していて、その時ならば彼女は少しずつ新しい環境に慣れることができたでしょうに。でも女の子は何故かいつも、我が家の北の間に住む女性をあまり好まず、一方彼女には女の子に対して良からぬ感情が呼び起こされていた。今やかくも悲痛な状況で、彼女が初めて家に入らなければならないのは、悲しいことではないでしょうか？…」</p> <p>「このことについては言うまでもございませんが、」とショウナゴンは反論する。</p> <p>「この古い住まいがいかに陰鬱であっても、幼い姫君はここにしばらく留まっているべきでなないかと思われます。彼女がせめて少しでも物の心を洞察するようになったら、貴方はお引き取りになるのです。本当に、この方がよろしいでしょう…。」</p>
<p>86 少納言の乳母の言葉と紫の上の様子に兵部卿宮はもらい泣きをする</p>	<p>昼も夜も、最も軽い食べ物すらも拒否して、彼女は故人を悼んでいます。」</p> <p>実際のところ、最近女の子は目に見えて痩せこけたが、それは少しも彼女の美しさを損なわず、反対に、彼女の優しい顔立ちはいっそう魅力的になった。</p> <p>「何の為にそんなに自分の心を悩ますのでしょうか？我々の世にもういない人のことを悲しむのは、甲斐がないことではありませんか？考えてご覧、私がお前と一緒にいるのですよ、」とヒョウブキョウ皇子は娘を慰めたが、日が暮れて、彼は去ろうとした。</p> <p>『ああ、彼がいなくなったら、いっそう物悲しくなる、』と女の子は思い、涙が頬を流れた。皇子も泣き始めて言った：</p> <p>「気落ちしないように努めなさい。今日明日にでもお前を迎えに来よう。」</p> <p>彼女を安心させる為に、彼はこの言葉を一度や二度ではなく繰り返して、とうとう去った。</p> <p>父親と別れて、幼い姫君は長い間、慰めようもなく泣いた。</p>
<p>87 紫の上は幼いながらも、自分の身の上と今後の事を思って涙を流す</p>	<p>自分の将来は案じず、故人を思って悲しんでいた。『私達は決して離れたことがなかった、彼女が隣に居ることに慣れていて、そして今や彼女はいない。』彼女の幼い年齢にとってはかくも不慣れなこの考えの重さに女の子は完全に押しつぶされ、以前の遊びですら忘れられた。屋はまだ気がまぎれることができている、夕暮れには非常に果てしない憂鬱に襲われていたので、乳母は言った：</p> <p>「まあ、許されるでしょうか？これから先、どうやって生きていくのでしょうか？」</p> <p>だが、姫君を慰めるための彼女のあらゆる試みは甲斐がなく、ただ一緒に泣くだけであった。</p>

<p>88 光源氏は宮中へ行く自分の代わりに、惟光を紫の上の屋敷に遣わす</p>	<p>まもなくゲンジは、彼女達の元へコレミツを派遣した。 『あなた方を訪問するつもりでしたが、帝に召されてしまいました…幼い姫君がかくも気の毒な環境で暮らしていることを知りながら、私は平静でいられましょうか?…』 彼は召使いも、家に泊まって彼女達を警備するために派遣した。 「何と思いきも寄らぬこと!」と婦人達は憤慨した。「彼らの結び付きを真剣には考えていないとしても、このような始まりはチュウジョウ殿にとって名誉ではありません…」 「もし噂がヒョウキョウ皇子まで達したら、彼の怒りは直ちに私どもに向かうでしょう。」 「気をつけて下さい、うっかり言うのではありませんよ、」と彼女達は女の子に教えたが、彼女の考えは遠いところにあった。</p>
<p>89 少納言の乳母は、屋敷を訪問した惟光へ自分の考えと不安を訴える</p>	<p>ショウナゴンはコレミツとも自分の疑念を打ち明けた。 「時が経って、もしこのような運命が彼女に用意されているのなら、逃れることは出来なんでしょう。でも今のところは、不釣り合いさがあまりにも大きすぎます。チュウジョウ殿は、かなり奇妙なことをここでおっしゃって少なからず私を動揺させました、まして、彼の心中に本当は何があるのか私は理解することができません。今日、私どもを皇子様が訪れ、幼い姫君を守るよう命じて、ごく些細な怠慢も許すことが出来ないと注意しました。貴方のご主人があんなにも無分別に振る舞ったことを思い出しながら、私はまったく落胆して、恐怖に震えています…」 と彼女は言ったが、ふと「彼が、二人の間に実際に何か起こったと思わなければよいが!」と気づき、これ以上嘆くのは用心深く慎んだ。コレミツも「それは一体どういうことだろう?」と不審に思った。</p>
<p>90 光源氏は惟光から父兵部卿宮が紫の上を引き取る予定であると聞く</p>	<p>彼は帰って来て、ゲンジに全てを話したが、後者は、女の子に対する優しい気持ちがいかに大きくても、彼女のもとへ通うのは急がなかった、というのは軽薄な人、正常でない好色漢として知られるのを恐れたからで、ただ密かに「自分の元へ彼女を移そう!…」と夢見ながら、手紙を次々に送った。夕方近くなり、いつも通り、そこへコレミツを派遣した。 「様々な後回しに出来ない用事が、私の主人が貴方のもとを訪れるのを妨げていますが、彼は自分の意向を放棄してはいません…」 「皇子様が私どもに、姫君を迎えにくるのは、明日以降にはならないとお知らせになりまして、私どもは完全に途方に暮れています。そう、落ち着きを保つこともできましようが、何とは言いません、この蓬の草むらに取り残された小屋を去るのは寂しいです、」と乳母は知らせて、ほとんどすぐに立ち去った。 コレミツは、婦人達がすっかり裁縫や他の準備に没頭しているのに気付いて、急いで去った。</p>
<p>91 左大臣邸に来ている光源氏は惟光に紫の上を連れ出すことを命じる</p>	<p>その時チュウジョウ殿は左大臣の家にいた。彼の若い妻は、いつも通り、彼と語りたいという希望を特に示さなかった。彼は、くやしくなって、小さい声で(『すげを掻きながら』と言われるように)東のコトの弦を弾き、最も優しい声で「遠いヒタチの自分の田で働いている…」と朗詠した。 コレミツが来た時、ゲンジはすぐに彼を呼び寄せた。起こったことを聞いて、少なからず不安になった:『父親の家から彼女を連れ去ることはもう成功しなくなるだろう、どうしようもない軽薄な人、年少者の略奪者として知られる危険に自分をさらすことはできないから。だから、皇子が迎えにくる前に彼女を連れ去り、厳しく・ごく厳しく侍女達に黙っているよう命じ、しばらくの間全てを秘密にする必要がある。』 「暁にそこへ向かおう。車はそのままにして、護衛を一人か二人用意せよ」と彼は指示して、コレミツは退出した。</p>
<p>92 思案のあげく、光源氏は滞在中の左大臣邸から夜明け前に出かける</p>	<p>「どうしたらいいだろう?世間に、私について良からぬ評判が立って、私は狡猾な誘惑者と呼ばれるようになってしまうだろう。もし大人で分別のある方の話なら、人々は『きっと、双方の合意の下で関係を結んだのだろう』と思い決めて、私を非難し始めないだろう。でもこの場合は…もし皇子に事実が露見したら、私は甚だ困難な状況に陥ってしまうだろう。」 ゲンジは、どのように決意したら良いか分からず躊躇したが、このような機会を逃したらあまりにも口惜しいだろうから、暁を待ち仰せずに彼は大臣の家を去った。若奥様は普段通りごくちなく愛想がないまだった。 「私が自分自身で実行を監督しなければならない重要なある事を、急に思い出しました。ですから私は出かけますが、すぐに戻ります。」この言葉と共にゲンジは、気付かれずに寝所から抜け出すことができた。 自分の部屋に忍び込んで、ノウンに着替え、すぐに、コレミツだけに伴われて、出発した。</p>
<p>93 少納言の乳母が応対に出るものの光源氏は制止も聞かずに奥へ入る</p>	<p>彼らが門を叩く音に即座に、何も疑わずに開けられて、車は静かに屋敷に導き入れられた。コレミツが横の戸を叩いて咳をすると、ショウナゴンは彼と分かって出てきた。 「チュウジョウ殿がお越しになりました」とコレミツは知らせる。 「私どもの幼い姫君はもうお休みになっています。どうしてこんなに遅くに?」とショウナゴンは尋ねるが、自分では『誰か恋人のもとからの帰りに違い…』と思っている。 「姫君を皇子の家に移らせる支度をしていると耳にして、彼女がまだここにいるうちに、彼女と少し話そうと決心したのです。」とゲンジは説明する。 「何についてでしょう?まさか殿様は、この子が彼に返答できる能力があるとみなしていらっしゃるのでしょうか?」とショウナゴンは笑う。だがゲンジは、彼女に聞く耳を持たず、内部の部屋に入って行く。 「この私どものところには、年配の婦人達があります、」と乳母は困惑してつぶやく。「彼女達は、誰かに見られることを全く考えに入れずに寝ています。」 「姫君は、恐らく、まだ目覚めていないだろう。ならば、私が自分で彼女を起こそう。朝霧がこんなに素晴らしい時に寝ていることができようか?」そしてゲンジは寝台の覆いの中に入って行き、それがあまりにも素早いので、婦人達は「あっ」と言うのも間に合わない。</p>
<p>94 光源氏は父宮の使いであると嘘をついて、寝ている紫の上を起こす</p>	<p>女の子は平穏に眠っていて、ゲンジは、少し持ち上げて起こそうとする。彼女はすっかり目覚めてはおらず『きっとお父さんだろう』と彼女は思うが、彼は、彼女の髪を撫でながら言う: 「私と一緒に行きましょう!私は皇子様の使いで来たのです。」 女の子は彼を見て、予想外のことに震えている:『でもこの人は皇子ではないじゃないか!』『恥ずかしく思うべきです。まさか私は皇子に劣るのでしょうか?』とゲンジは言い、女の子を抱いて、コレミツやショウナゴン等の人々の不審の叫び声に送られながら出て行く。</p>

<p>95 二条院へ誰か来るようにと指示して、光源氏は紫の上を連れて行く</p>	<p>「私は、あなた方を訪れる機会が十分なほど頻繁にはなくて心配している、と言っていて、幼い姫君をより相応しい場所に移すようお願いしていたではありませんか。あなた方は、私の依頼を無視して、私が手紙も書いてはいけなくなる皇子のもとへ彼女を行かせるのですね。あなた方の内一人が彼女に同行してよろしい」と彼は婦人達に話しかける。「信じて下さい、貴方は最も不適当な時を選びました。」と動揺したショウナゴンは言う。</p> <p>「明日皇子様が来たら、私達は彼に何と言ったらいいのでしょうか？もう少し待って下さい、もしあなた方の結び付きが本当に運命付けられているのなら…ああ、貴方は私どもを極めて困難な状況に置いています。」</p> <p>「よろしい、あなた方は後で来るがいい。」とゲンジは言って、車を家のもっと近くに寄せるよう命じる。</p> <p>婦人達は、途方に暮れてどうしたらいいか分からず、女の子は恐怖で泣いている。姫君を引き止められないと理解して、ショウナゴンは昨晚縫った装束を集め、このような折に相応しい衣装に着替え、車に乗る。</p>
<p>96 少納言の乳母は困惑するもの紫の上のことを思って涙をこらえる</p>	<p>二条院は遠くない。そこへまだ気付かれずに到着して、車を西の離れの側に止め、ゲンジ自身が出て来て、女の子を優しく胸に抱きながら連れ出す。</p> <p>ショウナゴンはためらう：</p> <p>「ああ、私はまだ夢の中にいます。今や私はどうしたらいいのでしょうか？」と彼女は嘆き、ゲンジは答える：</p> <p>「それは貴方のお心にかなうように。姫君は移しました、貴方はもしご希望なら、戻ってもよろしい、貴方を送り戻すよう指示しましょう。」</p> <p>それでは何をしようか？ショウナゴンは車から出ざるを得ない。おお、この全ては何と思いがけず、信じ難く、不安であることか！</p> <p>『皇子様は何と思うのでしょうか、何と言うのでしょうか？そして姫君はどうなることでしょうか？身近な人々皆に去られてしまうことは、何と不幸なことか！』とショウナゴンは悲嘆して泣く。しかしながら、今涙は不吉だと悟り、自分を落ち着かせる。</p>
<p>97 紫の上のために、光源氏は通常は使わない対屋に調度などを整える</p>	<p>西の離れには普段誰も住んでいなかったの、そこには寝台の覆いすらなかった。コレミツを召して、ゲンジは寝台の覆いを掛けること、屏風を置くこと、一言わば、全てを然るべき有様に整えるよう依頼した。最初は、可動式カーテンの垂れ幕を下ろし、床に座る所を設けるにとどまっていた、東の離れに寝具を取りに行かせて、お休みになった。</p>
<p>98 二条院へ連れてこられた紫の上は、気味が悪くなり体をふるわせる</p>	<p>女の子は、全く怖じ気づき、恐怖に震えていたが、大声でなく決心もできなかった。</p> <p>「私はショウナゴンと寝ます」と彼女は可愛らしい子供の声で言った。</p> <p>「もう貴方はショウナゴンと寝てはいけません」とゲンジは説明し、彼女はちっちゃな声ですすり泣きながら、素直に彼の隣に寝た。</p> <p>乳母は、全く打ちのめされて、横になる力すらなく、まさに夜明けまで眠らずに座り通した。</p>
<p>99 少納言の乳母は、輝くばかりの立派な二条院で間の悪い思いをする</p>	<p>だが空は明るくなり、彼女は周りを見渡すことが出来た。家やその調度については言うに値しようか？庭の砂ですら、まるで地面に高価な真珠が蒔かれているかのように輝いていた。彼女は、自分の憤ましい衣装が恥ずかしくなったが、幸い、間近には誰もいなかった。</p> <p>通常西の離れではたまさかのお客を受け入れていて、ここには、葦のブラインドの外に場を占めている数名の召使いの他は、誰も住んでいなかった。</p> <p>ゲンジが誰かを連れてきたという噂は既に何人かの家僕には届き、彼らは『彼女は一体誰だろう？単なるいつもの恋人ではなさそうだ…』とささやいていた。</p>
<p>100 かわいらしい女童を呼び寄せた光源氏は休んでいた紫の上を起こす</p>	<p>洗面の水や朝のお米は西の離れで出された。ゲンジが起き上がった時、太陽はもう全く高く出ている。</p> <p>「貴方は、婦人達がいなくて気詰りに違いない。貴方にとって、この人のお世話なしにはやっていけないという人々を夕方に呼びにやって下さい、」とゲンジは言い、東の離れから女の子の召使いを呼んで来るよう指示した。</p> <p>「最も幼いを選びなさい」と彼は命じて、すぐにかなり可愛らしい外見の女の子が四人連れて来られた。</p> <p>幼い姫君は以前通り、ゲンジの衣にくるまって寝ていたが、彼は彼女を起き上がらせた：</p> <p>「怒らないで下さい。私が悪い人なら、まさか貴方にこのように接するでしょうか？女性は柔和であるべきです。」</p> <p>あらゆることから判断して、彼は直ちに彼女のしつけに着手しようと決めたようだ。</p>
<p>101 紫の上の気をひこうと、光源氏は面白い絵などを見せて相手をする</p>	<p>今日女の子は彼にはいっそう魅力的に見えた。ゲンジは愛想良く彼女と語り、それから美しい絵やおもちゃを、それらが彼女の子供心に近づく道を彼が見つけるのを助けるだろうと期待して、取りに行かさせた。とうとう彼女は起き上がり、皺になった暗い灰色の衣を着ている姿で彼に近づいて純粋に微笑み、そのためにさらに可愛らしくなった。彼女を眺めて、思わずゲンジも微笑んだ。</p>
<p>102 紫の上は光源氏が留守にしている間に、二条院のあちこちを見回す</p>	<p>間もなく彼は東の離れに去って行き、幼い姫君は、内部の部屋から出て、屏風を通して木立や池を眺め始めた。</p> <p>池の側の霜で輝く花が絵のように素晴らしく、庭には、彼女がこれまで見たことがなかった四位や五位の官吏達が動き回っていた。『そう、ここは本当に良い』と彼女は思った。屏風を熟視し、美しい絵にうっとりして、女の子は速く慰められた。このように、子供の悲しみは長くは続かない。</p>
<p>103 留守にする光源氏は紫の上のために手習いの手本などを残していく</p>	<p>数日間続けてゲンジは宮殿にも行かず、何時間も、自分の幼い養い子を少しずつ自分に慣らしながら、彼女と語らった。彼は、彼女の為に数多くの手本を — 書道や絵画の腕を磨く為に — 用意し、ついでのように少なからず素晴らしい作品を創った。</p> <p>紫の紙に『だが“ムサシの谷”と聞くと — 密かにため息をつく…』と書き、女の子は、紙を手にとって、彼の筆によって書かれた並々ならぬ優雅な字にうっとりすると、ということがあった。彼はその紙の端に、全くとく小さく書く：</p> <p>心が惹かれる この摘まれていない芽に。 根で結びついている それは、露が密集して 手が届かないムサシの花と…</p> <p>そして、女の子に向かって、願うする：</p>

<p>104 光源氏は紫の上へ手習いを教え、人形などの家を作って一緒に遊ぶ</p>	<p>「今度は貴方が書いてください…」 「私にはできません、」とゲンジの方に目を上げて彼女は答え、それがとても純粋で魅力的なので、彼女を眺めると微笑まじにはいられない。 「いつも『できません』と繰り返すのはいけません。どうしなければならぬのか、やってみせましょう」とゲンジは言う。 それで姫君は、彼から顔を背けて書き始めた。彼女はまだ全く上手に書けず、子供らしい筆の持ち方であるが、いかに奇妙であっても、彼女の下書きですら彼を感じ入らせる。間違っただけ書いたことを恥じて、女の子は書いた物を隠すが、彼は紙を彼女から取り上げて覗き見る：</p> <p>「理解できません、 君の歌の秘められた意味は何か。 私には未知だ、 どんな花と私は かくも密接に結びついているのか。」</p> <p>彼女は優雅に、丸みのある字で書き、彼女の筆跡はかなり将来有望である — まだ全く子供らしいけれども。何か亡き尼の手跡を思い出させるものがある。『もし今風の習字手本で習ったら、素晴らしい書くようになるだろう』とゲンジは、彼女が書いた物を眺めながら思った。彼は、彼女の為に人形の家を作り、彼女と遊びながら、自らの悲しみを忘れていた。</p>
<p>105 事情を知らぬ兵部卿宮は紫の上の失踪を嘆き、少納言の乳母を疑う</p>	<p>その頃、ヒョウブキョウ皇子が娘を迎えに来て、家に残っていた侍女達は、彼に何と答えて良いか分からず、完全に絶望していた。全てを秘密に保つようにとのゲンジの命令を覚えていて、またやはり厳しく・非常に厳しく余計なことを言わぬよう禁じたショウナゴンの指示に従って、彼女達はあらゆる質問への答えに一つのことを繰り返すばかりだった：</p> <p>「どこへ彼女が去って行ったか、私どもには知らされておられません。ショウナゴンが誰にも何も言わずに彼女を連れ去りました。」 ヒョウブキョウ皇子は、これ以上詳しく質問をしても意味がないと理解して、言った：</p> <p>「亡き尼は常に、娘を自分のもとに引き取ろうという私の意向に反対していた、それで乳母は、かなり決断力のある人物で、私に直接反対する勇氣はなく、それでも彼女を連れ去ることを自分の義務とみなしたのだ。もし何か分かったら、知らせて下さい、」と彼は頼み、それは婦人達をいっそう困惑させ、まもなく涙を流しながら退出した。 皇子はソウツ・僧からも何か情報を得ようと努めたが、どこにも何の跡も見つからず、ただ優しい気持ちと悲しみを持って女の子の可愛らしい容顔を思い出ただけであった。</p>
<p>106 継母の北の方は、紫の上を意のままにできなくなったのを残念がる</p>	<p>北の間の夫人も、かくも思いがけない出来事の展開を口惜しがった、なぜなら、最近はかつてのライバルに対する反感を忘れ、子供が完全に彼女の世話に任せられることを喜んでいたのである。</p>
<p>107 紫の上は尼君を慕って泣く時があるものの、光源氏にもなれ親しむ</p>	<p>とかくするうちに西の離れには次第に、女の子に仕える婦人達が全て集まってきた。彼女の遊び相手となる幼い女の子達と男の子達は平穩に遊び回っていて、幼い姫君の鮮やかな美しさは皆を魅了していた。 殿が家にいなくて、一人孤獨に夕方を過ぎなければならぬ時にのみ、女の子は年老いた尼を恋しく思い出しながら痛ましく泣いていた。一方、父親について彼女はほとんど考えなかった。幼年期から彼とは非常に稀にしか会わないことに慣れていて、彼女は心から新しい自分の保護者になつた。</p>
<p>108 光源氏は、かわいらしい紫の上を「風変わりな秘蔵っ子」だと思う</p>	<p>ゲンジが家に帰ると、彼女は誰よりも速く彼を迎えに走り出てきて、愛想良く彼と語り、彼が抱いても、もう恥ずかしがったり困惑したりしなくて、彼女の天真爛漫さは驚くほど感動的である。 『分別あり慧眼な成人の女性は、あらゆる事に関して非常にしばしば、夫婦生活を極度に複雑化してしまう傾向にある。男性は、彼の気持ちにどんな変化があったかを彼女に気付かれぬよう常に神経をとがらせていなければならず、彼女の方も次第に何らかの事でいらいらしたり、恨んだりする…一方、私の養子とは — 洗練された遊びで時間を過ごすのは気楽で愉快である。娘とは、このような年齢に達すれば、かくのごとき密接さは考えられず、昼も夜も一緒に過ごすことは不可能ではないか。実に、私は珍しい宝物を手に入れたものだ』 — ときっとこのようにゲンジは考えたようだ。</p>